222
Ko12

始

コ-1494
つ
222
K612

詳說東洋歷史

小林博著

（上卷）

東京
大同館藏版

大正
15. 8. 3
内交

序

東洋文化の精神方面が、西方物質文化に對立しつゝあることは、吾人の欣快とする一つである。我が亞細亞洲が、よく精神的に大偉人を輩出し、殊に全世界の宗教界を、風靡しつゝあるが如きも、亦吾人の誇りとする一つである。

我が日本文化の一背景である、悠遠な儒教佛教の國の研究は、東洋の先進國たる我が國の任務とも見るべく、殊に支那に於ては實に然りとなさねばならぬ。

近時大東文化の語は、既に學界の各方面に聞かれ、東洋史の研究も著しく進み、自他共に我が國を以て、其の重きを許しつゝあるは、當然の事ながら是亦、吾人の悅を禁じ後ぬ一つである。

然るに我が國一般の社會では、曩に物質文明の輸入を先決急務とした惰勢上、未だ東洋歷史に對する一般の參考書に乏しく、寧ろ西洋方面の夫れに關する書が、比較的に多いかの如く見受けられる。

時勢は既に推移し、各方面の舞臺は、漸次東洋方面に轉回し、就中、支那に關する諸問題の如きは、常に全世界の視聽を集めつゝある。從つて同種同文、善隣の好誼と其の輔導とに任ずべき

我が國には、其の僅少な事件關係も、一々影響する處大なるものがある。

故に我が國は、常に周到の用意を忘らず、此の先決問題として、東洋諸國興亡の概略　其の國民性の如何を學び、更に進んで東洋文化を究むることは、唯に精神文化の糧とするばかりでなく重要な事であり、且つこれが研究は尙今後益々隆盛に赴くべきことゝ確信する。

尙ほ本書の上梓に關して、柏崎中學校教諭前田傳造氏の御助力を仰ぐことが多い、玆に深く謝意を表する次第である。

大正十五年四月

編者識

例言

一、本書は文部省中等教員檢定東洋史受驗者の參考書たらんことを期したり、

一、本書は大體に於て文部省中等教授細目に據り、諸教科書と對照し、史實の敷衍に努め、且つ生徒の質問興味點等に留意し編纂せしを以て、必ず中等學校に於ける教授參考の一資料たるべきことを信ず。

一、本書は高等學生及び普通程度東洋史研究者諸賢の參考書たるをも信ず。

一、本書は塞外史及び文化史に意を注ぎ、又重要なる漢史籍並に漢籍の管見を附せり。

一本書は大正十五年四月迄の事件を詳記し　卷末には文部省中等教員檢定試驗東洋史問題を一括して附錄としたり。

詳說

東洋歷史

目次

第一卷　上古期

第一篇　支那太古及び周(春秋・戰國時代)

第一章　支那の太古……一

第一節　支那の傳說時代……一

支那の地勢…漢族の來住…三皇の治績…黃帝軒轅氏…帝堯陶唐氏…帝舜有虞氏…漢族の起原地…三皇五帝の說…堯舜時代の官制…指南軍…五色の石

第二節　夏殷の時代……八

禹王の政治…禹王の仁德…王位世襲…孔甲と龍との傳說…桀王の暴虐…夏の世系…殷の初世…伊尹…磐庚の遷都…紂王の暴虐…殷の三仁…殷の世系

第二章　周初の政治及び制度……一四

第一節　周初の政治……一四

周の文王…桀…文王の仁德…太公望…周の武王…伯夷・叔齊…成康の治周の世系…
宣王の中興…周室の東遷…褒姒
第二節　周の制度……一九
封建の制度…周の官制…田制及び稅法…兵制…刑律…學制…喪祭と樂器…周代の風俗
第三章　春秋時代……二八
第一節　春秋の列國……二八
春秋時代…夷狄の跋扈
第二節　春秋の五霸……三一
春秋の五霸…齊の桓公…管仲…宋襄の仁…晉の文公…秦の穆公…楚の莊王…吳王夫差…伍子胥…越王勾踐…范蠡
第四章　戰國時代……三九
第一節　戰國の七雄……三九
戰國時代…陪臣の專橫…魯の三桓…齊の田氏…晉の六卿…知伯と趙襄子…豫讓…
戰國の七雄

第二節　秦の勃興及び共の一統……四四
孝公の發憤…商鞅の變法…商鞅…合從の策…連衡の策…秦の世系…遠交近攻の策…六國の滅亡…列國の交際…孫臏と龐涓…樂毅と田單…戰國の四君…秦の一統
第五章　周末の學術……五四
第一節　儒、道二敎の起原……五四
學術の勃興…儒家…荀卿…道家…列子…莊子
第二節　諸子百家及び文學……五八
諸子百家…揚子…墨子…法家…兵家…名家…縱橫家…雜家…農家…先秦の古書…文學…雜事一般…貨幣
第二卷　中古期
第二篇　晉・兩漢・三國及び西晉
第一章　秦の興亡……六六
第一節　始皇帝の政策……六六

始皇帝の政…始皇の内治…始皇の外征

第二節　秦の滅亡……六九

始皇の殂落…趙高の專横…宦官…群雄の蜂起…項羽と劉邦…秦の滅亡…秦の世系…傳國璽

第二章　西漢の初世……七四

第一節　漢楚の分爭……七四

項劉の反目…關中…范增…項羽の覇業…劉邦の關中經營…漢楚の攻戰…漢楚大勢の逆轉…項羽の敗死

第二節　高祖の施政……七八

高祖の治…高祖の名節…高祖の制度…漢の三傑の末路…商山の四皓

第三節　文帝の治世及び吳楚七國の亂……八二

呂氏の亂…西漢の世系…文帝の仁政…諸王の驕恣…賈誼の治安策…賈誼…吳楚七國の亂…景帝の治世

第三章　西漢の中世……八八

第一節　武帝の治世……八八

儒學の奬勵…武帝の諸侯王對策

第二節　武帝の匈奴對策……九〇

匈奴の勃興…冒頓單于…高祖の匈奴親征…匈奴の俗制…武帝以前に於ける匈奴…武帝の匈奴挾擊…匈奴征伐…匈奴の敗退…大月氏の建國…西域諸國の情勢…張騫の遠征…匈奴の連敗…烏孫との同盟…其の後の匈奴征伐

第三節　南方諸國及び朝鮮の服屬……一〇〇

南越の平定…西南夷の平定…司馬相如…古朝鮮と漢との關係…半島の南部諸國…九州地方酋長の漢との交通…武帝の失政…

第四章　西漢の中末世及び東漢の初世……一〇六

第一節　宣帝の中興……一〇六

霍光の攝政…霍光の廢立…宣帝の政治…匈奴の擊攘…呼韓邪の投降…馮奉世と趙充國…蘇武典屬國となる…麒麟閣

第二節　宦官及び外戚の專横……一一一

宦官の專恣…西漢の世系…外戚の跋扈…王莽の簒立

第三節　王莽の諸政、群雄の興起……一一四

王莽の施政…群盜群雄の蜂起…昆陽の戰…新の滅亡

第四節　東漢の諸政……一一七
光武帝の即位…群雄の平定…劉盆子…馬援…隴を得て蜀を望む…光武帝の施政…東漢の世系

第五章　佛教の弘通……一二三

第一節　太古の印度……一二三
印度アーリヤの南下…四種姓の區別…アーリヤ族…波羅門姓の起源…アーリヤ族の文化…古代印度の諸書…波羅門教…摩奴法典

第二節　佛教の興起……一三〇
波羅門族の專横…釋迦の出生…佛陀の布教…提婆達多

第三節　佛教の傳播……一三三
亞歷山大王の東征…阿育王の出世…迦膩色迦王の出世…迦膩色迦王と佛教の支那傳來…第四回結集…佛教の東漸…佛教東漸の諸傳說…明帝時の佛教傳來に就いて

第六章　東漢の中末世と群雄の割據……一四〇

第一節　東漢と西域との關係……一四〇
南北匈奴…班超の遠征…匈奴の西移と西域…太秦との交通…

第二節　外戚及び宦官の專横……一四五
明・章二帝の政…外戚竇氏の跋扈…外戚鄧氏と閻氏…太尉楊震の死…外戚梁氏の跋扈…宦官の專横

第三節　東漢の黨錮……一五〇
黨人の禁…黨人の大獄…東漢の外戚宦官交替表

第四節　海内の騷亂、群雄の興起……一五四
黄巾の賊…州牧の就任…袁紹と董卓…曹孫獻帝を奉ず…官渡の戰…赤壁の戰…桃園に義を結ぶ…蜀漢の五虎將軍

第五節　曹魏の簒奪と東漢の滅亡……一六〇
荆益二州の平定…東漢の滅亡

第七章　三國及び西晉……一六三

第一節　三國時代……一六三
蜀吳の和戰…蜀魏の攻爭…魏の明帝…司馬氏の專横…蜀漢の滅亡…蜀漢の世系…魏の滅亡…魏の世系…吳の滅亡と晉の一統…吳の世系…西晉の世系…

第二節　西晉の治世と其の滅亡……一七一

武帝の失敗…八王の亂…清談の流行…阮籍と阮咸…西晉の滅亡

第八章　秦、西漢、三國及び西晉の制度文化……一七五

第一節　秦、西漢の制度……一七五

秦・西漢の官制…秦・西漢の兵制…田制及び法制…選擧任官の法

第二節　秦・西漢の學術……一八〇

秦・西漢の學說…經學の傳統…西漢時の文學…東方朔と枚皐…史學…陰陽五行說…天災地變の迷信と陰陽說…

第三節　東漢・三國及び西晉の制度……一八七

東漢・魏・晉の官制…東漢・魏・晉の兵制…東漢・魏・晉の學說…東漢・三國・晉の文學…蔡邕と張衡

第三編　五胡十六國及び南北朝

第一章　前、後趙國と東晉の初政……一九五

第一節　劉淵の興起と晉室の東遷……一九五

劉淵の世東…兩都の陷落…晉室の東遷

第二節　塞外種族(五胡)……一九七

匈奴及び羯…烏桓及び鮮卑…氐及び羌

第三節　前後、兩趙國の興亡……二〇〇

前趙・後趙の攻爭…漢の世系…後趙の興亡…石勒…後趙の世系

第四節　東晉の初世……二〇四

王氏の跋扈…王敦の反…東晉の世系…蘇峻の反…陶侃

第二章　五胡十六國の盛衰興亡と東晉の末運……二〇七

第一節　前燕、前秦の興起と桓溫の功業……二〇七

江北の分裂…前燕の興起…燕の世系…前秦の興起…前秦の世系…桓溫の北伐

第二節　前秦の興隆と其の分裂及び東晉の滅亡……二一二

前秦の興隆…前涼の世系…王猛…淝水の戰…前秦の滅亡…淝水戰後の東晉…孫恩・桓玄の亂…劉裕の功業…東晉の滅亡

第三節　後魏の興起及び南北朝の成立……二一九

拓跋氏の崛起…後魏の初世…五胡十六國…五胡十六國の興亡表…五胡十六國表

第三章　南北朝時代……二二五

第一節　後魏の外征と其の極盛……二二五
後魏の西域經路…柔然の興亡…後魏の極盛…孝文帝の改革
第二節　宋及び齊の興亡……二二九
宋の治世…宋の滅亡…宋の世系…齊の治世…齊の滅亡…齊の世系
第三節　後魏の分裂と梁の興亡……二三三
宣武帝と胡太后…爾朱榮の專横…後魏の分裂…東西魏の對立と滅亡…後魏の世系…梁の武帝…梁の滅亡…梁の世系
第四節　北齊、北周及び陳の興亡……二四〇
北齊の興亡…北齊の世系…北周の興亡…北周の世系…陳の興亡…陳の世系
第四章　東晉及び南北朝時代の制度文化……二四六
第一節　制度……二四六
東晉・南北朝の官制…東晉・南北朝時の田制…東晉・南北朝時の兵制…東晉・南北朝時の法制…選擧の方法
第二節　東晉・南北朝時代の學術……二五〇
東晉・南朝の經學…北朝の經學…文學…陶淵明…謝靈運…史學…佛教…傳道僧及び求道僧…石窟等の遺蹟…道教…虎溪の三笑…繪畫の發達…書道の進歩

第四篇　隋唐の時代

第一章　隋の興亡……二六三
第一節　隋初の隆盛……二六三
文帝の治世…煬帝の弑虐…煬帝の奢侈…大運河…煬帝の外征
第二節　隋の滅亡……二六八
隋末の大亂…隋の滅亡…隋の世系
第二章　唐の初世及び外國との關係……二七一
第一節　唐初の情勢と高祖太宗の治……二七一
群雄の平定…高祖の政治…太宗の治…杜如晦と房玄齡…王珪と魏徵…李靖と李勣
第二節　漢末以後の朝鮮……二七四
高句麗の建國…高句麗の强盛…百濟の盛衰…新羅及び任那…半島三國の形勢
第三節　隋、唐と朝鮮の關係及び新羅の一統……二七九
隋と高句麗…唐と高句麗…百濟・高句麗の滅亡…百濟の世系…高句麗の世系…新羅の

朝鮮一統…隋唐と我が國との關係

第三章　唐と西域諸國及び印度との關係……二八五

第一節　唐の興起前に於ける西域諸國の情勢……二八五
安息と波斯…笈多王朝と超日王…嚈噠の興亡

第二節　突厥の興亡及び隋唐と突厥との關係……二八八
突厥と柔然…東西突厥の分裂と攻爭…隋と突厥…唐と東突厥…鐵勒諸部…東突厥の餘業…東突厥の世系…高昌の滅亡と西域…西突厥の盛衰

第三節　吐蕃、印度、大食、波斯と唐との關係……二九五
吐谷渾と黨項…吐蕃と唐との關係…印度と戒日王…印度と唐との關係…大食と波斯

第四章　唐の中世……三〇〇

第一節　唐の屬地統御と東西の交通……三〇〇
唐の版圖の膨大…陸路の交通貿易…海路の交通貿易

第二節　武后及び韋后の內亂……三〇三
高宗の晩年…則天武后…狄仁傑…婁師德と魏元忠…韋后の專橫

第三節　玄宗開元の治……三〇七
開元の治…玄宗の怠政…十節度使の設置…李林甫と楊國忠の榮進

第四節　安史の大亂……三一一
安祿山の榮進…安祿山の奸點…安祿山と楊國忠…安史の亂前の狀況…安祿山の擧兵…玄宗の出奔…賊の形勢と祿山の死…顏常山と張睢陽…史思明と二帝の還幸…安史の大亂の終末…玄宗時代の節度使

第五章　唐の末世……三二一

第一節　唐の中世以後に於ける塞外諸國……三二一
回紇の盛時…回紇の衰微と黠戛斯…吐蕃の盛衰…南詔の盛衰

第二節　藩鎭の跋扈……三二五
唐の世系…河北の三鎭…藩鎭の兵亂…憲宗と藩鎭…淮西の戰…憲宗の晩年

第三節　宦官の專橫と牛李の黨爭……三三一
宦官の親任と政紊…憲宗以後の宦官の狀勢…甘露の變…朋黨の爭…黨爭の終末…宣宗の治績…財政の困難…劉晏の鹽法

第四節　唐の滅亡と郡雄の割據……三四〇
王仙芝、黃巢の亂…李克用と黃巢…昭宗の卽位と宦官の誅戮…唐の滅亡

第六章　隋、唐の文化……三四四

第一節　制度……三四四

日唐制度の比較…同平章事と使相…刺史と太守…翰林院學士…兵制…田制稅法…義倉、常平倉及び社倉…法制…官吏の選擧法

第二節　唐代の學術……三五六

學術の狀況…經學…五經正義…唐初訓詁の大家…史學…文學…李白と杜甫…王維
韓愈…柳宗元…白居易と元稹…杜牧

第三節　唐代の宗教……三六四

佛教の大勢…佛教の各宗派…玄奘…義淨…密教の興隆…僧一行…禪宗と其の分派…
道教…道教と支那人…方士の仙藥…化胡經…景教…太秦景教流行中國碑…摩尼教…
祆教…回教…淸眞寺…大食人との通商…唐代の書畫…地理及び曆數…年中行事

第三卷　近古期

第五篇　五代、宋、遼及び金

第一章　五代の興亡、契丹の興起……三八二

第一節　後梁、後唐の攻爭と其の興亡……三八二

群雄の割據…後梁と晉の攻爭…後梁の滅亡…後梁の世系…王彥章…後唐の興亡…後唐の世系…石敬塘の北邊割讓

第二節　契丹の興起、渤海の興亡……三八七

契丹の太祖…太祖の內治と外征…渤海の興亡…渤海の名稱…渤海の五京…述律皇后の攝政

第三節　契丹の來侵、後晉、後漢の興亡……三九一

契丹の來侵…後晉の世系…太宗の北歸と世宗…後漢の興亡

第四節　後周の興亡、五代の形勢……三九五

後周の世宗…高平の戰と世宗…後周の滅亡…後周の世系…五代の十國…五代十國興亡表…五代の形勢…馮道

第二章　北宋の前期……四〇一

第一節　太祖及び太宗の一統……四〇一

太祖の內治…太祖の一統…太祖の仁政…太祖の微行…趙普

第二節　宋遼の和戰……四〇一

宋と交趾との關係…宋遼の交戰…壇州の役…新羅の滅亡と高麗…新羅の世系…高麗と宋遼との關係…眞宗の治世…寇準

第三節　仁宗の治、遼の極盛、西夏の興起……

仁宗慶曆の治…慶曆の黨議…宋代の黨爭…濮議…曹太后と英宗…遼の極盛…西夏の興起…西夏と宋遼の關係…范仲淹…富弼

第三章　北宋の後期……

第一節　神宗の改革と其の外征……

改革の動機…宋の財政困難の理由…王安石の登用…制置三司條例司…新法の厲行…生老病死苦…交趾との交戰…河湟の役…遼との交渉…西夏との交戰

第二節　新舊兩法黨の爭……

司馬光等の舊法…洛・蜀・朔の三黨…慶曆の爭…哲宗の紹述…舊法黨と調停…徽宗の紹述…蔡京の專横…徽宗の奢侈…遼宋の衰微

第四章　女眞(金)の興起、遼及び北宋の滅亡……四三八

第一節　女眞の興起と遼の滅亡……四三八

女眞の阿骨打…宋・金の夾擊…遼の滅亡…遼の世系…西遼の建國……

第二節　北宋の滅亡……四四二

金の太宗の南進…宋・金第二の和議…靖康の難…金人の漢名…宋の世系

第五章　宋金對立時代(南宋の世)……四四六

第一節　宋の南渡、宋金の和戰……四四六

宋の南渡…金軍の南進…齊の興廢…宋・金當時の狀勢…秦檜の專横…宋・金第三の和議…文字の獄…岳飛

第二節　金の盛衰と宋の衰微……四五二

金帝亮の簒立…采石の戰…金の五京…宋・金第四の和議…金の世宗の治…金の世系…宋・金第五の和議…僞學の禁

第六章　宋代の制度及び文化……四六〇

第一節　宋代の制度……四六〇

宋の官制…遼・金の官制…宋の兵制…田制　刑法

第二節　宋代の學術……四六二

學校と科擧…理學の勃興…理學の諸大家…白鹿洞書院…朱子の學說…史學…北宋の文學…南宋の文學

第三節　宋代の宗教書畫及び雜事……
佛教…道教…宋代の繪畫…宋代の書…筆・墨・紙・及び印刷術…宋代の商工業

附錄

正史（二十四史）……一
漢史籍名著解題……三
周易…尙書…毛詩…禮記…春秋…大學…論語…孟子…中庸…孝經…爾雅…五經…六經…九經…十三經…石經…四書…十七史…二十一史…二十二史…二十四史…竹書紀年…資治通鑑…大事紀…資治通鑑鋼目…宋元通鑑…御批通鑑輯覽…續資治通鑑…三朝北盟會編…繹史…聖武記…國語…戰國策…貞觀政要…十八史略…宋史新編…孔子家語…蒙求…歷代名人年譜…吳越春秋…江南野史…史通…唐鑑…近思錄…老子…烈子…莊子…墨子…管子…韓非子…六韜…孫子…吳子…七書…公孫龍子…淮南子…千字文…白氏文集…梵辭…文選…通典…文獻通考…大明律…大唐西域記…天下郡國利病記…讀史方輿紀要…玉篇…康熙字典…文心彫龍…馬氏文通…太平御覽…玉海…永樂大典…三才圖會…淵鑑類函…欽定古今圖書集成…呂氏春秋…三體唐詩…唐詩選…考信錄…文章軌範…群書治要…欽定續文獻通考…欽定皇朝文獻通考…欽定皇朝通典…欽定皇朝通志…三通…九通…大清一統志…水經…佛國記…白虎通義…陔餘叢考…風俗通義…山海經…酉陽雜俎…歸潛志……二八

詳説

東洋歷史

小林博著

第一卷 上古期

第一篇 支那太古及び周(春秋・戰國時代)

第一章 支那の太古

第一節 支那の傳説時代

支那の地勢 亞細亞中央のパミール高原は、世界の屋根と稱せられ、亞細亞脊梁の大山脈、此處より分派するもの多し。卽ち南端より西に連なれるはヒンヅークシ山脈、東に連なれるは崑崙山脈にして、東南に連り印度、支那共和國の界をなすは、ヒマラヤ山脈なり。崑崙の東走せる

バヤンカラ山脈の北麓よりは、黄河出でゝ渤海に入り、南麓よりは楊子江出でゝ東海に注ぐ。河江（黄河は單に河、楊子江は江、或は夫々河水、江水と稱せらる。）流域の大平原は、實に支那の本土をなす。

漢族の來住　今より凡五千年前漢族西北方より來住し、黄河流域に地を占め、次第に先住民族たる苗族を征服し南方に驅逐して、淮水楊子江の地に及びたり。その頃漢族は次第に遊牧の俗より脱し、沃野を選みて土着し、幾千の部落を作り、各君長ありて之を支配し、所謂萬國の時代をなして東洋文明の基礎を開きぬ。此等の君長は各〻后と稱せしが、未だ一統せられず、群后中より戴かれて元后即ち天子となるものあれども、其の子孫永續せざりき。傳説によれば開闢の始めに當り、盤古（ハンコ）氏と云へる君ありて山川、草木、及び人類を作り、天皇・地皇・人皇の三氏出でて其の子孫繁殖し、其の後有巢（イウソウ）氏出で（水を防へて巢となし木實を食ふ）更に燧人（スイヒン）氏に及べり。燧人氏は初めて燧（ヒウチキ）を鑽りて民に火食を教へ、金屬を以て器具を製する法を授け、三皇五帝の先をなせども、何れも書契以前に在れば、其の年代世系國都共に明かならず。

三皇の治績　燧人、伏羲（大昊（コウ）又は包犧（ハウギ））神農（炎帝）を三皇と稱す。伏羲は蛇身人首、八卦を畫し書契を作りて結繩の政に代へ、嫁娶を制し佃漁、牧畜の法を教へたり。炎帝神農氏は木を以て耒耜（ライシ）（耜はすきにして耒は耜の柄なり）を作り耕を教へ、百草を嘗めて醫藥を製し、日中市をなし交易の途を開きたりと云ふ。

黄帝軒轅氏　五帝は黄帝・顓頊（センギヨク）・帝嚳（テイコク）・帝堯・帝舜を云ふ。黄帝、姓は公孫名は軒轅（ケンエン）、有熊（イウユウ）國（河南省河南府）の君たり、炎帝の世衰へ諸侯侵伐するや、干戈を以て天下を一統し百姓を救はんとし、諸侯の不享（フケウ）（來朝せざる諸侯）を伐ち炎帝の子孫と阪泉（ハンセン）の野（直隸省保定府の南）に戰ひ之を破り、蚩尤（シイウ）と涿鹿（タクロク）の野（直隸省宣化府）に戰ひて之を擒り、更に驩土（クヮンイク）（土耳其族）を攘ひしかば諸侯尊びて天子となせり。黄帝即ち涿鹿に都し天下統一の實を擧げ、文字を製し、舟車を作り、蠶業を起し、官職衣冠貨幣より曆法音樂の基を定む。此の時領土西は崆洞（クウトウ）（甘肅省西南）より東は海に至り、北は釜山（直隸省宣化府）より長江に達し、河江の間を定め支那統一の基を建てたり。

帝堯陶唐氏　顓頊高陽氏、帝嚳高辛氏の事績傳ふべきもの少く、帝嚳の子堯天子となれり。堯名は放勛（ハウクン）年十六にして位に即き平陽（山西省平陽府）に都し、仁德を以て民を撫せしかば、皆鼓腹擊壤して太平を樂めり。堯、羲氏和氏に命じて曆法を定め四時を分ち、虞舜を擧げて政を委ね、其の末年の洪水に際しては、鯀（コン）をして治めしが績あがらざりき。堯の子丹朱不肖なり、即ち位を舜に讓りて死す。

帝舜有虞氏　舜は顓頊六世の孫名は重華、父、後妻に惑はされて、舜の異母弟象（シヤウ）を愛し、常

に舜を殺さんとす。舜、孝悌を盡し之を怨む色なし、卽ち歴山に耕すや人皆畔を讓り、雷澤に漁するや人皆居魚の多き場所を讓れり。衆皆其の德を慕ひ、居る處聚部落の義をなし、二年にして邑となり、三年にして都となる。堯、其の至孝、聰明を聞き、之を畎畝より擧げて政を攝せしめ、娥黄、女英の二女を妻はせたり。

舜、相となり、諸侯の不享なる驩兜クワントウ、共工キヨウコウ、鯀コン、三苗サンベウの四凶を除く、九官、四岳、十二牧と咨ヘ、四海平穩にして民皆其の德を仰ぎ、南風の詩を謳ふ。舜の子商均不肖なり、乃ち百揆宰相にして九官の一なり。禹に位を讓れり。

堯舜卽ち唐虞の世は、支那政治の理想とせられ、孰れも仁德高き聖人として仰がる、後世支那の治を稱するもの　必ず堯舜を推せり。

○滿族の起原地　獨逸の地理學者にして、又東洋學者として有名なるリヒトホーフェン（Richthofen）氏は、世界人種の發源地を中央亞細亞とし、印度、波斯、歐羅巴の諸人種、皆此處より發せりとす、漢族も亦中央亞細亞に住めりとし、天山南路の和闐地方を、其の起源地に宛てしが、最も有力なる說となれり。其の他埃及、印度、亞米利加、カルディヤを起源とする諸說あれども、支那本部の西北方より來りしは動かすべからず。今日支那本部の大動脈として膏腴なる揚子江流域よりも、況濠多く氣候地味に於て、寒ゝられる黃河流域の先づ開明に赴きたるを見ればなり。

○三皇五帝の說　皇帝の二字は、元后卽ち天子の有力、有德なるものに加へし美號にして、後世（周末戰國の頃なるべしと云ふ）の稱呼なれば、皇三人、帝五代の美號にも諸說を生じたり。普通には燧人、伏羲、神皇を三皇とし、黃帝、顓頊帝嚳、帝堯、帝舜を五帝とせり。（風俗通、白虎通、及び司馬遷の史記）然れども僞作を以て稱せらるゝ孔安國の書經（實は孔安國の書經にあらず、晉人の僞作なる事は、淸の閻若璩によりて考證せられしが、唐の孔穎達等は知らず、之を眞書として採用し、久しく世を惑はせり。）の序によりしものには、伏羲、神農、黃帝を三皇とし、小昊（小昊金天氏を新に加ふ）顓頊、帝嚳、帝堯、帝舜を五帝とし燧人氏を省けり、此の說我國に久しけれども今は採らず。

○堯舜時代の官制　當時の政體は、一種の共和政とも云ふべく、諸侯卽ち群后は、有力、有德なる群后を推して元后とせしかば、王位繼承は、血統上卽ち後世に於ける世襲にあらず、實に人物上の如何にあり、而して其の實權は此等群后にありと知るべし。故に元后其の人を得ずんば、天下亂れ群后の跋扈を來すべく、舜が堯を助けて四凶を除きしは、此等を制せしに外ならず。然れども堯舜の頃より、聖帝上にありしを以て、漸次中央集權の實擧り、君權重きを加へたり。今其の重なる官制を擧ぐれば

九官（中央政府）

（一）百揆（百事を揆（カ）るの義）　禹（夏の祖先）之に任ず。
今の首相の如く庶政を總攬す。

（二）后稷（稼穡を司る后（カシフ）の義）　棄（キ）（周の祖先）之に任ず。
農事を統ぶ。

（三）司徒（徒卽ち衆の數を司る）　契（セツ）（殷の祖先）之に任ず。
民衆を敎導し、五數を布かしむ。

（四）士　（士は察にして是非を察す）皐陶（カウエウ）　之に任ず。

民衆の是非善惡を察す、即ち刑罰を司る司法大臣に當れり。

(五)虞（虞は計るの義）　益　之に任ず。

山澤の草木、鳥獸の數を計るを司る。

(六)共工（共は理むの義）　垂　之に任ず。

百工即ち工業の事を理む。

(七)秩宗（宗廟の秩序を正すの義）伯夷　之に任ず。

宗廟、祭祀の事を司る。

(八)典樂（典は掌るの義）　夔　之に任ず。

支那の禮樂教育祠祀等に用ふる音樂を掌る。

(九)納言（命を出納するの義）　龍　之に任ず。

天子の左右に侍し、帝命の出納取次を掌る、我が國の大、中、少納言の名之に據りて起れり。

十二州（地方制度）、禹は天下を九州とす。

(一)冀州　黃河以北の地　今の直隸・山西二省の南部にして帝都の地なり。

(二)兗州　黃河、濟水の間　今の山東省西北部

(三)青州　泰山以東の地　今の山東省の東南部

(四)徐州　泰山淮水の間　今の江蘇・安徽二省の北部

(五)揚州　淮水より南海邊の地　今の江蘇・安徽二省の南部と江西浙江の二省

(六)荊州　荊山・衡山の間　今の湖北・湖南二省の地なり。

(七)豫州　黃河・衡山の間　今の河南省と湖北省の北部の地なり。

(八)梁州　華山以南の地　今の陝西の小部と四川省の地なり。

(九)雍州　黃河の西　今の陝西、甘肅二省の地なり。

(一〇)幽州　今の直隸省北部及遼西の地

(一一)并州　今の山西省の北部の地

禹、天下を九州に分てり、即ち舜の末期幽并二州を廢して營州に、冀州を廢して青州に合せしが、他の七州は舜の時に同じ。

(一二)營州　今の遼東の地

四岳・十二牧

四岳は東岳（泰山）、西岳（華山）・南岳（衡山）・北岳（恒山）にして、其の地方に於ける群后（諸侯）の有力、有德なるものなり。四岳の下に十二牧あり、牧は州の長にして十二州の長たる有力なる群后なりしなり。

刑法　墨（いれずみ）、劓（鼻を削ぐ）、剕（足を刖る）宮（生殖器を損傷す）、大辟（死刑）の五等ありしが、情狀を酌み流罪を定め、銅を納めて贖刑の途を許せり。

巡狩・朝覲の制　元后（天子）は五載に一巡視を行ふ、これを巡狩と云ふ、春東方に幸すれば、泰山（群后中四岳の一人）は諸侯を率ゐて元后に謁し、曆日を正し、度量衡を合はせ、五禮（吉、凶、軍、嘉、賓）を等くす。同年夏衡山に、秋華山に、冬恒山に至り、皆東方に於けるが如くして一巡す。

朝覲は一に遂職と云ふ。諸侯五年間に四朝し（一年は天子の巡狩）己の職責ある地方政治の狀況を述ぶ。（遂職の名玆に起る）巡狩と相俟ちて、中央地方の分離を防ぎて其の政權を及ぼし、兼て天子の威嚴を示せり。

○指南車

黃帝、蚩尤と戰ふや、蚩尤大霧を起すに長じ、帝の軍を迷はしむ。帝乃ち木偶を作り、手を擧げて南方を指さしめ、名づけて指南車と云ふ。帝軍爲めに道を迷はず、遂に尤蚩を擒にしたり。後世敎導するを指南と稱する之に出づ、蓋し

黃帝當時磁石を用ひたりとなす。磁石は南北を指すによる。

○五色の石　太昊伏羲氏に代りて女媧氏立つ、時の諸侯たる共工氏、祝融氏諸侯にして火を用ふ後世火災を祝融の災といふ。と戰ひて勝たず、怒りて頭を不周山に觸れて死す。天柱爲めに折け、地維より缺く、女媧氏乃ち五色の石を鍊りて天を補ひ、鰲大なる龜の足を斷ちて四極四方を立て、蘆灰を聚めて洪水を止めしかば、玆に於て天地又平穩に復し、舊物を改めずと傳へたり。(支那神話)

第二節　夏殷の時代

禹王の政治　禹は姒姓、名は文命、鯀の子にして顓頊の孫なり。父鯀治水に功なくして除かるゝや、舜の命によりて之に代り、身心を惱ます十三年、家門を過ぐれども入らず、一意治水に努め遂に成功を告げたり。舜に登用せられ百揆となりしが、舜蒼梧の野湖南省永州府に巡狩して死するや、王位に卽き都を安邑山西省解州府夏縣に定め、國を夏と號せり。禹王を稱し、又國號を稱す孰れも支那に於ける始めなり。禹、堯舜の心を以て心とし、仁慈を以て民を治めしかば皆悅服す。全國を九州に分ち、道路を開き、產業を起し、租稅を改め、九牧の金を收めて九鼎を鑄、諸侯を大に塗山に會す。玉帛を取るもの萬國如何に王威の伸張せしかを見るべし禹南巡して會稽山に崩ぜしが、此の時支那本部の領土漸く定まり、後世支那を稱し禹域となす。

○禹王の仁德　禹出でゝ罪人見る、卽ち車より問うて泣いて曰く『堯舜の人は皆堯舜の心を以て心をとせり、寡人德少き人の義にして王侯の自稱なりの世となるや、民各〻其の心を以て心となす　寡人の不德を痛む。』と、儀狄初めて酒を作り禹に獻ず、禹飲みて甘しとせしが曰く『後世必ず酒を以て國を過る者あらん。』と、遂に儀狄を疏んじたり。

王位世襲　禹王の仁德と、其の洪水を治めし大功は、深く人民を感謝せしめ、禹が王位を益に讓らんとせしも、人民之に朝せず、却りて其の子啓を推し王位を繼がしむ、之を王位世襲の初とす。啓、不肖ならず德行あり、王位に卽き世襲を認めざる諸侯有扈氏を甘陝西省西安府に破り、天下を治めしが、其の子太康は盤遊遊樂に耽るを好み、夏政衰へ、王が洛水の彼方に畋して歸らざるに乘じ、有窮國の后、羿は王弟仲康を立て政を專にせり。羿、仲康の子相を廢し自立せしが、其の臣寒浞山東省萊州府寒國の君の子又羿を殺し、代りて自立したり。

相の子少康　少康の母卽ち相の后は、有仍國君の女にして、相の廢されし時方に娠みしが、有仍國に逃れ少康を生めり。夏の遺臣、靡の力を藉り、舊臣を糾合し、浞を誅してて夏道を復興せり。夏は四十年間中絕したり。少康の後、子孫相傳ふること九世にして孔甲至り、鬼神の事を好み國益〻衰へ、其の後三世にして履癸の世となれり。

○孔甲と龍との傳說　夏の德衰へ諸侯畔くや、天雌雄の二龍を降せり。堯の後に劉累と云ふものあり、龍を馴らすことを學び孔甲に傳へしかば、孔甲之に御龍氏の姓を與へたり。偶〻雌龍死す、累潛かに醢鹽からの類として孔甲に食はしむ。甲更に之を求む、累懼れて逃れ去れりと。

桀王の暴虐　履癸は世に桀賊人多殺の謂と稱せられ、貪虐にして勇あり、力能く鐵鉤索力絕倫にして鐵のまがり金

を自由に伸ばしたり。を伸ぶ。曾て有施氏を伐ちて、其の女妹喜を得、寵すること限なく其言聞かれざるなし、傾宮瑤臺を造りて民財を盡し、肉山・脯林乾肉をかけたる林の如し酒池は以て船を動かすべく、糟堤十里、一鼓を聞けば三千の宮人、之を牛飲すと傳へたり。

名臣關龍逢、此の狂態を見るに忍びず、桀王を諫め却りて殺されしより、暴虐益〻募り、國人之に背き、心を成湯に歸するもの多し。

諸侯昆吾氏直隸大名府開州亂を起すや、湯、諸侯を率ゐ名臣伊尹を相として之を征服し、更に夏を伐ち之を鳴條に破り、桀を南巢河南省廬州府巢縣に放ちて滅ぼせり。時に西紀前一五〇〇餘年頃、夏は十七代四百三十二年を經たり。

夏の世系

(一)大禹—(二)啓—(三)太康
　　└(四)仲康—(五)相—(六)少康—(七)杼—(八)槐—(九)芒—(一〇)泄—(一一)不降—(一二)孔甲—(一三)皐—(一四)發—(一五)桀(履癸)
　　└(一三)扃—(一四)廑

殷の初世　殷は子姓、其の先は契帝嚳の子にして堯舜の世司徒たり。にして、初め商と稱せしが、後國號を殷と改む。湯、先王の居に從ひ亳河南省歸德縣に居り、伊尹の名聲を聞き之を桀王に薦めしが顧みられず伊尹復歸して湯王に仕へたり。既にして諫臣關龍逢殺さるゝや、湯、之を哭して桀王の怒りに觸れ、夏臺に囚はれしが後釋さるゝを得たり。遂に伊尹を相として夏桀を滅し、三千の諸侯に戴かれて天子となり、大に仁政を施し民を安んじ、泰平を致せり。湯王が夏を亡し、暴虐より初めて放伐の例を開きしは、支那に於ける忠君の思想を根本より覆せるものにして、爾後亂臣賊子が國を簒はんとするに、良口實を與へ、爲めに外戚・流賊の帝位を簒奪するをも怪まず、天意即ち民意に適へる天子を、善良なる天子とした。

○伊尹　伊尹名は摯、有莘山の野に耕作せしが、湯王三度往訪して之を聘せしかば、出でゝ仕へたり。湯王を助け夏を滅して商（殷）の世となし、仁政を施き制度を改め、井田の法を行ひ、民を悅服せしめしかば、湯王之を尊び阿衡（宰相の義なり、宇多天皇の御代阿衡の紛議起りしは、其の故事を玆に求めしより始る）と爲せり。湯王の死後も殷の國礎を固むるに力を盡し、王の孫太甲位に卽きて無道なるや、之を桐宮に放つこと三年、其の過を悔ひ自ら責むるに及び、位を復し政を還したり。諸侯よりて再び服し、殷室又榮えたり。

盤庚の遷都　湯王より十七傳して盤庚に至る、これより先、殷は水害を避け屢〻都を遷せしが、玆に至り河を渡りて殷河南省偃師縣に都を奠め、國號商を改めて殷と稱せり。盤庚、祖湯の德に遵ひ、善政を行ひしかば、國よく治り諸侯來朝せり。三傳して武丁に至り、甘盤・傅說の兩賢臣を得、殷室中興せしが、五傳して武乙に至り、政を失し殷室復衰へ、更に三傳して受辛（紂）及にべり、

○武乙の無道　武乙無道にして暴政をなし、性、狂暴なり、偶人を作り之を天神に擬し、天神と博奕雙六の遊びをなす。人をして

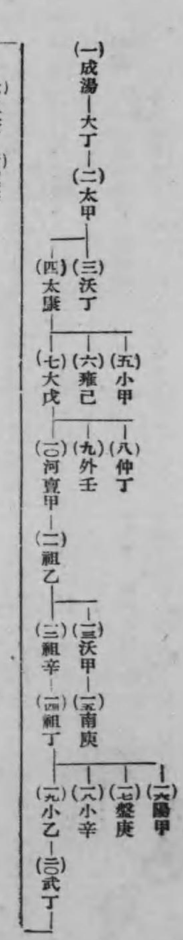
行はしめ天神若し勝たざれば、之を辱しめたり。又革囊を作り、内に血を滿して高く吊り、仰いで之を射り、天を射ると稱す。出でゝ獵せしが偶〻暴雷の爲め震死せり。

紂王の暴虐　受辛は世に紂（殘し義損レと善の謂）と稱せられ、資辯捷疾、膂力よく猛獸を格殺す、奢侈を好み暴戾にして、智は諫を拒ぎ、言は非を飾るに足ると云はる。曾て有蘇氏を征して其の美女妲己（ダッキ）を得、寵愛措かず言皆從ふ。卽ち賦稅を厚うし樓閣を營み、酒池肉林長夜の宴をなす。百姓怨望し諸侯畔くや刑辟を重くし、炮烙（ハウラク）の刑（銅柱に油を塗り炭火の上に加へ、罪人をして之に攀らしめ、足滑らかにして火中に墜つるを妲己と觀て樂しむ。）を制し淫虐甚しく、殷の三仁（微子、比干、箕子）屢〻諫むれども聽かず、却りて之を逐へり。

時に周の西伯發諸侯を孟津（河南省懷慶府孟縣の南）に會し、遂に河を涉りて攻む、紂衆を率ゐて周軍と牧野（河南省衞輝縣の南）に戰ひて大敗し、鹿臺に登り寶玉を衣て自ら焚死し、殷滅びたり。湯王より二十八代六百餘年、西紀前一一二〇年の頃なり。

○殷の三仁　論語に『微子は去り、箕子は奴となり、比干は死す。』と、微子は紂の庶兄なり、數〻諫むれども聽かれず、去りて祖先の祀を存せんとし、箕子は諫めて聽かれず、佯（イツハ）りて狂し奴となりしが、後殷滅び周起るや殷の墟を過ぎ「麥秀の歌」を作り悲みをやれり。周の武王之を封じて朝鮮に王たらしむ、卽ち古朝鮮の祖なり。比干は紂の諸父、去らずして諫めしかば、紂怒り『吾聞く聖人（比干）の胸には、七竅（ケウ）（穴）あり。』と、卽ち比干を殺して其の心（胸）を觀たり。

殷の世系



第二章　周初の政治及び制度

第一節　周初の政治

周の文王　周は姬(キ)姓、舜の名臣にて后稷たりし棄の子孫なり、世々其の職を襲ぎしが、夏末の亂に避けて戎狄の間に入り、豳(ヒン)に居れり。古公亶父(ココウダンポ)に至り、獯鬻(クンイク)の災を逃れんとして更に岐山の下(陝西省鳳翔府岐山縣の東北)に移り、國號を周と改む。其の子季歴を經て昌即ち西伯(武王、父昌に對して文王と謚す謚號の始めなり。)に至る、仁に篤く、老幼を敬撫し、下りて賢を待しかば、伯夷・叔齊・散宜生以下の賢士集り、諸侯又德を慕ひて歸するもの多く、天下を三分して其の二を保てり。殷紂の世恰も亂る、崇侯虎、西伯を紂に讒せしかば、紂怒り西伯を囚へ羑里(イウリ)に置く、散宜生等百方其の主を救はんとし、國中の珍寶を紂に獻じて請ふ所あり、遂に許されて征伐の權を與へられたり。西伯、後謀臣呂尙即ち太公望を渭水の上に得、之を用ひて蜜須・崇の二國を滅し都を豐邑(陝西省西安府豐永の西)に遷せり。

○棄　后稷棄の母は帝嚳の妃たり、曾て野に出で、巨人の足跡を踐みて棄を生むや、以て不祥なりとし之を隘巷に棄てたり。牛馬過ぐれども避けて踐まず、徙して山林に置けり。適〻林中人多く之を拾はんことを慮り、更に氷上に遷せしに鳥翼を擧げて之を藏ふ。以て神となし、遂に之を育つ。長じて種樹を好み民に農事を敎へしが、後后稷となり邰(タイ)に封ぜられたり、周之より起る。

○文王の仁德　文王、賢に禮し士に下り、之を待たんとして日中食に暇あらず、益〻德を修め百姓を愛撫し、諸侯の心服する所となる。

嘗て野に出で枯骨を見て悲しみ、之を厚く葬ひ『吾は一國を治むる者、枯骨の主なり』と天下之を傳へて歸するもの多し。

虞(ゲイ)・芮(ゼイ)の二國の君田を爭ひて決する能はず、周に赴きて質さんとす、既にして周界に入れば、耕者皆畔を遜り、民俗皆長に讓る、二人吾が爭ふ所は、周人に慚づる所なりとし、即ち文王に見えずして還り、各〻其の田を讓りて取らざりきと云ふ。

○太公望　東海上の人老いて貧し、渭水の陽に漁釣せしが、文王會〻獵して之に遇ふ。(文王將に獵せんとして卜占せしに、龍・虎に非ず大なる獲物あらん、これ霸王の輔なりと)文王共に語りて大に悅び、『吾が太公(先君なる太公季歴曰く聖人出でて周に赴き、國興らんと云へり。)の望みし所は果して君か』と。伴ひ歸りて師とし、太公望と云ひ師尙父と云ふ。太公望、文王・武王を佐け大功を立て、周室の柱石となり山東に封ぜらる、即ち後年の齊の祖なり。

周の武王　文王の子武王發、嗣ぎて西伯となり、呂尙を太師とし、諸侯を率ゐて、殷王紂を牧野に破りて之に代り、千餘の諸侯に戴かれて天子となれり。

武王位に卽き、殷の舊政に從ひ、殷室の嗣を存して諸侯に封ぜしを始め、封建の制を整へて王室の藩屏とし、兄弟十五人、同姓四十人、異姓二十人を諸侯とし、又大に祖廟を祀り、后稷棄よ

り各〻諡號を立てたり。

王、都を鎬京（カウケイ）陝西省西安府に遷し、意を民治に用ひしかば、天下平穩百姓皆其の業を樂めり。武王在位七年、死して其の子成王嗣ぐ。

○伯夷・叔齊　武王、遂に紂を伐たんとし、西伯の木主（位牌）を載せて出づ、伯夷・叔齊（孤竹君の二子にして、父叔齊を愛し死後之に嗣がしむ、叔齊受けず伯夷に讓る、伯夷父の言なりとして逃ぐ、叔齊も亦次で逃れしかば、國人止なく其の中子を立てたり。）馬を叩いて諫めて曰く『父（文王）死して葬らず干戈に及ぶ、孝と云ふべけんや。臣を以て君を弑さんとす、仁と云ふべけんや。』と。左右之を殺さんとす、太公望曰く『義人なり』と扶けて去らしむ。既にして殷滅び周代る、伯夷・叔齊周の粟（ゾク）を食ふを恥ぢ、首陽山に隱れ詩を作り、適歸する所なきを悲しみ、薇を食ひて餓死せり。

成康の治　太子誦立つ即ち成王なり、年幼なるを以て、叔父周公（名は旦）冢宰（相）となり、萬行を攝す。武王の弟、管叔・蔡叔の二人流言を作し、周公幼主を誤るとなし、武庚（封王の子祿父にして武王に封ぜられし者）と共に亂を起せしが、周公東征して武庚・管叔を誅し、蔡叔を放てり。

周公、武王の遺圖を繼ぎ、洛邑（後世の洛陽）を營みて東都とし、諸侯を此の地に會し、且つ入貢に便ならしめ、王を西都（鎬京）にあらしむ。（洛邑は天下の中央にして、諸國入貢の道里相均し。）周公、召公（名は奭（セキ））の二叔成王を輔佐し、（召公は周公の弟、太保となり成王を保育したり。）陝州以東は周公之を司り、以西は召公之を統ぶ。成王成人し周公政を還す、天下よく治り、周の國威普く、交趾の南なる越裳氏（安南）の如きは、三譯を尋ねて來貢せり。（使者白雉を獻じて曰く『天に烈風淫雨なく海波揚がらざる三年思ふに中國に聖天子あらん。』と、周公遠人の歸らんとするや、指南車を以てし迷はざらしむ。）成王死し子康王釗（サウ）立つ、成康の二代は、天下安寧、刑を用ひざる四十餘年唐虞の風あり、實に周室の極盛時代にして世成康の治と稱す。

康王の子昭王瑕（カ）繼ぐ、周威漸く衰へ、王、南狩して歸らず。（楚に巡狩するや膠舟（膠にて付けし船）に乘せられ漢水に溺死す。）子穆王滿は、初政見るべかりしが、巡遊を好み西巡久しく、徐、亂を起せり。王、歸りて之を鎭め祭公謀父（サイコウボウ）の諫を用ひず、故なく犬戎を征したれば、戎狄之より從はず、荒服（遠近により天下を五服に分ち、天子の國たる王畿附近を甸服とし、其の周圍を侯服、更に遠きを綏服とす、侯・綏二服の地は諸侯の地にして、其の外を要服・荒服とす共に戎狄の居住地たり。）の者至らず、諸侯騷然たり。共王・懿王・孝王を經て夷王に至る、楚はじめて王號を僭す、夷王の子厲王胡、暴虐にして國人に逐はれ、周・召（周公・公召の後）二公、代りて國事を治め、共和の世と稱す。

周の世系　其の一（東遷以前）

后稷棄…古公亶父―┬泰伯
　　└虞仲
　　季歷―文王昌―(一)武王發―(二)成王誦―(三)康王釗―(四)昭王瑕―(五)穆王滿―(六)共王伊―┬(七)懿王囏
　　└(八)孝王辟方

（九）夷王燮―（一〇）厲王胡―（一一）宣王靜―（一二）幽王宮涅―（一三）平王宜臼……

宣王の中興　厲王の子宣王靜立つ、賢に任じ能を使ひ、仲山甫・尹吉甫（インキツホ）・方叔・召虎の人材を擧げ、國政を委ねて面目を一新し、玁狁（北北狄荆蠻の一種）荆蠻（荆州の蠻）淮夷（淮水附近の夷）を伐ち、又親征徐夷を平げて中興の業をなしたれども、遂に周初の盛に復する能はず、晩年姜戎と戰ひて勝たず、且諸侯の心を失へり。

周室の東遷　宣王崩じ子幽王宮涅（キユウテツ）繼ぐ、王褒姒（ホウジ）を愛し、無道にして政を忘りしかば、諸侯叛くもの多し。遂に褒姒を后とし、其の生める伯服を太子となさんことを計り、申后及び太子宜臼を廢せんとす。宣臼逃れて申侯（母、申后の里方にして河南省南陽府の申城にあり、四岳の裔なり。）に歸し、幽王之を殺さんとし、求むれども得ず、申侯却りて犬戎を召して幽王を攻めたり。王、烽火を擧げて、諸侯の兵を徵すれども至る者なく、犬戎と戰ひ驪山（リザン）の下に殺され、褒姒は擒となれり。秦の衛公・衞の武公・晉の文公等戰ひて犬戎を破り、伯服を黜け太子宜臼を迎へ、之を平王としたり。平王、犬戎を避けて東都洛邑（今の河南省河南府）に都し、所謂周室の東遷をなせしが、王權已に衰へ、周初に復するの望みなく、諸侯跋扈の甚を開けり。時に西紀前七七一年にして、武王より二百八十年を經たり。

○變狐　夏の世に神龍ありて王庭に降り『吾は褒國の二先君なり。』と云ひしかば、王、怪しみト者を召して、殺さんか、銅はんか、逐ほんかをトひて、孰れも不吉なりしかば、龍の口より流れ出づる泡のみ留めば如何、とトひて吉を得、龍を諾せしめ泡を留めて之を去らしむ。

かくて其の泡を櫃に藏め夏・殷の世を終へ周に入れり。厲王の世事を好む者ありて其の藏封を開きしに、泡流れて止まず、化して蜥蜴となり、王の後宮に入れり。偶〻童妾之に遇ひ、忽ち孕み女子を生みしが、其の夫なきを懼れて途に棄てたり。宜王の時に至り童謠あり、『山桑の弓と箕草の箙を賣るものは周を滅さん。』と、時に之を賣歩ける夫婦ありしが驚きて逃れ、途中一人の棄女に遇へり。

此の妖女兒こそ斯の童妾の生めるものなりしに、夫婦其の故を知らざれば、深夜號泣する聲を聞きて哀傷の情に堪へず、遂に之を拾ひて褒の地に走れり。

其の後幽王の時に及び、褒人罪ありて此の女兒を獻じ、許されんことを乞ふ、王喜びて之を納れ褒姒と命じ、寵することと限なし。褒姒容色艷麗なれども笑ふことを好まず、王百方苦心し笑はしめんとして得ざりしが、一策を案じ、諸侯が變故を見て來援すべき約ある烽火を擧げしに、事起れりと信ぜし遠近の侯伯、皆戰備を整へ急馳したり。

然るに何等の變事なきを以て空しく兵を班す、褒姒之を見て始めて笑へり。王大に喜び戲事を以て、屢〻諸侯を欺き、褒姒の歡心を買ひ、信を諸侯に失ふも意とせず、驪て申后及び太子を廢し、褒姒を后となせしに、犬戎の來ひ、火烽を擧げしに集るもの一人もなく、遂に殺されたり。（龍の泡の傳說、褒姒の笑、城を傾くる、正史の傳ふるも、信を措くべからず。）

第二節　周の制度

封建の制度　周の制度は、主として成王の攝政たりし大政治家、周公旦の制定する處

て、支那歷朝仰いで模範とし、之に參酌せざるなく、其の影響又我國にも及びたり。周公以前に於ても制度なきにあらず、されど多く傳はらず、又完備の域に達せざりき。

周代は封建制を採り（封建制は周代に天下を九州・九服（王畿を國畿と云ひ、他は五百里と隔てて侯畿・甸畿・男畿・采畿・衛畿・蠻畿・夷畿・鎭畿・蕃畿あり、五服に準ず。）に分ち（至りて完備せり）たり。王畿は天子の直轄にして方千里（我が百餘里）雍州・豫州に跨り、內に直隸の臣を封じ、他は殷の制に基き、諸侯を公・侯・伯・子・男の五等の爵に分ち、其の封を異にしたり。

天　子　方千里　大國九、中國二一、小國六三……九三國

一、公　方百里（我が十里餘）

二、侯　同

三、伯　方七十里

四、子　方五十里

五、男　同

（六）附庸　方五十里に滿たざる小國にして、大國に屬す。

天子は中央の一州に、九十三國を直屬し、自餘の八州には、各〻二百十國宛の諸侯封ぜられたり。周初は計千七百七十三國の諸侯ありしが如くなれど、是數字上の理想に過ぎずして、實際に於て斯くの如く行はれしには非ず、而も春秋時代に至りては、諸侯互に呑滅し、弱肉强食行はれ、周初の封建制は、殆ど破壞せられたり。

大國……各州三〇國
中國……各州六〇國
小國……各州一二〇國
一七七三國

周の官制　官制は周に至り最もよく備はれり、卽ち之を中央、地方に分ちて表解すれば

一、中央政府（天・地・春・夏・秋・冬の六官と、各官の屬官として太夫・士六十人宛あり、故に六官の合計三百六十人となる。）

（官）	（長官）	（職掌）
（一）天官	大冢宰	庶政を總理す
地官	大司徒	民治・敎育
春官	大宗伯	祭祀・朝會・禮樂
夏官	大司馬	兵馬
秋官	大司寇	訴訟・刑律
冬官	大司空	土木・治水

太夫・土各〻六十人合計三百六十人

（二）三公・三少（三孤）

太師、太傅、太保
少師、小傅、少保（三公・三少は何れも實際の政に與らず、皆天子の輔佐に任ずるものなれども、有德の士あれば任じ、常置の官にあらず。）

六官の長官を卿（六卿）と云ひ、之に三少を加へ九卿と稱せり。諸侯も亦天子に倣ひ六官を置けども、卿は三人以上たるを許されず、多くは大宰は司徒を、司馬は宗伯を、司空は司寇を兼ねたり。されど春秋時代（楚は僭せると特異の官とを有し例外なり）よりは、諸侯の勢盛となり、堂々六官・太夫・士を任じ、一に天子の制を用ひて顧みざりき。

二、地方制度

天子は王畿の一州を直轄し、自餘の八州は諸侯の封國なり、五國を屬となし長を置き、十國を連となし帥を置き、三十國を卒となし正を置き、二百十國卽ち州に伯を置く。各伯は州の長官にして、其の州に於ける各卒・連・屬の長官たる正・帥・長を率ゐ、周・召二公に隷屬して天子を載けり。

九十三國	八州	各二百十國	各三十國	各五國
天子（一州）	周公 召公	州（伯）	卒（正）	連（帥）	屬（長）

田制及稅法　田稅の法は、夏に貢法、殷に助法（又は井田の法）と云ひしが、周はこの二法を折衷し徹法と云ふ。徹は通ずるの意なり。

夏の貢法は、田五十畝を一間とし、十間を一組として、之に五百畝の田を授け、五畝卽ち十分の一の稅を上納せしむ。

殷の助法は、田六百三十畝を井分し、（九分す）周圍の各七十畝を私田とし、八家に授けて一組とし、中央の七十畝を公田とし、八家に共耕せしめ、其の收穫の上納を命じたり。（井田の法の一組を一井と云ふ）

上納の分　夏の貢法（一組十家）

（五畝）	同	同	同
五十畝	同	同	同
（五畝）	同	同	同
五十畝	同	同	同

殷の助法（井田の法）

私田 七十畝	私田 七十畝	私田 七十畝
同	公田	同
同		同
同		同

一組（八家）

周の徹法は前二法により、帝都附近の如き、人口稠密なる地に貢法を用ひ、人口稀薄なる諸地

方の大部は、井田の法を用ひたり。周代には田百畝を給せしかば、一井は九百畝となり、夏・殷の五十畝、七十畝に比し多きが如くなれど、實際は尺度の單位の相違にして、三代（夏・殷・周を三代と云ふ。）を通じ殆ど等しかりきと云ふ。（周の一尺は我が七寸五分にして、六尺を一歩とし、百歩を一里としたり。故に周代の三里は我が三町四十五間に過ぎず。）

稅制は以上の租、卽ち當時の『粟米の征』の外、後世の庸たる『力役の征』ありて、人民は一年に三日官の土木に從ひ、又後世の調たる『布縷の征』の爲め、絹・布の如き貢物を納めたり。

兵制　軍隊の組織は田制に基き六十四井を一甸とし、甸毎に兵車一乘、甲士三人步卒七十二人、軍夫二十五人、總計百人と戎馬四頭、牛十三頭を出さしむ。（甸は五百十二家なり）

かくて軍隊は五人を伍となし、五伍二十五人を兩、四兩百人を卒、五卒五百人を旅、五旅二千五百人を師、五師一萬二千五百人を軍とす。伍に伍長、兩に司馬、卒に卒長、旅に旅帥、師に師帥、軍に軍將あり、軍將は命卿之を率ゐ、師帥には中太夫、旅帥には下太夫、卒長は上士、兩司馬は中士之を率ゐたり。（兵制は「周禮」による、當時戰は車戰を主とす、然るに車少く人を主とせるが如き編成法は、實際と一致せざる點ありと云ふべし。）

天子は方千里其の間の山川宅地等を除くも六十四萬井（一萬甸なり）あり、甸毎に兵車一乘を出すを以て『萬乘の君』の稱あり、大國（公侯）は方百里、天子の公卿にして兵車千乘、故に千乘の家と云ひ、太夫の家を百乘の家と云ふ。（兵役は二十歳より六十歳迄とし、四季に演習をなすの外農務に從ふ、當時未だ兵農分れざればなり。）

天子は六軍（七萬五千）、大國は三軍（三萬七千五百）小國は一軍（一萬二千五百）を有したり。

今軍隊組織を表示すれば

師帥（中太夫）　旅帥（下太夫）　卒長（上士）　兩司馬（下士）

軍將（命卿）
一軍（五師）
- 師（五旅）
  - 旅（五卒）
    - 卒（四兩）
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
    - 卒（四兩）
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
  - 旅（五卒）
    - 卒（四兩）
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
    - 卒（四兩）
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
- 師（五旅）
  - 旅（五卒）
    - 卒（四兩）
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
    - 卒（四兩）
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
  - 旅（五卒）
    - 卒（四兩）
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
    - 卒（四兩）
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人
      - 兩（五伍）
        - 伍　五人
        - 伍　五人

一萬二千五百人　二千五百人　五百人　百人　二十五人

刑律　刑律は既に五刑（體刑）あり、流・放・鞭・朴・贖等の諸刑行はれしが、周代に入りては更に刵（耳を切る）・劓（鼻を切る）・枉（足か）・桎（手か）・宰（はりつけ）・髡（髮を剃る）・徒（懲役にす）等の諸刑を課し、周末に至りては三族夷誅・車裂・梟首・鑊烹等の殘酷なるものを加へたり。

學制　二十五家を閭とし塾あり、五百家を黨とし庠あり、一萬二千五百家を州として序あり、塾・庠・序共に普通人民の學ぶ所にして、小學（鄉學）なり。天子の都に置くものは、大學（國學）

にして、一に辟雍或は成均と云ひ（諸侯の國にも亦大學小學あり。）王族・諸侯の世子・卿太夫・其の他官吏たる士の學ぶ所たり。

學校の教科としては、禮・樂・射・御・書・數ありて六藝と稱し、就中禮樂には最も心を用ひたり。大學は禮・樂・詩・書を主とし、小學は洒掃・應對の節、室家長幼の序を知らしむ。

●禮は冠婚喪祭・燕・射・朝・聘等の五禮（吉・凶・軍・嘉賓なり。）に關し、喪・祭最も重かりき。●樂は雲門（黃帝の樂）咸地（堯の樂）大韶（舜の樂）大夏（禹の樂）大濩（湯の樂）大武（周の武王）の諸樂あり、一般の人心を和げ和平の德を養ふを以て、禮と共に治國の要具となり、春秋時代朝聘の盛なるに至りては、各國に禮樂益々行はれ、之が研究盛なるに至れり。

○喪祭と樂器　周代の制喪期甚だ長く、父母・舅姑・夫・妻・長子、主君の爲には三年の喪に服すべく、祖父母・叔父母・兄弟・諸子等以下順序あり、棺槨を整へ死者を厚葬せり。

祭祀は郊祀を最とす、周室の祖后稷を祀るの禮にして、天子に限れり。宗廟・社稷の祀は、天子・諸侯共に行ひ其の祖及び土地・穀物の神を祭り、廟を立て、各々奉祠したり。春秋以來諸侯次第に强大となり、其の廟社も天子に競ひ、次第に莊麗に赴けり。

音樂の起りは、黃帝の時、伶倫なる者、崑崙山の陰に至り、竹を嶰溪の谷に採りて、十二律を作れりと傳ふ。舜には典樂なる官あ〻て、夔之に任ぜられしこと見えたり。其の後天神・地祇・四望・山川を祀るに、各々雲門・咸地・大韶大夏等の諸樂を用ひ、先祖を祭るには、大武の樂を行へりと云ふ。

樂器は金・石・絲・竹・匏・土・革・木の八音に分ち、鐘・磬・琴・瑟・笙・管・壎・鼓・柷等を用ひたり。

○周代の風俗　夏忠、殷質、周文と云ひ、周は禮樂の盛に起れるより文化進み、質素なりし殷時代の俗より變じて文となれり。

尊卑長幼の別嚴にして、子は父に從ひ妻は夫に隨ふべく、男女の別は七歳を以て分ち席を同じうせずと云ひ、男女間の物品の授受を禁じたり。男子は三十歳、女子は二十歳を婚期とし、必ず異[illegible]たるを要す、男子は二十歳を弱と云ひて冠し成人たるを示し、女子は十五歳を以て笄したり。其の他鄉飲酒・喪祭禮あり、略〻前述の如し。

第三章　春秋時代

第一節　春秋の列國

春秋時代　春秋は魯の史記の名より出づ、孔子、魯の史を筆刪して春秋を作り、周の平王四十九年より敬王の三十九年に至る迄(西紀前七二二—四八一)の間を記す。即ち魯の哀公より隱公に至る迄の二百四十二年間なり。(是正確なる春秋時代なれども、實際は周室の東遷より、威烈王に至る大約三百年間にして、東周五百年の前半なり。)支那の古は萬國と稱し、殷に至り三千に減ず、總て大數を現し實數に非ずと雖も、其の間に併呑の行はれたるを見る。然るに周初に至りては千八百に減じ、東遷後は更に百六十餘國となり、益々相併呑するの盛となりしを示せり。就中、大諸侯たるもの十二國(後に吳及越を加入せしめて十四國とす。)あり、之を春秋の十二列國と稱す。

國名	始祖	國都	領域
(一)魯	周公旦(武王の弟)	曲阜(山東省曹州府曲阜縣)	山東省兗州府の內
(二)衛	唐叔封(武王の弟)	長歌(河南省衛輝府淇縣)	河南省衛輝府
(三)晉	唐叔虞(成王の弟)	絳((故)山西省平陽府曲沃縣(新)山西省平陽府翼城縣)	山西省
(四)鄭	桓公友(宣王の弟)	新鄭(河南省開封府新鄭縣)	河內開封縣
(五)曹	叔振鐸(武王の弟)	陶立(山東省曹州府)	山東省曹州府以南
(六)蔡	叔度(叔度叛して死し其の子胡國を承けたり。)	汝墳(河南省汝寧府)	河南省汝寧府より東北
(七)燕	召公奭(武王の弟)	薊(今の北京附近)	直隸省の大部
(八)齊	太公望	臨淄(山東省青州府臨淄縣)	山東省の大部
(九)宋	微子啓(殷の紂王の庶兄)	商丘(河南省歸德府)	河南省歸德府
(〇)陳	嬀滿(帝舜の後)	宛丘(河南省陳州府)	河南省開封府より東南
(二)楚	熊繹(苗族の後なるべし熊繹康王の世荆蠻に對ぜらる。)	郢(湖北省荆州府)	湖北、湖南、江西の三省及び河南省の南部
(三)秦	非子(舜の臣伯翳の裔周の平王の時諸侯となる。)	雍(陝西省鳳翔府)	陝西、甘肅の二省
(三)吳	太伯(文王の伯父)	吳(江蘇省蘇州府吳縣)	江蘇省
(四)越	夏后少康の裔	會稽(浙江紹興府)	浙江省

內、魯・衛・晉・鄭・曹・蔡・燕及び吳は、周室の一族にして姬姓、齊・宋・陳・楚・秦及び越は、異姓の

國なり。

戎狄の跋扈　交趾支那族の一種なる苗族は、先づ漢族と衝突し、次第に南方に壓せられしが堯舜時代には最も勢ありき。後殷の頃より衰へ、楚、其の間に新に興り、周の中世以後其の勢益〻振ひ、附近諸蠻を從へ中國に逼るに至れり。春秋時代の齊、晉の覇業は實に楚を制するにありき。

東夷には淮夷・徐夷あり、今の安徽・江蘇二省附近に據し、周威の東方に普からざるに乘じて跳梁し、穆王の時には徐夷王號を僭せり、後宣王に征せられて衰へ、春秋時代に入りては齊・楚・吳等の諸侯盛となり、これに服屬せらるるに至れり。

北狄と西戎は、周代最も猖獗を極めたる蠻族なり、北狄は土耳其、通古斯兩族の混種にして、黄帝以來獯鬻、殷に玁狁（ゲンイン）と稱せられ、後匈奴として更に著はる。山西・陝西二省の北邊に出入して勢强大となり、其の他白狄（陝西延安府より山西、汾州の間にあり。）赤狄（山西潞安府より大行山に添ひ直隸方面に據る。）あり、何れも中國を侵して災をなせり。（赤狄、白狄は晉の强大と共に多く衰滅に歸せり。）

西戎は圖伯特族にして內に氏・羌あり、東周の初頃より中國に入りて雜居するもの多く、其の一派犬戎は幽王を攻殺し、周室東遷を餘儀なからしめたり。其の他驪戎、義渠・大荔の諸派あり、犬戎は陝西鳳翔府附近に、驪戎は陝西西安府以東に、義渠・大荔は渭水の北に居住し、かくて岐豐なる周の故地は、殆ど夷狄に蹂躙せられたり。

第二節　春秋の五覇

春秋の五覇　周室既に衰へ諸侯內に相攻伐し、戎狄外に跳梁し、百姓堵に安んぜず、有力なる諸侯出で、他の諸侯を會盟、糾合し、尊王攘夷を目として王室、諸侯の難を救ひ、戎狄と攘ひ、王命を藉りて天下に號令する者現はれたり。是卽ち覇者にして諸侯に長たるの謂なり。

齊の桓公、晉の文公、楚の莊王、吳王夫差及び越王勾踐を春秋の五覇と稱す。（桑原博士の說にして事實に最も適合し、又現今普通に稱せらるゝものなり。夫差、勾踐に代ふるに秦の穆公、宋の襄公の說以前久しく行はれしが秦は中國の會盟に與らず、西戎に覇たるに止り、宋襄は一度諸侯を會したれども、楚の成王に敗られ覇業ならずして死せり。）

齊の桓公　五覇の第一は齊の桓公なり、桓公名は小白、太公望十五世の孫、よく內亂を戡定して齊主となり、名臣管仲を用ひ、國政を修め稅制・兵制を改め富國强兵の實を擧げ、王室より兵馬の大權を得、大に諸侯を北杏（山東省泰安府博興縣東）に會して、天下の亂を救はんとす。此の時に際し、山戎北狄勢を得中國を侵し、燕を困しめ、衞を滅し、邢を破り、齊も亦屢〻其の寇を蒙れり。桓公茲に於て諸侯を率ゐ、此等戎狄を擊破して、諸侯を救ひ、邊境を靖じ、又大に楚を擊つ。楚は先に武王、文王の英主出で、地を拓き淮水以南を定め、北上し中國に入りしかば、桓公諸侯と共に臻り、

大に威を示し之と召陵（河南省許州偃師縣東）に盟ひて屈せしめ、其の貢を周に入れざるを責め、軍を班したり。かくて大國楚・秦は遠ざかると、晉室は内亂あるとにより、桓公獨り諸侯を九合し、天下を一匡し、以て中國の諸侯をして少康を得るに至らしむ、其の葵丘（河南省歸德府考城縣葵立）の會の如きは、最も偉大にしてよく桓公の勢威を語れり。（西紀前六五一年にして魯・宋・衞・鄭・許・曹の諸侯會同し、桓公の極盛時なり。）管仲死してより、齊威漸く振はず、桓公又尋で死し、諸公子嗣を爭ひて内訌相繼ぎ、霸業地に落ちたり。

○管仲　桓公の長兄襄公、淫虐にして政を失ひ、一族公孫無知之を弑して自立するや、襄公の諸弟・一族中禍を恐るゝ者は、爭ひて國外に逃れたり。

次弟糾は其の傅管仲と共に、母の國魯に走りて再擧を計り、三弟小白は其の傅鮑叔と共に、莒に逃れて後圖をなせり。

然るに小白卽ち桓公、先づ迎へられ齊主となりしかば、魯は糾を助けて齊に入れんとし、兄弟互に嗣を爭へり。桓公兵を發し乾時に魯兵を破り、魯をして糾を殺さしめ、管仲等を求む。管仲囊に糾を助け桓公と爭ひし時、射て桓公の帶鉤に中てしことあり、鮑叔もと管仲と善く、其の賢を知りしかば、己の相たるを辭し『天下に霸王たらんと欲せば管夷吾を用ふべし。』と之を桓公に薦む。

桓公遂に帶鉤の恨を棄て、管仲を用ひ政を委ね、爲に天下を一匡するを得たり。管仲富國强兵の策に委しく、倉廩實而知二禮節一衣食足而知二榮辱一と。殖産を奬勵し鐵・魚・鹽の稅を制し、富國の實を擧げて民に恒心あるに至らしめ、法制、兵制を改革して、よく强兵の實を擧したり。管仲死して桓公政を怠り、易牙・開方・豎刁の三嬖臣を近け、淫樂に耽りしかば霸業衰へ、其の死後は五公子互に立つを爭ひ、國亂れたり。

○宋襄の仁　宋の襄公名は茲父、殷の微子啓十六世の孫なり、桓公と親交ありしかば、齊の五公子の亂を平げ、諸侯に霸たらんとして、西紀前六三八年之を盂（河南省歸德府睢州盂亭）に會せしが、楚の成王に執へられて果さず。時で釋さるゝや翌年襄公楚と戰ひ、泓水（河南省歸德府拓城縣）に對陣す、公子目夷襄公に勸むるに、敵の陣ならざるに乘じ擊つべきを以てせしが、仁を以て自任せる襄公は『君子は人を阨に困しめず、其の陣成りて後戰ふべし。』と、遂に戰機を失し、楚に破られて重傷を蒙り、『宋襄の仁』と世に嘲せられ千古の笑柄となれり。

晉の文公

晉の文公名は重耳、周の成王の弟唐叔虞十五世の孫なり。父獻公より强大となり地を開きしが、獻公驪戎を征し驪姬を得てより政を怠り、且其の讒を信じ、其の所生を立てんとして、太子申生を殺せしかば、其の諸公子難を恐れて諸國に走れり。重耳も亦逃れて、齊・楚を遊歷せしが、遂に秦の穆公の援を得て國に歸り、懷公（重耳の弟の夷吾（惠公）の子なり。）を殺して立つ、卽ち文公なり。

文公時に年六十二、外に流寓すること十九年、具に艱苦を嘗む。諸政を名臣狐偃・趙衰・賈佗・先軫に任じ、國内能く治り、父祖の餘威（獻公は自ら其の强を恃み、齊の桓公の會盟に加はらず超然たりき。）を藉り、二年にして霸業を立てたり。時に周の襄王、狄人及び太子帶に逐はれて、鄭の南氾（河南省許州襄城縣杞城）にあり、（襄王の后なる狄后太子帶に通ぜしかば、王之を廢す、狄人怒り太子帶を助け、王を破りて南氾に逐へり。）狐偃文公に勸むるに『諸侯に霸たらんと欲せば、王事に勤むるに如くはなし。』と、遂に帶を誅し、襄王を王城に迎へたり。楚、宋が背きて晉に從へるを怒り、陳・蔡・鄭・許

と共に宋を圍みしかば、宋恐れて急を晉に告ぐ、先軫、文公に說いて曰く『施に報じ、患を救ひ、威を取り、霸を定むるは是にあり。』と。西紀前六三二年、齊・宋・秦の諸軍と共に、楚と城濮（山東省曹州府濮州）の南に戰ひ、之を破りて其の强硬を挫き、同年大に諸侯を踐土（河南省開封府滎澤縣西北）に會し、（周の襄王も臨めり。）皆王室を奬け、相害するなからむことを約せり。

文公在位九年にして卒し、襄公繼ぎ、更に數傳して悼公に至る。悼公英明にして賢人を用ひ、善政を布きて霸業又振へり。文公以後數世百餘年間、晉は老成の臣多く、よく霸業を墜さざりき。

○秦の穆公　秦は附庸の國にして、其の祖嬴非子、秦に封ぜられしに始る。襄公に至り周の平王の難を救ひて諸侯となり、勢漸く振ひしが、其の八世の孫に穆公（一に繆公）出でたり。穆公大略あり、百里奚・蹇叔・由余・孟明視の賢臣を用ひ、晉の惠公を韓原に破りて河西の地を得、文公を入れて晉主たらしむ。

又周の襄王の難を救ひ、或は由余の言を用ひて戎を伐ち、國を併すること二十、地を開くこと千里、よく西戎に霸たり。然れども晉の文公の霸業死後に至りても墜ちず、爲めに中國に霸たる能はず、晉の襄公は却りて殽に秦兵を敗り孟明視等を獲、爾後、晉・秦兵を交ふる七十年に及びたり。

楚の莊王　楚は顓頊の後にして、熊繹の荆蠻に封ぜられしを始とす。武王、文王出で地を擴めて都を郢に定め、早くより王號を僭したり。成王に至り益〻强大となりしが、遂に穆王を壓て莊王に至れり。

莊王始め淫樂に耽り、國政を見ざる三年、令して『諫むる者は殺さん。』と、伍舉曰く『鳥丘にあり、三年鳴かず飛ばず、これ何の鳥ぞや。』と、莊王曰く『三年飛ばざるは、飛ばば將に天を衝かんとし、鳴かば將に人を驚かさん。』と、蘇從も亦之を諫むること切なり。王乃ち心を政治に傾け、刀を抽きて鐘鼓の懸を斷ち、伍舉、蘇從を用ひ、孫叔敖を擧げて相となす、國勢頓に振ひ國人悉く悅服せり。王茲に於て庸を滅し宋を伐ち、陸渾（リクコン）の戎を平げ、遂に洛水の邊に馬を立て、周室を脅かし鼎の輕重を問ふ。（夏禹九鼎を鑄傳國の寶とし殷を經て周に傳はれり。莊王蓋し周を圖るの意あり、後世鼎の輕重を問ふ語は實力如何を問ふの意となれり。）周の定王、王孫滿をして勞はしめ、辛うじて事なきを得たり。（王孫滿曰く『在德不レ在鼎、周德雖レ衰、天命未レ改、鼎輕重、未レ可レ問也。』と。莊王愧ぢて兵を班せり。）

莊王又鄭を攻め之を降すや、鄭、服せず晉に通ぜんとす、莊王怒り鄭を圍むこと十旬、之を敗りしかば、晉の景公荀林父をして師を率ゐしめ、鄭を救ひて楚軍と郟（ヒツ）（河南省開封府鄭州）に戰ひしが大敗せり。

楚更に宋を擊破せしも、晉救ふ能はずして之と和平し、莊王遂に霸を稱す。其の後共王、靈王を經、平王（靈王の弟棄疾）以後衰へ、其の子昭王に至り吳王闔閭に蹂躪せられたり。（泓水・殽漢・邲の戰は、鞍（アン）（山東濟南府にあり、周の定王十八年晉の景公、魯・衞を援け、齊の頃公の軍を擊破す。）鄢陵（エン）（河南開封府にあり、周の簡王十一年晉の厲公楚の共王が東夷を率ゐ攻め來りしを擊破す。）の戰と共に春秋の五大戰と稱せらる。）

吳王夫差　吳は周の文王の伯父太伯の後にして、姑蘇（江蘇省蘇州府）に治せり。十九世壽夢（ジュボウ）に至り王を稱す、申公巫臣なるもの晉より來り、用兵乘車の法を敎へしより國勢漸く强く、更に其の子闔（カフ）

間の時に及べり。

闔閭は楚の亡臣伍子胥を用ひ、其の薦により有名なる兵略家孫武（孫子）を將軍とし、大に國威を張り、楚を擊ちて之を漢水に破り、其の國都郢を陷れ、威中國に振ひしが、既にして南方の越王勾踐と檇李（スキリ）（浙江省秀水縣檇李）に戰ひ傷きて死せり。

其の子夫差立ち、必ず父の讐を報いんとし、薪中に臥し、出入人をして呼ばしめて曰く『夫差、越人汝の父を殺せしを忘れたるか。』と、周の敬王二十六年遂に越を夫椒（江蘇省蘇州府吳縣西南）に破り勾踐を會稽山（浙江省紹興縣）に圍み之を降せり。

茲に於て吳の勢盛なり、敬王三十八年夫差北上して大に諸侯を黃池（河南省開封府封邱縣西南）に會し、一時中國に覇たり。

○伍子胥　伍子胥名は員（ウン）、楚の臣にして平王に仕へたりしが、其の父兄殺さるゝや難を避け吳に奔れり。吳王闔閭の知遇を得、吳兵を導きて楚城を陷れ、恨深き平王の墓を暴きて屍を鞭てり。

後、夫差勾踐を許さんとするや之を諫めて聽かれず、却りて讒せられ死を賜ふ。子胥家人に告げて曰く『我が墓に檟を植ゑよ、檟は棺材となりて、我が君（夫差）に役立つべし。我眼を抉りて東門に懸けよ、以て越兵の吳を滅すを見ん。』と、

子胥學才あり勇武なり、よく吳に仕へ之を覇たらしめしが、平王の死屍を鞭ちしは申包胥以下の非難する所にして、惜むべし。

越王勾踐　越王勾踐は夏の小康の後なり、父允常は屢〻吳王闔閭と戰ひて敗れしが、彼に至り大志あり、遂に吳を破り闔閭を斃したり。然れども後夫差に破られて降るや、專ら賢臣、范蠡（ハンレイ）・文種の二人に任じ、許されて歸國するの後は、乃ち身を苦しめ、思を焦し膽を坐臥に懸けて之を嘗め、所謂嘗膽の苦楚を味ひ、『汝會稽の恥を忘れたるか。』と、專心報復を講ぜり。

范蠡兵を治め吳を謀り、文種內政に任じ國運漸く盛なり、乃ち吳の太宰伯嚭（ヘクヒ）に厚賄し、伍子胥を讒せしめて死を賜ひ、二十年を經て三戰三勝、夫差を姑蘇臺に圍みて自裁せしめ、遂に吳を滅したり。

越王會稽の恥を雪ぎ、北上し齊晉を會して、遂に諸侯に覇たり、時に西紀前四七二年なり。されど勾踐死して國勢昔日の觀なく、驕て一度衰へし楚に征服せられ、仇敵たりし所謂吳越同舟の兩國、又其の版圖に入りぬ。

○范蠡　范蠡は太平記に載せられし、兒島高德の櫻樹に記せる詩より人口に膾炙せらる。吳を滅する大功を樹てしが、越王の人物、長頸鳥喙、患難を共にすべく、安樂を共にすべからずとし、文種に勸めて共に致仕せんとせしに、文種先づ殺されしかば、驚て身にも猜疑の及ばんことを恐れ、財寶を積みて家人と共に江湖に航し、功名なり身退くの故智を學べり。

范蠡經濟の道に通じ治財に妙を得たり、後齊に赴き其の子と產を治め數千萬に至り、自ら鴟夷子皮（シイシヒ）と名を變ぜり。齊人其の賢を聞き相となせしが、功名の下久しく居るべからずとし、官を辭し、蓄積せる巨財を盡く散じ、陶に赴き陶朱公と云ふ。既にして再び鉅萬の財を蓄ふるに至りしかば、魯人猗頓（イトン）往きて治財の道を問へり。范蠡之に教ふるに『是他なし、只々五牸（ジ）（五頭の牡牛）を蓄へよ』と。猗頓之に從ひしに、家富充滿し富王公に擬す、當時天下の富を云ふ者陶朱・猗頓と云ふ。

第四章　戰國時代

第一節　戰國の七雄

戰國時代　周の威烈王二十三年（西紀前四〇三年）韓・魏・趙の三氏を封じて諸侯となせしより、秦の六國を統一するに至りし、西紀二二一年迄、凡そ二百年間を戰國時代と稱し、春秋時代の後を承けたり。

今、春秋、戰國の兩時代を比較するに、春秋時代は、周室東遷後にして天子の實權なしと雖も、其の當初に於ては、尙幾分の威嚴を保ちたれば、大諸侯も之を憚り、王室中心主義行はれ、大義名分の考へ一般民心に存したり。されば諸侯も覇業を企つる者、陽はに尊王攘夷を唱へ、言を皇室に藉りて、天下に號令せしが、戰國時代に至りては、全くかゝる觀念消滅し、實力競爭の世となり、所謂、弱肉强食、互に併呑、攻爭に寧日なく、各々天下を爭はんとし、又一人の尊王を說く者なく、大諸侯は自ら僭して王號を稱し、周室の式微に乘じ、侵略を逞うせしかば、今や周室は洛邑附近を領する一小諸侯となり、恰も關ヶ原戰後の豐臣氏に似て、更に微弱なる有樣な

りき。

陪臣の專横　諸侯重臣の專横は春秋時代よりの通弊なり、王室の威嚴上に衰ふるの時、諸侯漸く遊惰に流るゝものあり、陪臣たる諸侯の重臣は、其の間勢力を天下に扶殖し、諸侯が國政を彼等に委ねるを奇貨として、自家の繁榮を圖り、玆に陪臣專横の端を開けり。春秋時代は諸侯會盟に忙はしく、其の重臣は勢ひ國内の政治に鞅掌し、或は他國に使して諸侯と私に引汲し、以て他日の外援とす。主家の紛擾、主公の幼冲に乘じて、私惠を人民に施し、民心を巧に誘ひ、何れも他日簒奪の機に具へ、遂には自立して主家を滅し、之に代る者あるに至りぬ。

魯の三桓　魯の三桓は桓公より出でしを以て稱せらる。桓公に四子あり、長子を莊公と云ひ、次子なる慶父の後を孟孫氏と云ひ、三子叔牙の後を叔孫氏と云ひ、四子季友の後を季孫氏と云ふ。文公の時、三桓の勢強く公室を凌ぎしかば、宣公は齊の援によりて、之を除かんとして成らず、三桓又力を併せて宗家に抗せしが、就中季孫氏の勢最も强かりき。

孔子定公の相となり、三桓を逐はんとしたれども成らず、哀公越の援を得んとせしも果さず、却りて越に逐はれたり。されど三桓中にも、季孫氏は陽虎の亂ありてより勢衰へ、次で他の二家も又凋落し、未だ主家を簒ふに至らず、何れも魯と共に楚の亡す所となれり。

齊の田氏　齊の桓公の世、陳の厲公の子陳完、内亂を避け、齊に奔りて其の臣下となり田氏を稱す、これを田齊の始祖となす。四世の孫田乞、景公に仕へ大夫となり、小斗を以て賦税を收め、大斗を以て米粟を施し　巧に民心を收攬し、宗族强大の基を開き、隱然勢力を養ふに至りぬ。

其の子田恒に至り、廢立を擅にし、簡公を弑して平公を擁し、益〻小斗税を收め、大斗以て施すの途に出で、民望を收め國政を擅にし、主家の宗族を除き、其の重臣を謀殺せしが、三傳して田和に至り、遂に齊を簒ひ諸侯となり、次で周の安王二十三年(西紀前三七九年)齊を滅して之に代れり。所謂田齊これなり。

晉の六卿　范・中行・知・韓・魏・趙の六氏を六卿と云ふ。厲公の時より六卿勢あり、中行氏厲公を弑せしより、晉室の勢衰へ、頃公の時に及びては晉室に容喙し、其の宗族を滅ぼすに至れり。定公の時、范・中行の二氏亂を起し、他の諸氏に逐はれて滅びしが、出公の時、知氏(知伯なり)勢最も强く、滅びし二氏の地を奪ひ、韓・魏・趙の三氏と共に之を分ちたり。

出公、其の擅恣を怒り、齊・魯と共に四氏を擊たんとせしが、身は反りて齊に逐はれたり。

四氏中知伯勢を專にし、哀公を立てて國政を執り、地を韓・魏・趙の三氏に求む、三氏連合して

之に抗し、知伯を滅ぼし其の地を分ち、諸侯となりて三晉と云ふ。其の後三晉の勢日に強く、晉室遂に滅ぶ、時に西紀前三七六年なり。

○知伯と趙襄子　知伯の威遂に晉室を壓し、韓・魏の二氏に割地を求む、二氏恐れて皆與ふ。知伯更に趙氏に求めたりしに、趙氏(趙襄子)應ぜず、知伯怒りて他の二氏と共に趙襄子を攻む。

嘗て趙襄子の父趙簡子、意を專ら民治に用ひ、尹鐸(インタク)をして晉陽を治せしめたり。尹鐸戶數を減じ、賦稅を輕くし、よく民を治めしかば、人民悅服し以て他日の保障となれり。簡子、襄子に謂ひて曰く『晉國に難あらば、必ず晉陽に寄すべし』と。

襄子父の言に從ひ、難を晉陽に避け、知伯に抗す、三氏共に來りて之を圍み水攻とせしかは、城中侵水甚だしく、城頭の僅かに現はるゝのみ。竈、沈して遂に蛙を生ずるに至りたれども、城中の人民一人の叛するものなく防戰したり。

襄子私に使を韓・魏二氏の許に送り、知伯の橫暴を說き、『脣破るなれば齒寒し、趙滅びなば韓・魏も之に次ぎて滅されん、如かず相約して共に知伯を討たんには。』と、

二氏遂に內應し、堤を決して水を知伯の陣中に注ぎ、相呼應して遂に知氏を滅し、其の地を三分せり。

○豫讓　知伯の臣に豫讓あり、國士以て遇せられし恩に報いんとし、詐りて刑人となり、襄子の宮中に入り、匕首を挾み厠を塗りて、襄子の至るを待ち。刺さんとせしが捕へられたり。襄子其の義士なるに感じ之を許せしに、豫讓更に身に漆して癩の如くなり、炭を呑みて聲を變じ、更に襄子を窺ひ、橋下に伏して其の途を待ちしが、露はれて捕へられ、襄子の衣に報ゆるを許されて殺され、後世に義士の名を殘したり。

戰國の七雄　今や、春秋初世來の列國、殆ど滅亡し盡きて、其のよく大諸侯たるの面目を保てるは、北に燕、南に楚、西に秦の三舊國のみにして、之に新興の田齊と三晉即ち韓・魏・趙の四國を加へ、戰國の七雄と稱す。今其の形勢を略記すれば左表の如し。

戰國の前半			戰國の後半		
國名	領土	國都	領土	國都	
秦	陝西・甘肅二省	雍 陝西省鳳翔府治	上記に四川省を加ふ	咸陽 陝西省西安府咸陽縣	
楚	湖北・湖南・江西三省と河南省南部及び安徽省の大部	郢 湖北省襄陽府治	上記に江蘇省を加ふ	郢 湖北省荊州府治	
燕	直隸の北部	薊 順天府大興縣	上記に盛京省を加ふ	同上(國都變ぜず)	
田齊	山東省	臨淄 山東省青州臨淄縣	上記に直隸省の小部	同上(國都變ぜず)	
趙	山西省中部及び直隸省の一部	晉陽 山西省太原府太原縣	上記に直隸の一部を加へ山西は大半となる	邯鄲 直隸廣平府邯鄲縣	
韓	山西省の東南部及び河南省の中部	平陽 山西省平陽府治	河南省は略同じけれど山西省の一部減ず	新鄭 河南省開封府新鄭縣	

魏	安邑	大梁
山西省南部、河南省北部、陝西省の東部	山西省解州府夏縣（夏の國都）	阿南省開封府治
	阿南省の北部及び東部のみに減ず	

七雄中、秦は地西方に偏すれど樞要の地を占め、東方は函谷關（河南省靈寶縣）の險を扼し、富國、强兵常に主動の地位に立ちて六國に對抗す。楚は南方無限の地を拓き、國大にして人裕に、燕は北方に雄視し兵輕捷にして戰に長じ、田齊は山東に據り、鹽鐵の利を擅にし民强く國富あり。

三晉は分立せしを以て地互に廣からざれど當時の中原、天下の要衝にして文化進み地饒に民又多し。

第二節　秦の勃興及び其の一統

孝公の發憤　秦の穆公曩に西戎に霸たりしが、當時夷狄として擯斥せられ、中國の會盟に與るを許されず、孝公の出づるに及び大に發憤し、其の雄略、大材を以て中國に逼り、祖先以來の富强を以て六國を壓倒し、其の辱めに報ゆる所あらんとす。

當時秦は穆公以來二百六十年間、中國攻爭の圈外にあり、靜に國力を休養して潛勢力を蓄へ、他日の雄飛を期せしに、今や英主孝公を迎ふるに及び、國力內に溢れを利し、遂に六國を制御せんとす。加ふるに地勢頗る有利にして六國に勝り、函谷關は進みて敵を制すべく、退きて自ら防ぐに足れり。

孝公、卽ち秦を一貫する傳統國策たる、人材登用に意を用ひ、天下に士を募り、賢に任じて他國人を利用し、益〻己の富强を圖らんとす。（商鞅、范雎、李斯以下秦の名相何れも他國人なり。）

商鞅の變法　西紀前三六一年（皇紀三〇〇年）孝公、商鞅を用ひ富國强兵の法を講ず、商鞅法を變じ國策を改め、新法を令せしかば、秦の國力頓に强大を加ふ。商鞅の新法は、卽ち富國强兵の策にして、國富と兵力の增進强大を改革の要點とす。

（一）富國策　(1)財源を豐富ならしめんとし、井田法を廢し、自由、力耕自然の實力競爭とし、土地の賣買を許し、開墾を奬勵して、收穫を增さしめ、民に二男以上ありて分家せざるものは、賦を倍して戶數を增し、國庫の增收を圖り、農耕、紡織に勤むる者は、力役を免じ、怠る者は官に沒して奴婢となす。

(2)　罪人の減少を圖り、以て國費を省き、勤勉なる民たらしめんとし、什伍（十家或は五家）の組合を設け、犯罪人あれば連帶責任とし、互に相戒めて犯罪を未然に防がしめたり。犯罪者を告訴する者は爵一級を進め、之を隱匿するものは死罪とし、犯罪の搜査を簡

にし、旅宿にも旅行免許狀なき者の宿泊を禁じ、犯人逮捕に便せり。

(二) **强兵策**　(1)一切の爵位は、軍功によりてのみ授くるものとし、衣・食・住を爵位によりて階級化し、富人も爵位なきものは、豪奢なる生活をなす能はず、王族と雖も軍功なきものは、其の籍を除きて禮遇せず。かくて秦は戰功を重んじ、首によりて位一級を進められ、所謂首級の語をなす、殺伐强兵の國となれり。

(2) 君權强大、階級嚴守を以て下に臨み、法令を嚴にし服從を强ひ、政治の評議を禁じ、新法に妨げある古書は、後年の秦火を待たずして焚けり。

○**商鞅**　商鞅は衞國の公子にして公孫鞅と云ひ或は衞鞅と稱せらる。其の商鞅と呼ばるゝは、功を以て商・於等十五邑に封ぜられしによる。商鞅天資酷薄なれども、刑名法家の學を好み之に長ぜり、魏の相、公叔座に仕へしに、叔座死に臨み、魏の惠王に說き『衞鞅若年なれども用ふべし、願くは之に政を委ねられよ、若し能はずんは、殺して他國の用たらしむべからず。』と、鞅、秘に之を察知して恐れ、逃れて秦に入り孝公に見へ、道を說きて大に用ひられ、變法自强の策を進む。

鞅、新法を定めしも民の信ぜざらんを憂ひ、一木を南門に立て、之を北門に運ぶものあらば、十金を與ふべしと告げ。民疑ひ怪しみて運ぶものなし。更に告ぐるに、之を移す者は五十金を與ふべしと。人あり試に之を攜びしに、約により五十金を與へられしかば、民皆新法を信ずるに至れり。

鞅、貴戚峻嚴毫も假借せず、太子罪を犯すや、法の破るゝは上より之を犯せばなりとし、其の傅公子虔を刑せり、西紀前三三八年孝公歿し、太子惠文王卽く、卽ち嘗に罪せられし公子虔等機到れりとし、鞅に其の怨を報ぜんとす。鞅逃れて旅宿に投ぜしに、旅宿は漫に人を宿せしむれば、商君の新法によりて罪せられんと云ひ之を拒めり。鞅、法を作るの弊を自ら歎ぜしも及ばず。自縄自縛遂に捕へられ、車裂の酷刑に處せられたり。

合從の策　秦は商鞅の新法を行ふ十年、富强七雄に冠絕し、自餘の諸侯之に敵するものなく、動〻もすれば個々擊滅の厄に遇はんとす、玆に於てか合從の說起れり。

從は縱にして南北に位置する六國の同盟を意す、卽ち六國攻守同盟を結びて强秦に當るの謂なり。

洛陽の人蘇秦は有名なる雄辯家なり、河南の鬼谷子に師事し、縱横の策を學びしが、落魄して故鄕に歸り、兄弟・嫂妹・妻妾の嘲笑を受けて發奮し、師道を研究考慮し門を閉ぢて出でず、遂に得る所あり。周の顯王及び秦、趙に說きて容れられざりしも、燕の文公を說き、趙の肅公を動かし、合從の基礎を作り、韓・魏・齊・楚の四國を合從し、『秦我が一國を伐たば五國之を助け、諸侯中、盟に背くものあらば、五國共に伐たん。』と約せり。

かくて蘇秦は遊說に成功し、六國の相印を佩ひ、車騎、輜重美々しく故鄕に錦を飾り、威儀一に王者の如し。兄弟嫂妻目を側てゝ敢て仰ぎ見る視るものなく、蘇秦をして人情の輕薄なるに驚

かしめ、喟然の歎を放たしむるに至れり。

これより秦兵恐れ、函谷關を窺はざる十五年に及びしが、後、秦は反間を放ち、說客犀首は齊魏を欺き、共に趙を伐たしむ。

趙王、蘇秦を責めしかば、蘇秦恐れ出でゝ燕に使し、齊に報ぜんとせしが、蘇秦趙を去りしより、既に從約解け同盟破れたり。

連衡の策　衡は横なり、東西を云ふ、東西に六國相連りて、西面し、秦に服事するの謂なり。主として連衡策を唱へしは、魏人張儀なり、張儀は蘇秦の友にして（鬼谷子を師とし蘇秦と同門なり）秦の惠文王に仕へ相となりしが、蘇秦が齊の太夫に殺され、合從破るゝに乘じ、（周の慎靚王の三年（西紀前三一八年）楚・趙・魏・韓・燕の五國秦を伐ち函谷關に大敗し、明年韓又秦と脩魚に戰ひて敗れ八萬を失ひ、諸侯震駭し策の出るを知らず。）得意の智辯を振ひ、先づ魏に說きて秦に成を請はしめ、楚を欺きて齊と離間せしかば、周の赧王四年、西紀前三一一年楚・韓・趙・齊・燕の諸國、皆張儀により秦に事へんことを約するに至れり。

されど秦の惠文王死し、武王位に卽きてより、張儀の親任衰へ、（張儀は出でゝ魏に赴き其の相となれり。）連衡の策又破れたり。

秦の世系　（其の一）

（一）穆公…（二）穆公…（二五）孝公—（二六）惠文王—（二七）武王—（二八）昭襄王—（二九）孝文王—（三〇）莊襄王—（1）始皇帝嬴政

遠交近攻の策　其の後六國の方針一定せず、或は合從し、或は連衡し、所謂『六國を滅すものは六國なり。』の愚を演じ、互に猜疑して賢臣に任ずることを知らず、徒に迷ひ爭ひしかば、强秦は益〻漁夫の利を占めたり。

卽ち齊は大賢孟子に聽かず、楚は忠臣屈原を汨羅の鬼とし、燕は當代一の傑物樂毅を罷め、魏は大兵法家吳起を自ら失ひ、趙は廉頗・李牧の名將を信ぜず凡物趙括を用ひ、韓は惜しき爲政家韓非を失ひて而も悟らず、六國の君主概ね凡庸暗愚にして、賢臣、良將を用ふるを知らず、却りて屢〻之を强秦の具に供するの拙策に出でたり。

秦の昭襄王立ちて又英明なり、六國相和せず、國力次第に衰微するに乘じ、魏の亡臣范雎（ハンショ）を用ひ其の勸めに從ひ、遠交近攻の策を採り、近きを越えて遠きを攻むるの愚策を改め、寸土、尺土をも接續して擴めんとし、齊・燕・楚等の遠國と親み、猛將白起等を擧げ、三晉を攻むること愈〻急なり。

時に周室の勢益〻微弱となり、赧王よりは東周・西周の兩周に分裂し、赧王は秦の强盛を嫉み、

六國と共に之を伐たんとし、却りて秦の怒りに遇ひて滅され、後七年東周又秦に滅さる。周は武王より三十七代八百六十七年（東周七年を合して八七四年）西紀前二五六年を以て終れり。

六國の滅亡　遠交近攻の策以來、諸侯孤立し、國君庸暗にして去就に迷ふ。秦は李斯に任じて其の計を用ひ、頻に反間を放ちて其の君臣間を離間し、然る後白起（秦第一の名將なりしが、范雎に讒せられて死を賜ふ。されど昭襄王、後外敵強く內に名將無きを歎じ、白起を迫慕して止まざるに及び范雎又後難を恐れ相を辭して秦を去れり。）王翦（ワウセン）・王賁の諸將をして漸次之を討滅したり。

即ち西紀前二三〇年、內史、滕をして韓を滅し、同二二八年、王翦趙を攻め反間を放ち、其の名將李牧を殺し次で之を併せ、同二二五年王賁魏を滅し、（魏の公子信陵君趙より歸り、故國を救ひ五國の兵を率ゐ、秦將蒙驁を河外に破り函谷關に迄至りしが、秦の反間に陷りて朝せず四年にして死せしかば、秦王政、王賁をして攻めて之を滅したり。）同二二三年王翦六十萬に將として楚を伐ち、其の將項燕を仆して之を滅し、二二二年王賁攻めて燕を併せ（燕は太子丹、刺客荊軻をして秦王政を刺さしめんとして成らず、却りて滅亡の期を早めたり。）同翌二二一年王賁轉じて南し、齊を滅したり。（齊王建は三晉・燕楚と與せず餘命を繫ぎ、其の相將又秦の賄を貪りたりしが、遂に滅され建は餓死せしめられたり。）

○列國の交際　周初の禮制來、列國は互に使聘を通じ、吉凶を慶弔し、賓禮を厚うして交りしが、春秋時代より王室の威令行はれず、諸侯、割據分爭するに及びては、孤立は國の存亡に係るを以て、各國は互に、會盟、締約を事とするに忙はしく、使聘の往來絕えざるに至れり。

かゝれば自然、諸國との應對に辭令勝れ、國威を辱かしめざるの名士出づべく、鄭は小國なれども、子產を出して面目を保ち、晉は叛向を出して、虎に翼を添へたり。

使聘は、幣物を持して赴き、賓客の禮遇を受け、主客共に詩を賦するの事等（此の事儀禮によりて定められる）ありて、互に交誼の意を表はすものとしたり。

會盟は、列國多く參會し、場所時日を定め、盟主は時によりては牛耳をとり、會盟者と共に其の血を畝りて誓をなし、所謂牛耳を把るの語をなせり。會盟は又其の性質により兵車の會、衣裳の會の二者に分る、宋の向戌が主唱して晉楚齊秦に說き、鄭衞魯陳蔡曹許等の諸國を宋に會して、共に兵を弭めんことを誓へるは、春秋會盟中の大なるものにして、春秋時代の弭兵會議として名あり、近時の國際聯盟に似たりと見るべし。

又諸國各〻寶物を持し秦の爲め臨潼に會合せる時は、楚の伍子胥、詩を賦し、鼎をかゝげて座を廻り、明輔の役を爭ひて贏ち得し如きも、會盟中名高し。

○孫臏（ソンヒン）と龐涓　孫臏は孫武の後なり、又孫子と稱す、曾て龐涓（ハウケン）と共に兵學を學ぶ。龐涓將軍となり魏に仕ふるや、己の孫臏に及ばざるを恐れ、之を刖り黥して藥つ。齊人の魏に使せしもの、密に之を車に載せて歸る。（臏、脫出を涓に覺られんことを恐れ、詐りて自ら呪し、己の星を隱し死を裝ふ。涓知らず臏の星光なきを見て喜ぶ。）

周の顯王二十八年、魏、龐涓をして韓を伐たしむ。韓五戰五敗、救を齊に求む、時に孫臏齊の威王に用ひられ軍師たり、即ち田忌を將となし（臏は已は刑餘の者なりとて將を辭し、軍師となりて車中に計を策す。）魏都安邑に迫る。

既にして魏將龐涓韓を捨てゝ歸り、太子申と共に齊軍を邀ふ。孫臏士卒の魏地に入るや、竈十萬を造らしめ、翌日は五萬に減じ、翌日は二萬に減ず、涓、之を見て『齊軍三日ならずして、逃亡するもの斯くの如し。』と、其の步軍を置き、輕銳のみを以て齊軍を急迫す。臏、行程を測り、日沒頃馬陵道の狹路に至るべきを知り、大樹を道に橫へて障礙とし、『龐涓死二此樹下（セン）ニ』と書し、萬弩を道に伏せて待たしめ、火の揚るを見ば、一齊に放つべしと。

涓、之を知らず果して日暮馬陵道の隘路に至りしに、大樹道を妨ぐ。忽ち士卒樹に何事か書したりと告げしかば、涓近

づきて火を擧げ、燭して之を讀むに前記の文あり。驚き懼るゝの間なく、此の時萬弩一齊に切つて放たる。魏軍大に亂れ、涓『遂に豎子の名を成さしめたり。』と呼び、自ら刎ねて死す。齊軍勝に乘じて魏軍を破り、太子申を虜にして歸れり。

樂毅と田單　六國の合從は當然なるべきに係らず、互に相爭ひしが就中、齊燕の報復を以て最も甚だしとなす。齊の湣王は、燕王噲が政を忘り且つ欺かれて位を其の相、子之に讓りて國亂るゝを見、伐ちて子之及び噲を殺し、勢を燕に張れり。

燕の昭王立ち齊に報いんとし樂毅を擧げて亞卿とし、大に齊軍を破り、半年に七十餘城を降し、恩威並び施せしかば、齊の地殆ど燕に沒入し國命旦夕に迫れり。

されど太子法章(襄王)の據れる莒と、王族田單の保てる卽墨のみは敢て降らず、時に樂毅を齊王に讒せる者あり、昭王聽かず、却りて樂毅を齊王に拜せしに、樂毅恐懼して受けず、死を以て誡を誓へり。

然るに昭王死して惠王代るや、田單の反間に陷り、毅を疑ひて輒め別將を以て代へしかば、田單喜び謀を用ひて燕軍を惑らしめ、所謂火牛の計を以て之を破り、勢に乘じて進擊し、七十餘城を悉く復し、法章を臨淄に迎へ襄王とせり。齊王大に田單を重んじ、相となし安平君に封ぜり。毅去りて後趙に赴き大に用ひられしが、燕を伐たんとするや泣いて止む。燕又毅の舊功を憶ひて厚遇する所あり、毅、兩國の間を往來し、遂に趙に死せり。

○戰國の四君　戰國の世諸國の有力者は、天下の策士、說客を養ひ、其の才能を利し、以て他日の有事に備へたり。就中齊の孟嘘君田文、楚の春申君黃歇、趙の平原君趙勝、魏の信陵君魏無忌を戰國の四君と云ひ、何れも門下に數千の食客を養へり。

孟嘘君は、食客中雞鳴狗盜の輩を出したりと雖も、爲に函谷關の險を越え、春申君は楚を五國の盟長たらしめしも、秦と戰ひて敗れたり。平原君は食客毛遂の『長錐よ囊らんか』の意氣を利し、楚王を說きて春申君を動かし、信陵君は凡將晉鄙の軍符を奪ひて將となり、大に秦軍を邯鄲に破りて、一時其の銳を挫きたり。

秦の一統　秦の昭襄王死し、孝文王卽ぎしも數日ならずして歿し、莊襄王代り(在位三年)更に其の子政に至る。此の間呂不韋相となり、政を執りしが、讒て逐客令を排せし李斯大に用ひらる。(秦王政は、實は呂不韋の王后に通じてより生れしを以て、通常呂不韋の子なりとさるが、李斯大に辯じ、商鞅・張儀・范雎の例を擧げ、客を逐ふべからざるを述べ、自らも用ひられたり。逐客令時に出でし)李斯卽ち反間の計を設け、前述の如く諸國君臣の間を毒し、漸次兵力を以て討滅し、秦一統の時代を致し、玆に戰國時代を終りたり。

第五章　周末の學術

第一節　儒道の起原

學藝の勃興　周末は、漢族文化が實に燦然たる光輝を放ちたる時代にして、之を助長せし原因も多けれど、今之を略述すれば、

（一）東周以來周室衰へ、周公の制定せし階級制度弛廢し、（周代制度の束縛は、其の利益以上に弊害を生じ、人智を萎縮すること大なりき。）禮法全く頽れ、言論の束縛解け思想自由となり、實力競爭、適者生存の時代を馴致し、才能によりては、一匹夫蘇秦の如きも、相印を佩ぶるに至りしかば、幾多才識ある士は奮起勇躍青雲の志を抱き、其の天分を發揮せんとするに至れり。

（二）王室上に衰へ、諸侯下に爭ひ百姓塗炭に苦しむ、志ある者亂離の時弊を匡し、所謂救世濟民の實を擧げんとし、各〻信ずる所の自家の所見を訴へ王侯を動かさんとす、かくて諸子百家欝然として起り、文化研爛の華を開かしむるに至りぬ。（人智、文化の發達は實に自由の競爭にあり、漢族の文化は國家的束縛を蒙ること多く、周末の如き絶對自由に近き時代は永遠に至らず、隨つて各方面に於ける百家の諸說も其の後敷衍せらるゝこと多く創造せらるゝこと少かりき。）

儒家　孔子、名は丘、字は仲尼、西紀前五五二年（皇紀一一〇年殺靖天皇の三十一年）魯の昌平鄉の陬邑の闕里（山東省兗州府曲阜縣の東南）に生る、實に儒家の祖たり。魯は周公の封國にして、典禮の盛なること、春秋時代に至りても尙衰へず、孔子も亦幼より、俎豆を連ねて禮容を嫺ふ、蓋し故なきにあらざるなり。

三十にして學略〻成るや、世道の陵夷を歎じ、天下を禍亂より救濟し、禮樂制作を振起し、周初先王の太平に復せしめんとし、諸國を周遊し、其の道を行はんとせしが容れられず、卽ち歸りて詩・書・禮・樂を修め、春秋を筆削し、其の道を後世に傳へ、西紀前四七九年七十三歲を以て魯に歿せり。其の弟子天下に普く三千餘人、身六藝に通ずるもの七十餘人、就中顏淵（顏回）・閔子騫・冉伯牛・仲弓・冉有・季路・宰我・子貢・子遊・子夏を孔門の十哲と稱す。（顏回最も著はれ、孔子も『賢なる哉回や。』と口をきはめて之を稱贊せしが、不幸にして早く歿せり。）

孔子の學說は、仁を以て根本とし、人倫至情の血族的親愛心たる孝悌より發し、忠恕を說き禮を述べ、修身を本とし、卑近なる家族制度に及ぼし、治國平天下に至るべきを論ぜり。

故に彼の政治は、道德を離れて政治なく、彼の諸家の說くが如く法律一點張にして、道德と離れし冷かなるものにあらず、又其の學說の範圍は、現象界の事實に止り、宇宙、人生の根原等の如き、深遠なる哲學、倫理說に至らず、故に老子の如き道家とは、大に趣を異にしたり。（後世道家に對し、）

其の所說を爭ふ頃に至りては、孔子の學說は人爲的にして、到底老子の宇宙・天道を說ける、深遠なる哲理的根據を有するものに比し、淺膚なるを免かれず。子思の中庸は道家に對抗し、儒家の哲學的根據を確立せんとせしものにして、誠は人間行爲の基本なることを說けり。

孟子、名は軻、字は子輿、西紀前三七二年頃鄒に生る、山東省兗州府鄒縣にして、魯に近く周公及び孔子の感化多きや必せり。孔子の孫、子思(名は伋)の門人につきて儒家の說を學び、四十にして鄒に歸り諸國を歷遊し、先王仁義の道を說きしが、時恰も戰國時代に際し、諸侯は富國强兵に熱中せしかば、迂遠なりとして顧みず、卽ち自ら退きて孟子七篇を作り、後世に其の道を傳へたり。

大聖孔子に對し、大賢と稱せらるゝは實に孟子なり、彼の學說は孔子を祖述し、王道を尊び覇道を賤み、仁義を重じ功利を輕ず、性善說を唱へ、人間の先天的なる惻隱・羞惡(シウアウ)・辭讓・是非は仁・義・禮・智の四端たるべきを述べ、何人も先天的に此の四端を擴張すれば、道に至るべしと說けり。一例を擧ぐれば、鼓に小兒あり、然に井戸に陷らんとするを見れば、何人も惻隱の情を起し、己の仇たる者の子たると、或は知人の子たるとを問はず、直ちに之を助くるに至るべし。かく人間には、先天的に惻隱卽ちあはれみの心を有す、卽ち性善なるの證なり。この惻隱の心を擴張せば、完全なる仁の德に至らんとなせり。

○荀卿　荀子は名を況(或は卿)と云ひ趙人なり、孟子より少しく後れ、西紀前三二一年頃より二二一年頃の間の人とされど、正確に知り難し。年五十頃齊に至りしが後、楚の春申君に用ひられて蘭陵の令となり、春申君死後、不遇の裡に楚に客死せり。孟子と同じく孔子の說、卽ち儒敎を祖述し、つとめて楊墨等所謂百家の說を斥けしと、二人共相同じ。荀子の學說は、禮を本として外面的束縛を重んずる子夏の派を汲みたれば、孟子と異り性惡說を唱へ、外面よりの拘束につとめたり。當時戰國亂離の世にして、性善を豫想するに難く、亂臣賊子多く、事實は性惡說を裏切るの狀勢にあり。故に荀子は、人間を自然のまゝに、放任する時は擾亂絕えず、古の聖人すら禮制を作る、是、性惡を豫想せるものにあらずや、故に人間の性は惡なり、宜しく人爲的方法を以て外部より檢束矯正すべしとなせり。

彼の孟子が四端を內部より擴大するに對し、外部より人爲的禮法により性を檢束するの法をとり、彼の保守的なる多きに比しては、進步的の見を持せり。一例を擧ぐれば技に小兒あり、彼等の前に玩具・食物等を置けば、直に爭ひて之を奪ひ合はんとす、又虫魚等を玩ぶを見ても殘虐を敢てして顧みず、是、何人も敎へし所にあらず、先天的に性惡なるによれり。故に之を矯正し、道に進ましむるには、人爲的に拘束あるべき敎育を要すべしと。荀子の學派を汲める李斯韓非何れも法を以て後世に著はる。

道家　道家は老子を祖とす、老子性は李、名は耳、字は聃(ダン)孔子と時代殆ど同時代にして稍く先輩なれど委しく知り難し。同じうして楚の苦邑(河南省歸德縣)に生る。孔子曾て周に行き禮を老子に問ひしに、『良賈は深く藏して空しきが如く君子は盛德ありて容貌愚なるが如し。』云々を述ぶ。孔子諸弟子を顧みて『吾老子を見るに、其猶龍の如きか。』と云へり。周の守藏の吏となりしが、周の衰ふるを見、遂に去りて函谷關(或は散關)に至りしに關令尹喜と云ふもの、老子の隱遁を覺り、書を著はさんことを請ふ。老子卽ち道德の意、五千餘言を述べ上下二篇よりなる老子道德經なり。去りて終る所を知らずと云ふ。老子の所說は儒家と頗る異り、無爲自然を尊び、禮儀制作を排し、虛無を旨とし太古淳朴の風に復すべしと說き、一切の智力を斥け、當時の繁文縟禮を笑ひ、かくては天下の亂源絕えずとせり。無爲自然を尊び、唐虞三代の儒敎の理想的の治を倚ばず人爲的とす、後人、是、黃帝に由づるものなりとし、黃老の道と稱せしが更に道家一變して道敎をなすに至れり。

○列子　老子の道卽ち道家を祖述せしは、列子と莊子となり。列子は鄭人にして名を禦寇と云ふ。（孔子の孫子思と同時代なりと稱せらる）其の事蹟も多く傳はらず、列子八卷あれど彼の作と稱せらるゝに過ぎず甚だ疑問なり。

列子、鄭にありて貧困なり、鄭の大臣人の言を聞き、列子の賢を知りて粟數百石を送る。列子受けず　列子の妻、飢苦に迫るを以て夫を怨みしに、列子曰く『大臣は人の言によりて、吾に粟を贈りしものにして吾が賢を自ら知りしにあらず、聽て人吾を誹らば、又吾を罪せんも計り難し、且つ人の爲めに扶持せらるゝ者は、其の人の爲めに死せざるべからず、吾、此の故に己の身を、粟に代ふるに忍びず。』と、後一年、果して鄭に內亂起り、義の大臣殺され、其の黨與多く之に殉ぜり、然るに列子は、事に超然たりしを以て危難を免るゝを得たりと。

○莊子　莊子名は周、宋人にして孟子と時を同うして、互に相らずと云ふ。博學多才、百家の學に出入し、當時の碩學又彼に論破せられて、顏色なかりきと稱せらる。楚の威王、其の賢を聞き、幣を厚うして相たらしめんとせしが應ぜず、莊子使者に謂うて曰く『厚幣、相位貴きが如し。されど祭日、神前に殺さるゝ犧牲の牛を見ずや。平時は美食に飽き彩衣を着、甚だ幸福なるが如きも、一旦祭日近づかば、死期眼前にあり、遂に彼の穢舍に轉々する、小豚とならんとするも能ふべからず、吾は名利を求めず、何等束縛なくして自然を樂まんと思ふなり。』と現存する所莊子三十三篇あり、文筆自在にして、後世に歎美せらる。

第二節　諸子百家及び文學

諸子百家　楊・墨を始とし、法家・兵家・名家・縱橫家・雜家等、儒道以外に諸家轡然として起り、漢族の智力空前の域に至る、此等を總稱し諸子百家と云ふ。

○楊子　楊子名は朱、字は子居、其の年代、事蹟等殆ど傳はらず、僅に列子、孟子等の諸書に散見する所によりて、大要を窺ふのみ。

其の說は、自愛を主とする快樂說にして曰く『人生は夫れ朝露の如し、此の久竟、如泡の瞬間にありて、名利を逐ひ禮制に促はれ、奔命に勞れて一生を終る、愚も又甚し。故に吾等は此等の爲め、何等の束縛さるゝ所なく、其の好む所に隨ひて、天賦の快樂を受け、安慰を擅にして一生を過さんのみ、死後萬年の美名も、生前一時の快樂に若かず、死後吾を美むるも、將又醜るも吾之を知らざるなり。一毛を損して、天下を利するとも之をなさず、天下を悉くして、吾に奉ずるとも又取らず。』と、楊子の自愛說は、極端なる個人主義說にして、天下又彼の眼に耳を傾けば、名利を逐はず、無競爭なる泰平の世を馴致すべし、との理想論を說きしなり。然れども今日、我が國體上より之を見れば、虛無思想同樣にして、更に危險なる思想と云ふべし。

○墨子　墨子名は翟、宋人なり。大夫となり、宋の爲めに强敵楚と戰ひ、百方苦心して防守し、所謂墨守なる語を殘せり

楊子の自利、自愛の說に反し、兼愛の說を述べ博愛主義を唱導し、『天地萬物は、等しく天意により平等に恩澤を受く、晝夜、四季の交代、推移皆然り、人類も亦博愛互に利せば、天意に合して泰平を受くべし。』と、彼は兼愛說を唱ふる結果、勤儉、實用を勸め、戰役を回避し、奢侈を惡み、薄葬、非樂、非命、尙賢を以てしたり。墨子五十三篇は今日に傳はれど、悉く彼の手になりしやは疑ふべし。要するに、楊・墨の說は一の偏說に過ぎざれど、孟・荀二子の如きは、極力其の排擊に努めしを見れば、又以て當時世間に行はれたりしを知るべし。

○法家　法家は名を以て形を正すを本とし、天下を治むるには法術を以てし、仁義を以てすべからずとす、而して法は吏の民を治むる所以、術は君の吏を理むる所以なりと。

李悝は法家の祖（春秋時代管仲既に法家たり）たり、戰國の初め魏の文侯に仕へ刑律を制し、支那法律の淵源をなすと

稱せられ、李悝の六篇あり。

申不害は韓に仕へ術を以て群臣を御せしが、未だ法を以て望まず、商鞅出でしも法ありて術を說かず、遂に韓非に及べり。

韓非は韓の王族なり、李斯と共に荀子に及ぶ。荀子の性惡說の感化を受け、法を以て拘束するの途に出で法家となれり。天性、犀利明敏、口吃にしてよく談ずる能はざれど文筆に長じたり。

法術を合せ說き屢〻韓侯を諫めたれど用ひられず、孤憤・五蠹・說難等を著し、用ひられざる憤を洩し、儒者游俠者等五種の人物は國家を蠹毒すと罵り、或は諸國遊說の困難を述ぶ、今日傳はる韓非子は此等を集する所なり。此書秦に入りしに、秦王政歎じて曰く『吾此の書の作者の如き人物に遇はば死すとも悔ゆる所なし。』と、李斯之を聞き韓非なるを告ぐ。秦王政韓非を得んとし、韓を攻め之に會する得て大に悅ぶ。

時に李斯、秦王に重用せらる、韓非才學あれば戀て己よりも重く用ひられんを嫉み、秦王に讒して獄に下し、密に毒殺したり。

○兵家　孫武（孫子）は齊人なり、兵法を以て吳王闔閭に仕へ、西、强楚を伐ち破りて郢を陷れ、北、齊・晉を威して其の名を諸侯に知らしむ、孫子十三篇は存して、精しく用兵の要を說けるのみならず、文辭又精妙、誓く愛讀せらる。卽ち『百戰百勝は、善の善なるものに非ず、戰はずして人の兵を屈するは、善の善なるものなり』と。

吳起（吳子）は衞人、魏の文侯に仕へ戰功を立つ。其の兵法を錄せる書、吳子四十八篇は、文、孫子に劣れども、實地用兵を說く點に至りては、孫子の抽象的なるに勝り、孫子と並稱孫吳の兵法と云ふ。支那兵學の經典にして、又我が國兵略家間にも愛用せらる。吳起、後走りて楚の悼王に仕へしが、楚王死後內亂あり、射殺せられて終をよくせざりき。

尉繚（ウツレウ）は魏人なりとされるれど、其の事蹟傳はらず、尉繚子二十四篇を殘存し、兵家七書中に入り孫吳に次げり。六韜、三略等の書あり、張良が黃石公より得しものにして、太公望の著なりとすれど、信すべきものにあらず、又孫吳より下れりとす。

○名家　名家は、名分を編めんとするより起り、名實を相伴はしめんとし、名のある所を以て實を責む。然れども其の弊は徒に名實異同の穿鑿に陷り、堅白異同、白馬非馬、鷄三足、蒙二耳等の詭辯を弄し、敵者を論壓し啞然たらしむるに止れり。名家の學は、其の嚴嚴なる法家に似たるを以て、兩者を併せ刑名の學と云ふ、一の論理學にして、名實の不伴を論じ、無用の穿鑿に時を費せしものなり。

卽ち公孫龍曰く『白馬は馬に非ず、馬は形に命ぜし名にして、白は色に命ぜし名なり。色に命ずるものは形に命ずるものに非ず、故に白色及び馬はあれど、白馬なる馬は非ずと。又曰く『堅白石は、堅白合して始めて石となる、天下白なければ、以て石を見るべからず、堅なければ石とするに足らず、故に離せば堅白各〻異りと雖も、合すれば一なり、著し一たらざれば、石となる能はず。』と、

趙人公孫龍・魏人惠施を始め、鄧析・伊文の徒あり、各〻說て立て、碩學英豪を屈し、是非眞僞を混淆して樂めり。

○縱橫家　河南の鬼谷子は縱橫家の最たり、よく儒・墨・名・法の間に出入して說を立て、其の徒に蘇秦・張儀・公孫衍を出せり。蘇張等一介の貧士より起り、天下の相印を佩び、富貴を一身に集むるや、策士・說客雲の如く起り、縱橫の說を各〻に持して下らず、六國の凡主をして迷はしむ。蘇秦の弟蘇代（趙王に鷸蚌（イツパウ）の爭、漁夫の利を說きて名高し。）蘇厲を始めとし、樓緩・虞卿・周最の徒あり、皆蘇張に倣ひ天下諸侯に遊說し、縱橫の術を以てせり。

○雜家　雜家は、其の學主とする所なく、諸家の間を出入せるものにして、名家縱橫家中よりも之に屬するものあり、鬼谷子、尹文等亦此の內にも加へらる。

稷下（齊の城門の名にして、齊は天下の賢士を招き、高門、大屋を作り、賓客として優遇せり。）の諸學士に名ある、

騶衍（陰陽五行說の大家）淳于髡（シユンウコン）を始め、愼到・田駢・尹文あり、（孟子、荀卿も來りて其の賓となり、或は大夫の待遇を受けたり。）宋鈃（ケン）・鶡冠（カツ）・鬼谷も亦一派の說をなせり。

○農家　農家は神農を祖とするものにして、立國の大本を農なりとし、許行・陳相の徒を出したり。

先秦の古書　先秦の文學は、實に支那文學の淵源をなすものにして、雄偉莊重、深遠奇峭、後代之を範とせざるなく、孔老を始め諸子百家悉く然らざるなし。

當時世に行はれし書に、三墳・五典・八索・九丘の類ありと雖も、何れも今日に傳はらず、今日に存するは、易・書・詩・周禮・儀禮を最も古しとなす。易は伏羲氏の作にして、周の文王此の書の辭をなす、書は堯舜より秦の穆公に至る、詩は三百餘篇あり何れも孔子の筆刪せし所なりと云ふ。周・儀禮は周制及び冠婚葬祭を記し周公の著とさる。

管子は管仲の著、春秋は孔子の作にして魯の史を記す、編年體史の始めとす。論語は孔門文學の精華にして、其の門人の編なり、孔子の面目躍如たり。

老子は文章幽玄に、莊子は變幻端睨すべからざる奇犀の筆あり、孟子の雄渾正大なる、中庸の義理深遠なる、墨子の奇直なる荀子の絢色ある、韓非子の峻厲なる何れも後代の範たらずんばあらず。

左丘明は左氏傳（左傳）を著はして、春秋の簡を補ひ、國語、戰國策又出でて當時の風尙を傳ふ。國語は春秋列國の言談の委曲を記し、左氏の作と傳へられ、戰國策は十二國史官の筆に成れりと稱せらる、戰國時代の權謀術數を記し、文章奇偉なり。尙、呂氏春秋は、呂不韋陽翟の賈人なれども奇才あり、秦の相位に登り范雎の後を受く。己、郡耶の美姫を身らましめて王に納れ、政卽ち始皇帝を生ましめ、君寵厚く文信侯となり、更に政、秦王となるや仲父と稱せらる。されど太后はもと己の情人なるを以て、倘密に通じたりしに露れて免ぜられ、誅の及ばんを恐れて自殺せり。の客の集めしと、傳へらるゝものなれど、又當時を寫して妙韻あり。

文學　詩賦、文章は、周代より漸次發達し、當時一科の學たりしが、春秋時代を經て、長足の進步遂げたり。

戰國攻爭の間は、純文學として詩三百篇のある以外、策士說客の辯論を重んずるあれども、雅趣ある者に乏しかりしが、屈原出でゝ賦體の一格をなし、其の弟子宋玉と共に、之を完成したり。

屈原名は平、楚の懷王に仕へ、博聞强記、治亂に明かにして左徒となる。よく王と國事を議し、諸侯に應對して名望あり。されど同輩、屈原の君寵を嫉み、王に讒せしかば、之より用ひられず、屈原憂鬱し、離騷の賦を作りて自ら怨む。懷王、愚直にして後張儀に欺かれ、屈原の諫を用ひず、張儀を殺すべしとせしも能はず、彼の諫を用ひず武關の會合に出で擒となれり。屈原更に讒せられて放流九年に及べども、楚の爲めに盡さんの忠誠を變ぜず、顏色憔悴、混濁の世を歎じ、自ら淸めるを慰めしが、遂に懷沙の賦を作り、石を抱き汨羅（ベキラ）の淵に投じて死し、楚人の哀傷する所となれり。

宋玉も亦楚人、懷王の子頃襄王に仕へ、辭賦をよくして寵を受け、王に從ひて雲夢の臺に遊び、大言、小言を賦して名高く、雲夢の田を賜はりて、其の才を稱せらる。

雜事の一般　醫術は神農に始り、草根木皮を用ひしが、春秋時代には、齊の桓公を診せし大醫扁鵲（ヘンジャク）印度の耆婆と名を等うし耆婆扁鵲と云ひ、又三國時代に關羽を治せし華陀とも並稱せらるゝ大醫なり出で脈を檢し、又針灸の術も行はれたり。

天文は、堯時代に既に行はれしこと前述の如し。されど曆時は、夏・殷・周正朔を異にし周の正月は夏の十一月に當れり等。且つ太陰曆を用ひたり。周代、天體を二十八宿に分ちて運行を推測し、星宿を諸國の分野に宛て、天象により吉凶を判ずる迷信行はれ、占星術發達す。後には王侯相將を又之に配したり、孫臏已の星を隱し、孔明五丈原に其の星の流れしの類なり。

農業は周の祖先后稷の司る所なりとし、歷代之に力を注ぎ親耕躬桑の禮あるは前述の如し。

商業は神農の日中市をなして、交易せしめしに始まるとせらる。未だ盛なるに至らざりしも、大市、朝市、夕市ありて有無を通じたり。旅商あれども、貨物の稅を關門にて徵せし爲め、發達するに至らず。

○貨幣　貨幣は、始め貝類、龜甲を用ふ、貨財、買販、賣買の字の貝あるは皆これによれり。刀或は布も貨幣たりしを以て、後世の錢貨は之に象り、刀貨、布貨と云ふ。刀貨は齊の太公望之を鑄て、其の國內に使用せし所にして、後の管仲頃には、盛に用ひられしこと記載あり、今日齊法貨として、傳へらるゝ刀貨是なり。周の景王二十一年大錢を鑄る、是後世の圓郭方孔錢（圓形にて四角の孔）の始なりしが、使用に便なる爲め、漸次之に改まれり。

布貨は、戰國時代韓の宅陽にて鑄造せし、宅陽布最も著はる、其の形凸字形、或は凸字の底部を剔りたる如き形をなせり。

第二卷　中古期

第二篇　秦・兩漢・三國及び西晉

第一章　秦の興亡

第一節　始皇帝の政策

始皇帝の政　秦王嬴政位に即きて二十六年、天下を一統し自ら始皇帝と稱す、蓋し功業三皇五帝を兼ね、百代の始王たるの謂なり。六國既に王を稱す、至尊の號とするに足らず。即ち三皇・五帝に擬り始皇帝と號す。諡號は臣子にして君父を議する、非禮の所爲なりとして之を停め已より後は二世、三世と稱して萬世に至り、更に無窮に傳へんとす。始皇、帝權を强大にし、自ら朕と稱し、命を制とし、令を詔と改む。世襲の基礎を確固たらしめんとし、諸種の方策を採れり。

始皇の內治　(1)　郡縣制　先づ封建の制度を改め、延尉李斯の議を納れ、郡縣制度となす丞相王綰は、諸王を以て飜し、封建制を立つべしとせしが、李斯は、周代の弊を說き、諸王骨肉と雖も後世疎遠となれば、相爭ふことなしとせずと論じ、郡縣制の時勢に適せるを述ぶ。周末諸侯跋扈の弊に鑑み中央集權の實を擧げ、天下を悉く皇帝の直轄とし、中央、地方皆官吏をして治めしむ。始皇、李斯の言を嘉納し、自らも封建制は國中國を建つるもの、即ち兵を樹つるものなりと云ひ、天下を分ちて三十六郡となせり。

(2)　官制　中央政府には、丞相・大尉・御史大夫を置き、丞相は大政を總べ、大尉は兵馬を司り、御史大夫は監察に任ず。

地方は、郡毎に守・尉・監各〻一人を置き、守は民治、尉は兵を統べ、監は之を監察す、一に中央の三大官を縮少せるが如し。

即ち行政、兵馬、監察(司法)の三大權は嚴然と分たれ、一人を以て兼ぬる能はず、皇帝上にありて而も三大權を統ぶ、故に臣下の權輕く、君權强大なり。

(3)　兵器の沒收　始皇、海內の亂源を塞がんとし、民間の兵器を沒收し、國都咸陽に聚め、銷して鐘鐻・金人を鑄、天下の富豪十二萬戶を咸陽に移し、地方の有力者を失はしめ、國都を富ませし。

(4)　土木と巡遊　刑徒七十萬を役して盛に土木を起し、阿房宮を渭水の南に造り東西二百間、南北四十丈、上に萬人を坐せしむべく、下に五丈の旗を立つべし。離宮を造ること關中に三百、關外に四百餘、皆結構壯麗を極むと云ふ。

始皇屢〻諸郡を巡遊し、泰山に封じ梁父に禪す、封禪は天地の神を祀るの謂にして封は泰山の如き天に近き山に登り土を盛りて天神を祀り、土を除きて卽ち廣平にして地神を祀る共に其の成功を天地に告げんとする儀式なり。碑を建てて秦德を頌せしめ、天子の尊嚴を示して、人心を威壓したり。始皇不老

長生の術に迷ひ、方士をして海に入り、神仙を求めしめしが能はず。張良は、其家五世韓に仕へて秦に報ぜんとす。偶〻始皇遊して陽武の博浪沙に至るや、力士蒼海公をして、崖上より鐵槌を投下し、其の車を粉碎せしむ。されど副車に當り、始皇怒し、帝卽ち天下に命じ、犯人を求めしむること急なりしかば、張良逃れ名を變じ下邳に潛匿せり。されど戰國時代の餘風を恐る者多く、秦治に服せず。

(5) 焚書坑儒　戰國時代の餘風として、尙言論自由なりしかば、學者中新政を喜ばざる保守者も多く、頗る朝政を誹議し、民心或は動搖せんとし、又海內の思想も一ならず、始皇、李斯の上書を容れ、西紀前二一三年挾書の禁を發し、民間の藏書を官府に收め、秦の記錄・醫藥・卜筮・農業等の書を除くの外、悉く之を燒き、咸陽の書生、四百六十餘人を捕へて坑殺したり。是始皇の暴政の最たるものにして、詩書の滅亡又此の時にありとし、非難の聲高きが、當時の時勢としては、改革上止を得ざるに出でしこと多く、詩書も民間の所藏を焚きしに止り、博士の所藏は之れを存したり。されど後年咸陽陷りて滅盡す、人或は蕭何の管理の嚴ならざるを惜しむ。挾書の問は始皇間もなく死せしを以て三四年間なり、當時竹帛或は暗記を以て傳へしかば、さのみ影響なかりしとも云ふ。始皇の長子扶蘇、焚坑の暴を諫む、始皇怒りて改革を妨ぐとなし、之を北方塞上に遣り、匈奴に對せる蒙恬の軍を監せしむ。

始皇の外征　始皇國內平定し、帝權加はるや、更に外征の功を立て、威を國外に輝し、內亂防壓の途に出づ、民の疾苦の如きは、其の問ふ所にあらず。始皇遵取にして果斷決行、積極政策にのみ努めて敢て憚からず、蓋し暴に流るゝ所多きも、亦男性的人物たるを失はず。

(1) 北方經營　春秋時代、諸侯攻爭の間に乘じ、戎狄跋扈し、內地を窺ひしが、戰國の七大國起り、國力盛なるに及び、次第に塞外（大體に於て長城以外の義なり。）に逆攘せられ、之に境を接する燕・趙・秦の諸國は北邊に地を拓き、長城を築きて之に備へたり。

戰國の末に至り、戎狄中匈奴最も强く、南侵するに至りしかば、始皇、將軍蒙恬をして兵三十萬を率ゐしめ、之を擊攘したり。

蒙恬、匈奴を破り、河南（鄂爾多斯）の地を略し、長城を增築し、臨洮（甘肅省鞏州府洮州）より遼東（盛京省奉天府）に至らしめ、蜿蜒七百餘里、所謂萬里の長城をなし、自ら上郡（陝西省綏德縣）にありて之を監し、威名匈奴に振ふ。

(2) 南方經略　始皇、地を南に擴め、南越を伐ち廣東・廣西及び安南方面に至り、夫々南海・桂林及び象郡の三郡を設け、謫卒五十萬を發して、南嶺に屯せしめしかば、秦威南方に伸び、疆域周代に倍し、諸國秦を訛りてシナと呼び、遂に今日支那の國號の基をなすに至れり。

第二節　秦の滅亡

始皇の殂落　西紀前二一〇年、始皇東遊して病み、自ら起たざるを知り、長子扶蘇に書を賜ひ、喪と咸陽に會せしめんとす。

時に少子胡亥・丞相李斯・宦者趙高等始皇に從ひしが、其の病みて沙丘（直隸順德府平鄕縣）に殂するや、趙高

遂に遺詔を矯め李斯と謀り、扶蘇・蒙恬が功高く、且つ雄兵三十萬を擁するを忌み、之に死を賜へり。蒙恬詔を疑ひ之を正さんとせしに、扶蘇之を制して義を守り共に自殺せり。扶蘇に於て少子胡亥位を繼ぐ、卽ち二世皇帝なり。異變あらんを恐れ始皇の喪を秘せしが、時に暑氣甚だしく屍體腐爛し、異臭を放つ。試めに一石の鮑魚を車に積み、其の臭を亂しまぎらはせつゝ咸陽に歸り喪を發せり。

趙高の專權　二世皇帝胡亥暗愚なり、秦を誹りて亡げし方士盧生が曾て秦を亡す者は胡ならんと豫言せしに、始皇胡を夷と解し長城を築しが、禍は蕭墻の內に起り、胡は却りて胡亥なりしとは笑ふべし。二世卽位後、東遊し、趙高に語るらく『人の世にある、猶六驥の馳せて決隙を過ぐるが如し。耳目、心志を好樂せしめて、年壽を終らんには。』と、趙高、言を迎へ『これ賢主のなす所にして、愚主の禁ずる所なり。沙丘の謀は諸公子、大臣の疑ふ所たり、宜しく刑辟を刻にして、宗族大臣除き給ふべし、然らば陛下枕を高うし、志を肆にし給ふを得べし。』と、それより宗室、大臣の刑せらるゝ者數を知らず、李斯又趙高の陷るゝ所となりて腰斬せらる。李斯は楚人、始め小吏たりしが、厠中の鼠が不潔物を食ひ、しかも人犬の近くを驚れ兢々たるを見、又倉中の鼠が大廡中に住み、悠々穀に不足なきを見て歎じ、人も亦仕ふる所如何にありと覺り、荀子の門に入りて學を修め、遂に秦代の碩學となれり。韓非を陷れ後、秦の丞相に進み獻替多かりしが、趙高に讒せられ族誅せらる。

趙高、二世の信任を得て、郎中令となり政を專にし、其の耳目を蔽ひ、娛樂に恥らしめ、世情を知らしめず、『望夷宮中鹿爲レ馬』の專恣を敢てし、己の意に背く者を刑して顧みず、益〻土木を興し、又阿房宮の工を進めたり。

○宮官　五刑は書經の堯・舜二典に見ゆ、墨・劓・剕・宮・大辟の刑、其の頃より行はれたりとせば、宮官の起原は頗る古き時代にあり。

周禮に『宮者(宮刑卽ち生殖器を損傷せられたる者)には、內(內庭卽ち後宮)を守らしむ。』とあり、周代は旣に宮官を奧向の婦人との交涉方面に、使用せしことは明かなり。

春秋以後、罪人の宮官のみにては不足を感じ、志願宮官を出すに至り、又後世肉刑絕え宮刑も廢せられしかば、中世以後は專ら志願制度となり、清朝時に及べり。(宮官父子並びて朝に立つものさへあるに至れり。)宮官の歷史は、支那歷代興亡に關係する所頗る多し、就中、西漢・唐及び明を以て最も甚しとなす。されば政權に近かんとするの士は、裏面的活動を此の方面に取り、宮官を志願し君寵を得、政權を握らんとするを捷徑ともしたりしなり。

群雄の蜂起　始皇の新政に、民奔命に疲れ、六國の遺臣は怨を呑み各地に潛むと雖も、未だ始皇の英武を憚りて、發するものなし。二世皇帝卽位するや、虐政更に甚だし。漁陽(直隸順天府密雲縣西南)の閭左(謫戍は罪人を兵役に使用するもの、閭左は貧民を兵役につかしむるもの。)九百人の戍長、陳勝、吳廣等期に後れ、秦法によりて斬せられんを恐れ、亂を蘄(キン)(安徽鳳陽府宿州南)に起せり。陳勝(又吳廣)は曾て人の傭耕となり雙槳に服す。歎じて曰く『燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや。』又亂を起すや、曰く『王侯將相寧ぞ種あらんや。』と、部下皆從ふ。百姓未だ扶蘇の死せしを知らず、楚將項燕は曩に戰死せしと雖も、逃れたりとの說ありしかば、人心を繼がんとして扶蘇、項燕と稱し、秦の將吏を殺す、近隣應ずるもの頗る多く、陳を攻めて之を陷る、陳中又從ひて喜ぶ。

陳吳、魁を天下に示すや、響の應ずる如く群雄所在に蜂起し、大梁の人、張耳・陳餘又之に屬せしかば、陳勝遂に自立して王を稱し、張楚と云ひ四方を略す。旣にして其の部將武臣は自立して趙王を稱し、齊の王族田儋(セン)は、略〻齊の故地を定めて齊王となり、韓廣は起り燕を略し、又自立し

て燕王を稱し、海内漸く亂れて麻の如し。

項羽と劉邦　此の時に當り楚の舊臣に項籍あり、其の叔父項梁と兵を吳（江蘇省蘇州府）に起し、謀臣范增（ハンゾウ）の計に從ひ、楚の遺族懷王の孫（名は心）を求め、立てゝ懷王とし以て民望を繫ぐ。

沛（江蘇省徐州府）人劉邦も、籍と前後して起り、蕭何・曹參及び張良を得て、勢漸く強く又懷主に屬せり。

關東の叛亂大にして秦土殆どなし、二世、將軍章邯（カン）、董翳（トウエイ）、司馬欣を遣り之を平定せしむ。章邯頻に陳勝・吳廣の軍を破り（陳勝吳廣の二人とも其の部下に殺されたり。）魏・齊の連合軍を擊破し、曩に自立せし魏王咎（魏の公子なり）及び齊王田儋を殺せり。

項梁、秦軍を擊ちて功を立てしが、宋義の諫を用ひず、章邯と戰ひて敗死す、秦軍勝に乘じ、趙王歇を鉅鹿（直隸須德府平鄉縣）に圍み軍容大に振ふ。懷王、宋義を上將軍とし、項籍を次將とし趙を救はしめしに、宋義秦軍を恐れ敢て進まず、籍、志を伸ぶるは此の時にありとし、宋義を斬り自ら代りて其の兵を領し、河を渡り船を沈め、釜甑を破り以て必死を示し、大に秦軍を邯鄲に破り、章邯以下を降して河北を平定し、上將軍に進めり。劉邦は寛大なる長者なり、諸將薦めて諸侯の軍に先鋒として秦を伐たしむ。邦卽ち兵を率ゐて西し、武關（陝西省商州東）を陷れて咸陽に迫る。

秦の滅亡　趙高時に政を專にし、二世を壅蔽して、關東の亂又憂ふに足らずとせしが、今や事急にして二世に露はれんを恐れ、人をして之を望夷宮に弑せしめ、二世の兄の子子嬰（帝と稱せず）を立てゝ秦王とす。子嬰、趙高の奸惡を惡みて族誅せしも、此の時、邦、嶢關（陝西西安府藍田縣）を拔き、兵十萬霸上（西安府白鹿原）に迫りしかば、素車白馬出で降り國璽を奉りて秦滅びたり。秦、帝を稱する三世十五年時に西紀前二〇六年なり。

秦の世系（其の二）

○傳國璽　秦の始皇藍田（ランデン）の白玉をとり、李斯をして印璽を作らしむ、螭虎の紐を附したるものにして其の面に『受命于天既壽永昌』の八字を刻す。子嬰、沛公に傳へてより、漢之を受け、傳國璽とし、曆代傳受して大寶となせしも、五代の後唐に至り、末帝其の身と共に焚きて喪失せしむ。後晉高祖二個を製し、後周の太祖『皇帝承天受命之寶』『皇帝神寶』の二個製して傳へ、元・明・清も亦故例に依りて國璽を制せり。（其の大さ約三寸五分四方位の印鑑なり）

第二章　西漢の初世

第一節　漢楚の分爭

項劉の反目　懷王初め諸將と約するに、先づ關中に入る者を以て王たらしめんと。劉邦既に關中に入るや、其の地の父老を招き、己れ早晩此の地の王たるべきを告げ、法三章（人を殺す者は殺し人を傷け或は盜す者は罰す。）を約し、其の餘は、悉く秦の苛法を除きて、之を悅服せしむ。

劉邦、秦の府庫を管し、兵を遣はして函谷關を守らしめしに、此時項羽既に河北を平げ、秦の降兵十萬を坑し、勢に乘じて關中に入らんとす兵四十萬、百萬と號す。劉邦の兵、關を守り拒みしかば、羽大に怒り之を破り、進で鴻門（陝西西安府臨潼縣）に陣し、范增の言に聽き、劉邦を除かんとす。邦自ら鴻門に赴きて羽に陳疏し、謀臣張良の智と、樊噲の勇とによりて、纔に危難を免れ、ことなきを得たり。

○關中　關中は當時天下の要樞なり、東は函谷關（河南省陝州靈寶縣）西は散關（陝西省鳳翔府寶鷄縣南）南は武關（陝西省商州東北）北は蕭關（甘肅省經州鎭原縣北）の四關に圍まれし土地にして、大體今の陝西省に當る。漢中は其の西南に當り、巴蜀と並び稱せらるゝ邊遠の地なり。

○范增　居巢の人にして奇計を好む、年七十にして項羽の謀臣となり、劃策する所多く、秦を滅し羽をして諸侯に覇たらしむ。羽、增を尊親して亞父と稱す。劉邦關中に入るや增之を見て、『沛公は利色に溺るゝと雖も、今自ら制して敢てせず、是大志あるなり。早く除かずんば禍大ならん。』と、即ち羽をして鴻門に殺さしめんとせしがならず、退きて歎じ『噫、豎子與に謀るに足らず、將軍の天下を奪ふものは、必ず沛公ならん。』と、劍を拔きて沛公より贈られし玉斗を打碎けり。沛公楚を伐たんとして、范增の賢を疾みしが、陳平の反間策功を奏し、羽、遂に增を疑ふ。增、遂に骸骨を乞ひて去りしが、疽を脊に發して死し、項羽謀臣なく遂に天下を失ふに至れり。

項羽の覇業　項羽咸陽に入り、子嬰を殺し、始皇の塚を發き、悉く宮殿を焚きて東歸せしかば、秦の民皆望を失ふ。（咸陽宮殿三月紅、覇業已隨煙盡滅。とは即ち之なり。）項羽、自立して自ら西楚の覇王と稱し、懷王を陽はに尊び、義帝として江南に徙し、後人をして弑せしめ、彭城（江蘇徐州府銅山縣）を都として天下に號令し諸將の論功を行ひ、封地を定む。

項羽、劉邦を嫉み、關中要害の地に封ずるを好まず、而も懷王の約あるを憚かりしが、遂に漢中、巴蜀の地に封じ（漢中巴蜀も亦關中なりと云ふ、地、關中に續けども、道險にして中原に兵を出すに不利なり。）漢王とし、秦の降將章邯・董翳・司馬欣を關中に分封し、所謂三秦となし、劉邦を壓へ其の道を塞がしめ、天下を分ち十四王を封ず。（韓生項羽に關中の要害を說き都すべきを勸む。項羽肯ぜず東歸せんとし『富貴にして故鄕に歸らずんば、錦を着て夜行くが如し。』と韓退きて『人は言ふ、楚人は沐猴にして冠すと、果して然りと。』羽、之を聞きて怒り、韓生を烹たり。）

劉邦の漢中經營　劉邦、漢王に封ぜらるるや、項羽の背約を憤り伐たんとせしが、蕭何の諫を容れ國に就き、何を丞相に拜し、國政を執らしめ、張良を帷幕の臣とし（張良蜀の棧道を燒き、中原に出でざるを示して、項羽に他意なき裝へりと。）韓信を得て大將とし軍事を委ね、只管項羽討伐の機を窺ふ。かくて靜かに國力を養ひ、軍糧を充たし、兵力裕なるに至るや韓信の策を用ひ、突如、三秦を强襲し、章邯等を破りて關中を平定し、東向、黃河の南北を定め、項羽に迫らんとす。

漢楚の攻戰　此の時項羽、田榮・陳餘等の反を討たんとし北伐せしが、未だ平がず、（項羽、諸將を封ずるに方り、田榮・陳餘功ありしも、故ありて與からざりしかば、彼等不平に勝へず、田榮自立して齊王を稱し、陳餘父之に倣ひ代王となり、東北の地亂れたり。）劉邦之に乘じ洛陽に至り、義帝の喪を發し、天下に檄するに羽の逆罪を以てす、諸侯の兵を集むる五十六萬、遂に彭城を陷れたり。

羽、田榮を殺すや急を聞き、自ら精兵三萬を率ゐて還り、大に漢軍を睢水に破りしかば、諸侯王形勢を見楚に降り、邦、僅かに走り、滎陽（河南開封府滎澤縣）に逃れ（邦、滎陽にて楚軍に圍まれ望み絶ゆ、紀信、邦に代り漢王と稱して降りしに、楚軍喜びて圍を緩む、邦、間を得數十騎と共に西門より脫出し、危きを免れたり。吉野落に於ける村上義光が、紀信の故事を引き大塔宮に代りしは有名なる談なり。）更に成皐に陣せしが、皆連破せられたり。

さすがに漢王よく楚軍を扼し、蕭何は關中の老弱を發して來援し、別將彭越は連に楚軍の諸城を陷れしかば、項王遂に兵を率ゐて歸り、彭越と戰ひて之を走らせたり。

漢楚大勢の逆轉　既にして韓信河北を徇へ、次第に項王に迫らんとす、卽ち魏王を虜にして其の地を併せ、趙軍と井徑口に戰ひて背水の陣を布き、大に之を破り趙王趙歇を擒にし、代王陳餘を斬り、燕を降し、次第に楚の糧道を斷てり。韓信更に齊王廣を走らし、楚將龍且（シヨ）大軍を以て之を救ふや、濰水に破り（龍且、韓信を輕んず、濰水を挾み對陣するや、信、沙囊を以て川の上流を塞ぎ僞りて敗退す。楚軍喜び川を渡りて追ふや、上流の沙囊を決せしかば、大水俄に到り、渡河する能はずして溺れ、龍且又戰死せり。）齊王廣を殺し、一族田橫代りて王を稱せしも又敗れ、齊地悉く漢に入れり。

項王、內に謀臣范增を失ひ、有力なる味方英布は漢に降りて外援なし、關中の兵は益々加はれるに比し、斯く糧食の缺乏に困しみ、動もすれば韓信に、背後を斷たれんとす。遂に漢と和を媾じ天下を兩分し、鴻溝（汴河）を以て境とし、太公・呂后を還し（睢水の戰に於て楚軍の爲めに虜となれり。）て東歸せり。

項羽の敗死　漢王も亦西歸せんとせしが、張良・陳平諫めて曰く『今にして楚の困憊に乘ぜずんば、虎を養ひて自ら患を遺すものなり。』と、卽ち約に背きて項王を追ひ、一度敗れしが（韓信、彭越の二將期に至らざりしによる。）陸賈、壽春を陷れ、楚將殷殷漢に降り、英布又加はる、韓信・彭越既にして大兵を率ゐて到りしかば、漢軍の勢大に振ひ、項王を垓下（安徽鳳陽府靈壁縣南）に圍む。

項王、糧盡き重圍に陷り、四面楚歌する者多きを聞き、漢已に楚を得たるかと、帳中に入りて飲み、寵姬虞美人に訣して舞はしめ、自らも歌ひ『力拔山兮、氣蓋世、時不利兮、騅不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何。』と。悲歌、悃慨、將士皆泣きて仰見る者なし。項王涙下る

こと數行、虞姫又涙を押へ、纖手劍を把り自ら刎ねて死せば、項王遂に意を決し、騅に跨り八百餘騎、圍を潰して南方に出づ。

漢兵叢りて之を追ふ、項王武勇絶倫、漢兵の遮ぎるもの皆斬らる。陰陵に道を失ひ、大澤中に迷ひしが、更に漢兵を蹴破薙倒し、敵將を斬りしも身に一創を蒙らず、東して遂に烏江に至れり。烏江の亭長、船を整へて江東に至らんを勸めしが『江東の子弟八千、今日一人の歸る者なし、假令、江東の父老我を憐むとも、何の顏ありて之に見えんや。』と自ら剄ねて死せり。

烏江廟　杜牧川

勝敗兵家不ㇾ可ㇾ期、包ㇾ羞忍ㇾ恥是男兒、江東子弟豪俊多、卷土重來未ㇾ可ㇾ知。

是に於て漢王劉邦、洛陽に皇帝の位に卽く、之を漢の高祖高帝となす、時に西紀前二〇二年なり。卽ち國號を漢と號し、都を長安（周の鎬京）に奠む、史の西漢是なり。（齊人劉敬（或は婁敬）高祖に說いて曰く『洛陽は天下の中なれども、便なければ保ち難し、關中は山河の固あり守るに便なり。』と、張良又之に贊す、卽ち長安に遷れり。）

第二節　高祖の施政

高祖の治　高祖、諸侯の强大を慮り郡縣制を採りしが、尙秦の孤立して滅びたるに鑑み、封建の制を併用し、一族子弟を封じて、皇室の藩屏となし、又大に功臣を封ず。其の重なる者を列擧すれば左の如し。

(1)楚王韓信　(2)梁王彭越　(3)趙王張耳　(4)淮南王黥布
(5)韓王公孫信　(6)燕王盧綰　(7)長沙王吳芮（ゼイ）

而して異姓の諸侯間には、同姓の諸侯を配置し、之を控制するに頗る苦心したり。されど高祖猜疑の心事あり、且つ嗣子惠帝幼弱なりしかば、身後を慮り、漸次功臣を誅除し、一族卽ち劉氏を以て之に代へたり。西紀前二〇〇年、韓信反を告げられ、陳平の計により捕へられて、淮陰侯に貶せられる、後三年代の相國陳豨（キ）反し韓信と通ずとの言あり、韓信紿き捕へられて斬に會ひ、且つ三族を夷せらる。陳豨既にして樊噲に斬られしも、彭越の反するあり、越、捕斬せられ其の肉を醢（ヒシホ）として諸侯に分つ。淮南王黥布自ら安んぜず反せしが（黥布は卽ち英布なり、黥ありしによりてかく稱せらる、布、彭越の醢を食ひ俄に胸騷ぎ吐き出せしに、蠅となりて長江に入れりと云ふ。）高祖親征し、布、破れ長沙王吳芮に誘殺せられたり。（黥布を征して流矢に當り傷きて死因をなせり。）これより先、趙王張敖廢せられ、韓王信匈奴に走り、燕王盧綰又匈奴に投ず。かくて渺たる一諸侯長沙王を除くの外、諸功臣終を全うせしもの少く、遂に『劉氏に非ざれば王たるを得ず。』の誓約を定まるに至る。帝の末年には、齊・楚・趙・梁・淮陽・代・淮南・吳・燕の九國あり、皆劉氏の一族にし

て各〻獨立國の如し、就中齊・吳・楚の三國最も强く、漢室の憚る所となれり。

○高祖の名節　天下既に平ぐ、齊の田橫は、山東、海中の一島（田橫島）に據りしが、高祖の招くに及び、客二人と共に洛陽に至る。

されど田橫、腰を屈するを恥ぢて客舍に自殺せしかば、高祖、流涕義に感じ、王者の禮を以て葬る、島中の五百人、又主田橫の死を聞きて自殺せり。（田橫は齊の王族、もと高祖と同列なり、高祖王侯に封ぜんとするも、仕ふるを好まず、且、漢の使酈生を烹たり。『假令、高祖我を許し封ずとも、酈生の弟酈商、漢の將たり、之と肩を並べて漢に仕ふ、我が心に恥ぢざらんや。』と、

其の他、項羽の勇將季布は、高祖を戰場に苦しめしが、高祖之を得るに及び罪せず郎中に任じ、主たる項羽に背き、彭城の戰に高祖を戰場より逃れしめし、丁公來り謁するや、却りて之を斬り天下に示して其の不忠を責む。

高祖の制度　高祖、微賤にして、泗上の亭長なる一匹夫より起れり、（後世之に假托して、神怪なる說を傳ふる多し。高祖、龍顏にして左の股に七十二の黑子あり、白帝の子の化せる大蛇を切り自ら赤帝の子を以て喜ぶ。彼の居る所雲氣あり、天子の氣なり、始皇は此の氣を望み、散ぜんとして東遊し、呂后は高祖隱れし時も雲氣の所在を見て之を尋ね出すを得たりと。）而して諸侯臣も概ね禮に嫺はず、簡を喜び秦法の繁褥なるを嫌へり。（されど群臣功を爭ひ醉ひては亂に至り、屢〻妄呼し、劒を拔きて柱を擊つ。）高祖、漸く之を厭ひ、博士叔孫通の言に聽き、朝儀を制し、始めて長樂宮に用ひしに、諸侯王、群臣肅敬せざるなし。帝喜びて曰く『吾今日始めて皇帝たるの貴さを知る。』と、（叔孫通、魯の諸生四十人と己の弟子百餘人及び帝の近傍を集め野外に禮の講習をなし、帝の裁下を得たり。）

○漢の三傑の末路　韓信河北を定め、齊を平ぐるや勢强大にして、漢王を凌がんとす、項羽、人をして韓信に說き、天下の三分を計る。（剖徹又天下の權、信の手にあるを見、自立を勸むる切なり、まれど信、從はず、後誅せらるゝに臨み、剖徹の計を用ひざりしを悔ゆと云へり。）

張良、帷幕に大功を建て、三萬戶に封ぜられしも、留侯たれば足ると稱し留に封ぜらる。良、韓の爲めに讎を報じ、萬戶侯となりしかば、功名、榮利の下久しく居り難しとし、病に托して去り赤松子に從ひて遊ばんと、遂に隱れて身を全うせり。（高祖、太子盈を廢し戚夫人の生める趙王如意を立てんとす、呂后憂ひて、良に計を問ふ。良、商山の四皓なる四仙を會し、高祖を諫め廢立を止む、世、良の末路を神仙に托するもの多し。）

蕭何は、元功十八人の首位にして信望最も厚し。帝の晩年、長安の地狹く、上林（天子の御苑）に空地多ければ、民をして入りて耕せしめんと建言し、怒りに觸れ獄に繫れしが、幾何もなく許され、惠帝の二年疾みて歿せり。高祖、洛陽の南宮に置宴して、自ら賞せし三傑は、よく終を全うせしと云ふべからず。されど曹參、陳平以下直屬の臣下は、除かれしもの少く後事を托せられたり。

○商山の四皓　漢の高祖、太子（後の惠帝）を廢して、戚夫人の生める賢明なる趙王如意を立てんとす。呂后之を患ひ人をして張良に謀らしむ。良卽ち高祖の最も崇敬し、且つ招來するも能はざる商山の四皓を至らしめ、高祖に說きて太子の廢立を思ひ止らしめんとす。

四皓は東園公・綺里季・夏黃公及び角里先生なり。高祖の慢侮を惡み山中に深く潛匿し田でて漢の臣とならず、玆に至り張良に招かれて至り太子に從ふ。年皆八十餘、鬚眉皓目、衣冠崇高にして神仙の風あり、高祖大に驚く。四人皆太子の溫厚士を愛するを奏し、廢する能はざらしむ、帝よりて廢立を斷念し、戚夫人を召して『太子四皓の輔佐あり如何ともなし難し。』と告ぐ、戚夫人流涕すれども及ばず、太子遂に惠帝たるを得たりと。

されど史記の此の說、信じ難きはもとより論なし、司馬遷奇を好み、之を錄すれども、高祖四皓の片言に迷ひしものと

も思はれず、四皓は秦末の亂以來濁世を逃れ、隱匿せしものにして、當時の時代思想を現はせるものか。後世宋の王荆公の桃源行の詩にも、四皓を引き『避レ世不二獨商山翁一』の句あり。

第三節　文帝の治世及び吳楚七國の亂

呂氏の亂　西紀前一九五年、高祖長樂宮に歿し、漢王たる四年、帝位にあること八年。太子盈立つ、之を孝惠皇帝（漢の皇帝は孝の字を附す、故に孝惠皇帝略して普通惠帝と云ふ。）と云ふ。呂太后才略あり、惠帝の多病なる故を以て、實權を握り、專橫の擧動頗る多し。（呂太后、惠帝の母なるを以て皇太后の尊號を受く、才略あれど性險好なり、高祖を助くるの功あれども、諸功臣の誅除の如きは其の勸むる所多きによる。）肅何丞相たりしが二年にして死し、曹參代る、三年にして死し、王陵右丞相となり、陳平左丞相、周勃太尉たり。（皆、高祖の遺言による。）

惠帝在位七年死して嗣子なし、呂太后、宮人の子を太子として位に卽かしめ、自ら政を攬り、一族の呂氏を王となし、（王陵は高祖の盟に背くを以て、呂氏を王たらしむるに不可を述べしが、陳平・周勃は時勢の止を得ざるを察し、暫く忍ぶべしとなし之に贊したり。）更に帝を殺して、宮人の子義を立て、一族朝に滿ち、將に天下を奪はんとす。劉氏一族の諸王、悲憤の涙を呑みて忍びしが、既にして呂太后崩ずるや諸呂氏等、劉氏に誅せられんを恐れ、亂をなさんとす。齊王劉襄發して諸呂を伐つ、丞相呂產兵を出して齊を攻めしむ、時に京師の南北軍は、呂產・呂祿の手中にあり、太尉周勃兵を主る能はず、周勃、陳平と計り呂祿を欺き、相印を解きて己の手に收め、軍中に入り令して曰く『呂氏の爲にする者は右袒し、劉氏の爲にする者は左袒（左の肌を脫ぎ肉をあらはすべし。）』と、軍中皆左袒す。（高祖の遺言中『周勃は重厚にして文少し、太尉たらしむべし、劉氏を安ずる者は必ず勃ならん。』と、）周勃、遂に諸呂を破り、宮中に入り其の一族を捕へ、少長となく皆之を斬りて亂を平ぐ。諸臣卽ち議し、代王恒を迎立し、赦を天下に行ふ、恒は卽ち孝文皇帝（文帝）なり。

西漢の世系（其の一）

（一）高祖邦（二）（一二）惠帝盈（七）
　　└（三）文帝恒（一三）──（四）景帝啓（一六）──（五）武帝徹（五四）──（六）昭帝弗陵（一三）

文帝の仁政　文帝、初め、代王として地方にあり民情に通ず、卽位後、陳平、周勃を左右丞相とし、專ら仁政を施き、寬大民に臨みしかば、天下の人心歸して、漢室の基礎漸く固し。

帝、嚴刑を廢し、賑窮、養老の令を定め、貢獻を止め、（千里の馬を郤け朕に用途なしと、）宮苑、車服增益せず專ら儉素を旨とせしかば、（露臺を作らんとし、工匠に問ふに價百金なりと、帝曰く『中人十家の產に等し、何ぞ臺を作らん哉。』と、之を止む。其の寵幸する愼夫人の衣も地を曳かざりきと。）國庫充實して屢〻田租を除くに至る、人稱して秦漢以來治績第一とす。

諸王の驕恣　高祖の制は郡縣封建の併用なりしが、劉氏一族九箇國の所領は天下の半を過ぎ

諸王は宮觀、城廓に天子の如く、百官を制置すること、又京師に同じく、宛然獨立國の如し。而して天子の直轄する所は、十五郡にして天下の租稅の三分一のみ、頗る內外の輕重を失し、尾大不振に陷れり。齊は七十二城、吳は五十三城、楚は四十城を有し、皇室との關係は、寧ろ朋友の程度にあり。文帝、善政の一面に於て、此等諸王を厚遇せしは、益〻彼等を驕恣に增長せしめし弊あり、濟北王興居、淮南王長は、前後反して平定せられしが、吳・齊・楚の諸王又漢法に從はず、雄兵を蓄へて之に對し、朝廷の頗る疾む所たり。

殊に文帝、一旦代王より大統を繼ぐや、諸王皆之を輕侮す、吳王劉濞（高祖の兄の子）の如きは朝せず、文帝は、濞老いて朝す能はざるものとし、之に几杖を賜ひ敬して責めず、濞益〻驕る。郡國の亡命者を招集し、齊・楚二國も亦强僭して、顧みざるに至れり。

賈誼の治安策　洛陽の年少才子賈誼は時勢を慨し、一篇の治安策を上疏して、諸侯の抑損すべきを說く。文帝其の言を容れ、推恩（カギ）の令を下し、私恩を推し子弟を分封するを許し、大國を分ちて其の勢力を殺がんとす。齊王襄死して嗣なく、齊は卽ち分たれて齊・濟北・濟南・菑川（シ）・膠東・膠西の六國となり、勢減じたれども、吳・楚二國は尙勢盛にして互に相結び朝廷の節度に從はず。

賈誼　賈誼は、河南の守、吳公の薦むる所にして、文帝に召されて博士たり、時に年二十餘。博學多才、識見卓拔當時其の比を見ず、實に一代の才子たり。諸老嫉むと雖も、其の才に服せざるなし、帝、喜び一歲中官を遷して太中大夫に拔擢す。誼、上言し漢一代の制を立てんとせしが、文帝の漸進主義は、未だ多く容るゝに至らざりき。有名なる治安策は、賈誼の時勢に對する經綸策にして、以て其の政治的抱負を見るべし。卽ち『臣竊かに當今の時勢を思ふに、痛哭すべきもの一、流涕すべきもの二、長大息すべきもの六云々。』と、先づ諸侯王の地を分ち其の勢力を減殺し、諸侯の封地を移し、親疎相率制せしむること、を說き、法令の寬大、匈奴の制御等の諸事に及べり。

誼、後一度長沙王の傅となり外に出でしが、召されて還り、帝の少子梁王（帝の最愛子）の傅となり、之を補導し時〻帝の問に對ふることゝなれり。後梁王落馬して死するや、誼責任を感じ且つ悲しみ、常に哭泣せしが歲餘にして亦死せり時に年三十三。誼、只に識見の非凡なるのみならず、文筆に長じ大文章家たり又詩人たり、其の治安策の如きも、文章雄麗後世に愛誦せらる、以て其の才人たるを見るべし。

吳楚七國の亂　文帝在位二十三年にして死し、太子啓立ちて景帝となり、鼂錯（刑名の學を好み智囊（ウ）と云はる。）を擧げて御史大夫となす。（鼂錯は、景帝の太子たりし時の家令にして、文帝が賢良方正、直言の士を召して自ら策問せし時、百人中第一を以て登第したり。）錯、帝に說きて曰く『吳王、天下の亡人不逞を集め、亂を作さんとす、今其の地を削らば必ず反かん、削らざるも亦反かん。削らざる時は反遲くして禍大に、削る時は反速にして禍小ならむ。』と帝然りとなす。卽ち楚王の東海郡を削り（太后の喪中慣まざるを責む。）趙王の一郡、膠西王の六縣を削り、更に諸王の過失に乘ぜんとする風あり。

吳王劉濞、景帝を怨むことあり、（吳王の長子、未だ景帝の太子たりし時、之に侍し博戲して勝を爭ひ、不遜にして殺されたり。吳王之より漢室を怨み朝せざりき。）其の會稽・

豫章の二郡を削るの書至るや遂に反し、豫て中央政府が鼂錯以來、積極策を取りしに不平なる、楚・趙・膠西・膠東・菑川・濟南の六國を連ね、兵を擧げ鼂錯を誅し、君側の奸を除くを以て名とす。

吳兵二十萬、閩越・東越の南方諸國を誘ひ楚王と合し、漢軍を破り洛陽に迫る、兵鋒頗る鋭し。

帝、先帝の遺命により周亞夫（周勃の子）を太尉となし、三十六將軍を率ゐて吳楚を討たしめ、別軍をして齊方面に向はしむ。

時に袁盎（エンワウ）なる者あり、曾て吳王の相たりしが、鼂錯と隙ありて相惡む。吳楚の軍勢盛なるを見帝に說き『錯を斬らば諸叛自ら平ぐべし。』と、帝、遂に讒を信じ錯を斬り、袁盎をして吳王に諭さしめしが、吳王詔を聽かず。（帝、袁盎の言を聞き默然たりしが、吳楚の勢盛なるを憂ひ、一人を愛さずして天下に謝せんと云ひ、鼂錯を給き市に腰斬せり。されど亂平がず吳楚の反、目的とする所鼂錯に非るを知り悔みしも及ばず。）既にして亞父、洛陽に至り、吳楚の糧道を絕ち、飢に乘じ淮泗の間に破り、追擊之を潰滅す。吳王東越に走りしが越人に殺され、楚王自殺し自餘の諸國も亦皆平定せり。（袁盎、吳楚に兵を止むべきを說く、吳王聽かずして盎を强ひ己の將たらしめんとす盎又聽かず、吳王、盎を殺さんとす、盎逃れ還りて報ず。亂後六年、梁の孝王に怨まれ、刺客の爲めに殺さる。）

景帝の治世　亂後景帝は益〻諸侯を抑制し、自ら民を治め吏を補するを許さず、列侯は京師に止めて國に就かしめず、朝廷、內史を派して之を治めしむ。（諸侯の百官の如きも員數を減じ、稱呼を改めしむ。唯、梁の孝王は帝の同母弟にして、七國の亂にも防守して功あり、驕奢を極め出入天子に擬す、後景帝の太子たらんとして怒に觸れしが、母竇太后によりて赦さる。）

帝、性深刻にして恩少く、刑名の學を喜び、鼂錯の如きを信任す。後には政令嚴峻にして、假借する所なき郅都（シツト）・寧成（ネイセイ）の輩を用ひしかば、列侯、宗室恐れて自ら檢束せり。

景帝、治世十六年失德あり、亂後丞相たりし周亞夫の硬直を惡みて終をよくせしめず、（亞夫屢〻諫めて帝意に忤ふ、性剛直なりしは、竇太后及諸王諸臣の恐るる所たり。病と稱し職を免ぜられ、後讒に遇ひ獄に下され、憤悲して食せざる七日、血を吐いて死せり。）頗る父文帝寬仁の政と、趣きを異にす。されど諸侯王の强大なるもの、殆ど誅除せられ、帝威赫々として輝き、文景の間四十年は西漢の極盛時代と稱せらる。帝も亦自ら節約を旨とし、亂後は民と共に休息するの途に出でしかば泰平無事、人給し家足り、都鄙の倉廩皆滿ち、府庫には貨財を餘し、京師の錢は鉅萬を累ね、貫（錢を串し貫く金）朽ちて校すべからず、太倉の粟は、充溢して外に露積し、紅腐して勝（アヽ）て食ふべからざるに至れり。景帝死して太子徹立つ、之を孝武皇帝とす。」

第三章　西漢の中世

第一節　武帝の治世

儒學の奬勵　西紀前一四〇年武帝十七歳を以て卽位す、天資剛邁、內は儒學文學を奬勵し、外は空前の大外征をなして、版圖を擴張し、西漢豪華の時代を現出したり。

高祖、叔孫通を博士とし、陸賈の說を容れしより、學者登用せらるゝの端を開き（陸賈、仁義を說き新語の著あり。高祖が曾て馬上に天下を得たりの言をなすや、賈曰く『馬上に天下を得るも、馬上を以て治むべからず。』と、學の要を說けり。）惠帝、挾書の禁を解きてより、文敎次第に興隆せり。されど文・景二帝の間は、黃老・申韓の學行はれ百家の學未だ定まらず、武帝、卽位の年始めて年號を建てて建元と云ふ。詔して賢良方正、直言極諫の士を擧げしめ治道を策問す。廣川（直隸河間府故城縣）の董仲舒、春秋に明かなり、之に對策して、天地感應、瑞祥災天を說き、大學を起し士を養ひ、儒道を宗とし、異說を絕たんことを述べ、一に孔子を祖述したり。

丞相衞綰（エイワン）、又申韓、蘇張の說を說きて國を奏す者を罷めんことを請ふ。武帝もとより神仙、五行を信じ、儒敎を好みしかば、之を是とし五經博士（易、詩、書、禮、春秋）を置き、大學を立て儒敎を興せり。

是より儒道は、支那歷代學政の宗となり、正學となりて今日に及び、我國及び朝鮮にも、影響せし所甚大なりとす。（太皇太后竇氏、黃老を好み、儒敎を非とせしかば、一時頓挫せしも、其の死後隆盛に赴けり。）後六年、董仲舒の策を容れ、郡國より孝廉一人宛を擧げしめしが、菑川の公孫弘は、儒を以て博士に進み、後に丞相たるに至れり。かくて學術、德行の士の登用せらるゝ者多く、天下靡然として儒敎に向へり。

武帝又文詞を好み、詩賦に長ぜしより、文人詞客朝に集り、司馬相如・枚皐・東方朔の徒は詞賦に、司馬遷・董仲舒は文章に著はれたり。尙、諸王中河間の獻王德は、篤學にして金帛を散じて先秦の遺書を蒐め、淮南王安又學を好み、古書を搜し、學者を招き「淮南子」の著あり。

武帝の諸侯王對策　景帝、旣に七國の亂後諸侯を抑損せしが、武帝は更に之を嚴にし、益〻其の勢力を殺がんとし、推恩の令を奬勵したり。爲めに諸侯王の子は、悉く侯たるを得しも、其の藩國は益〻細分せられ、勢次第に衰へたり。（時に齊は七國、趙は六國、梁は五國、淮南は三國となれり。）漢の直轄郡は漸く大となり、內外輕重の制成ると共に、漢は殆ど、郡縣制度と異る所なきに至れり。加ふる諸侯は京師にありて、祿に寄食するに止り、且酎金（オウ）を徵せられて、苦しむ者をさへ生じたり。（酎金は漢室宗廟を助祭する爲め、黃金を諸王に獻ぜしむるの法なり。武帝の時此の法に觸れ國を奪はれしもの百餘人に及べり。）かくて封建は名のみとなり、種々の法令は、諸侯を拘束する所多く、諸侯は全く實力を失ふに至れり。

第二節　武帝の匈奴對策

匈奴の勃興　これより先、匈奴は秦に逐はれて北に徙り、邊境を窺はざりしが、秦末天下亂れ、漢楚分爭するの間勢を復して、河西（オルドス）の地を冒せしが、漢初の頃冒頓（バウトン或はバハヅール。ボクトツ）單于（匈奴の天子）となるに及び、豪邁にして武略あり。父頭曼單于を殺し、之に代りて自立し、東は東胡（蒙古の東に居りし通古斯族）を滅し、西は月氏（甘肅地方に居りし圖伯特族）を逐ひ、勢益〻强大となり、樓煩（山西の地）白羊（河西の地）を併せ、燕・代を侵し、蒙恬に奪はれし故地を復せり。

高祖の六年冒頓南下し、韓王信を馬邑に圍む、漢之を救はんとして成らず、且信を疑ひしかば、信、誅を恐れ馬邑を以て匈奴に降り、冒頓は進みて晉陽に迫れり。

○冒頓單于　冒頓は頭曼の子なり、父少子を愛し之を嗣となさんとし、冒頓を當時國勢盛なる月氏に質とし、而して之を急に攻む。月氏怒り冒頓を殺さんとす。冒頓善馬を奪ひ、月氏より馳走歸國せり。頭曼止を得ず、且之を壯なりとし萬騎に將とす、冒頓鳴鏑を作り、部下に令して曰く『我鳴鏑の射る所、從ひて射ざるものは斬らん。』と、先づ己の善馬を射、愛妾を射る、左右敢て射らざるものは之を斬りしかば、皆命を奉ずるに至れり。

鼓に於て單于の善馬を射しに、左右皆之を射る、冒頓窟を安んじ、父頭曼に從うて獵し、既にして鳴鏑を以て父を射る、左右皆之に從ひて射りしかば、頭曼蜂の如く矢を負うて仆れたり。卽ち冒頓、一族大臣の己の命に從はざるものを斬り、自立して單于たり。

時に東胡、冒頓新に立てるを聞き、使者を出し冒頓に千里の駒を求む。乃ち之を群臣に問ふ、皆曰く『匈奴の寶馬なり與ふべからず。』と、冒頓曰く『一馬の故を以て善隣を害せんや。』と卽ち與ふ。

東胡又使して、單于の一閼氏（エン）（匈奴の妃）を求む、左右皆怒り『東胡を伐つべし。』と、冒頓復曰く『我一女子を惜しみ隣人と爭はんや。』と、東胡王之を聞き、匈奴の爲すなきを知り益〻驕る。

匈奴、東胡間に棄地あり。其間千里を隔て兩國住せり、東胡、三度使を出し棄地を求む。冒頓議を群臣に下す、群臣等『之れ棄地なれば與ふも可なり、與へざるも可なり。』と、冒頓之を聞きて激怒し『卑しくも地は國の本なり、寧んぞ之を與へん。』與ふるも可なりと云ひし者は皆之を斬り、馬に跨り國中に令し『後れて至る者は斬らん。』と、直に東胡を襲ふ、東胡、冒頓を侮りて備なし、遂に大敗して滅さる。

高祖の匈奴親征　高祖自ら將として匈奴を伐ち、韓王信を走らし、匈奴軍を破り、追擊北進す。高祖晉陽に至りしに、冒頓代谷にありと聞き、伐たんとし兵三十二萬平城（山西大同府）に向ふ、時に天既に寒く、雨雪頻々として至り、將士凍えて指を墮す者十に二三に及ぶ。高祖初め人をして匈奴を窺はしめしに、冒頓之を察し、壯士肥畜を匿し、唯老弱と羸畜のみを止む。漢の使者之を見、喜びて匈奴を伐つべしと。齊人劉敬（婁敬）既にして歸り來り、匈奴其の弱を示すは、必ず伏を設け必勝を期すにあり、匈奴伐つべからずと。されど高祖聽かず、其の兵又北進して平城に至れり。冒頓漢兵悉く至らざるに乘じ、精兵四十萬を率ゐ、高祖を白登（山西大同縣東）に攻め、包圍七日に及びしかば、漢軍大に困しみ、高祖陳平の策に從ひ、厚く閼氏に賄し、其の言により圍の一方を解かしめ、辛うじて平城に退けり。平城は白登山西南三十里。陳平、閼氏に示すに美女の畫を以てし、匈奴漢を攻むるは、冒頓之を得んが爲めなりと說く、閼氏己の寵を奪はれんことを恐れ、圍を

說かしむと傳へたり。高祖劉敬の策を用ひざりしを悔いしが、既にして之に問ひ和を媾ぜしむ。敬卽ち臣下の子を公主として、匈奴に妻はさんことを言し、自ら使者となり、遂に和親を調へて歸れり。漢之より匈奴の恐るべきを知り、北邊の守備を忘らず、高祖は子恒を代王とし後の文帝なり。晉陽に都して、之に當らしむ。代王晉陽より汾州府の中都に遷れり。

○匈奴の俗制　匈奴の制、單于の下に左右賢王、二十四人の大臣あり、其の下に千・百・什の長ありて軍隊組織備はり、兵士は騎射に長じて精悍なり。其の俗、左を貴び必す左右あり、左賢王は東方を治め、上谷（直隸宣化府東南）に居り、右賢王は西方を治め、上郡（陝西延安府）にあり、單于の庭（直轉地の窟）は、其間代・雲中より北方にあり。匈奴は每歲正月、單于庭に會して祠り、五月は龍城に於て、祖先・天地の神を祭る。又戰功を重んじ、戰利品の分配あるを以て勇敢善鬪し、敵を誘ひ或は包圍するに長ぜり。

冒頓よく部下を服し、東は穢（クワイク）・貉・朝鮮に接し、西は氐・羌に連り、北丁零を服し、南は漢の北部を蔽ふ。蓋し匈奴の最盛時代たり。

武帝以前に於ける匈奴　高祖、消極策をとり歲幣を厚うし、婚を通じて其の歡心を買ひしが、高祖以後も亦一に其の政策を改めず呂后政を執るや、匈奴頗る侮慢し、文・景二帝の間も和親を願みず、屢〻北邊に入寇せり。文帝、之を擊攘せしも、地不毛にして利する所少きを以て、和親を主とし敬遠策を講ずるの外なく、冒頓死して子老上單于となるや、之に宗室の女を公主として妻せり。然れども老上も亦入寇し、甘肅方面を擾せしこと少からず。

老上死し子軍臣單于代れり、上郡、雲中を侵し殺掠多し、文帝周亞夫を細柳に屯せしめ、劉禮を霸上棘門（キヨクモン）に置き、匈奴に備へしめて之を退く。文帝、自ら出でて軍を勞せんとし、霸上棘門に至る、將軍以下送迎頗る厚し。更に周亞夫の細柳の陣に至る、警備嚴にして天子と雖も入らしめず、軍門都尉は『軍中將軍の令を聞いて天子の詔を聞かず。』と、皆甲冑を被りて拜せず、亞夫又軍禮を以て見ゆ。帝之を責めず『亞夫は眞の將軍なり、霸上棘門の軍は兒戲のみ。』と、却りて其の職に忠なるを賞し、後、中尉に拜して信任し、遺言して後年の吳楚七國の亂を平げしむ。

景帝時にありては、趙王遂、吳楚の亂に與し、匈奴と兵を連ねんとせしが、早く敗死して果さず、匈奴も兵を出さずして止めり。歲幣、通婚一に前代の如く、匈奴の入寇も減じたり。

武帝の匈奴挾擊　景帝、匈奴と關市を通ず、匈奴其の利を喜びて相往來せしが、小寇に至りては絕えず、武帝、李廣をして北邊を戍らしむ、匈奴廣の機略を恐れ、敢て戰はず小康を保てり。李廣曾て獵し、石を見て虎なりとし、之を射るに鏃當りて沒す。近づき見るに石なり、因りて後之を射たれども、石に入らずして反れりと傳ふ。膂力絕倫騎射神の如しと。

武帝、文・景二帝の後を受け、國庫充實し、帝權强大なり、加ふるに雄圖を好み、外征の大功を樹てんとす。而して高祖以來、匈奴の不遜なるを快しとせず、之を擊破して父祖の屈辱を雪がんの念切なり。

曩に月氏匈奴に逐はれて西走し、中央亞細亞に大月氏國を建てしが、深く匈奴を怨むると聞き、

月氏と通じ匈奴を挾擊せんとし、漢中の人張騫(ケン)をして、西行、月氏に至らしめ、漢と同盟を圖らしむ。張騫の西行は、其の直接目的を達せざりしと雖も、西域地方の事情を明にし、東西交通の端を開きたるものにして、東洋文明史上に、頗る重大なる影響を及ぼす所となれり。

匈奴征伐　張騫の一行、途に促へられて消息なく、大月氏との提携の望一時絶えしかば、武帝は將軍王恢(ワウクワイ)に聽き、匈奴を討たんとし、其の計に從ひ、兵三十萬を以て馬邑の傍谷に伏せ、軍臣單于を欺き誘ひて、擒殺せんとしたり。

されど詭計は、却りて匈奴のよくする所、軍臣知らず、兵十萬を率ゐ來りしが、途にて伏兵あるを探知し、兵を引いて歸れり。漢兵之を知り、直ちに追うて塞に至りしが及ばず、これより軍臣深く漢を怨み、王恢又罪せられんとして自殺せり。

馬邑の變後五年、匈奴大擧上谷を侵す、武帝、衞青・李廣等に命じて、之を擊たしめしが勝敗あり、李廣敗れしも、衞青は常勝の榮を荷ひ、關内侯に爵せらる。青もと微賤なりしも英略あり、騎射に長じ、よく士卒を撫し、賢に下りしかば聲望あり、加ふるに其の妹は、武帝の皇后となりて寵幸あり、彼の勢威漸く盛なり。

匈奴の敗退　漢軍の勢振はず、匈奴の入寇甚だしきに及ぶや、武帝、將軍衞青に兵三萬を附して討たしむ、青、卽ち雁門より出で匈奴を擊破し、翌年雲中より出でゝ又之を破り、河南の地を取り、朔方に城さて成功を收めたり。

其の後匈奴寇するや、漢は三度衞青を遣はし、十餘萬の兵を率ゐて朔方の高闕より出でしむ、青等進みて右賢王を襲ひ大勝を得、其の部族を覆せしかば、武帝大に喜び、青を拜して大將軍となせり。

大月氏の建國　大月氏既に冒頓に敗れ、更に老上單于に其の王を殺され、甘肅省の地より逃れ、今の伊犂南方より天山の北方に移れり。此の地方は、從來塞(サカ)と云へる種族の住む所なりしが、今や塞種族は月氏に逐はれ、葱嶺を越えて罽賓(キッピン)地方（今のカシミール地方）に入り、或は葱嶺山中に建國して止れり。

然るに月氏は、又烏孫と云へる種族の王昆莫に攻められ、再び移りてソグヂヤナ（今の露領トルキスタン地方）に至り、嬀水（オクサス河卽ちアムー河なり。）の南なるバクトリヤ（支那にて大夏と稱す。）を從へ、勢漸く盛なり。（月氏の遷徙及び建國の時代は老上單于時代なれば、西紀前一七一年より一六〇年前後の事なるべし。）其の大月氏と稱するは、甘肅方面を去る時、大衆之と行動を共にせしも、一部は南山山脈中に止り、小月氏の名ありしに對してなり。

（其の人種につきては、闕伯特種と云ひ、又西洋の東洋學者は、殆どアーリヤ種なるに一致せるも、白鳥博士は土耳其

を主張せり。）

西域諸國の狀勢　西紀前三三四年アレクサンドル大王、マケドニヤに出で、波斯・印度を征し、空前の大帝國を建設せしが、前三二三年バビロン歿し、帝國分裂し、大王の部將セレウコス（シリヤ）は條支國王となり、其の征服地なる亞細亞地方に君臨したり。

アンチオクス一世を經、アンチオクス二世の時國衰へしに乘じ、西紀前二五五年バクトリヤの鎭將、ヂオドトス一世叛きて獨立し、嬀水兩岸の地にバクトリヤ王國を建設せり。

時にスキタイ族の一派、ダヘー部の酋長にアルサケスなる者あり、部下と共にシリヤに叛し、波斯北方に蹶起してパルチヤ國（支那の安息（アルサク）國なり。）を建て、バクトリヤと共に本國シリヤに抗せしが、前後して皆獨立したり。

烏孫は本、月氏と同じく祁連、敦煌の間、卽ち甘肅地方にありしが、月氏に其の王を殺さるに及び、匈奴に逃れ其の保護を受けしが、後月氏が老上單于に破られ、伊犂地方に逃るゝに乘じ、舊怨を晴さんとし、匈奴の援を得て之を逐ひ、代りて伊犂南方の地を獲、遂に匈奴より獨立して、勢盛なるに至れり。（烏孫と月氏の位置につきては異論あり、烏孫が月氏の東にありとの說には、彼の獨逸の東洋學者リヒトホーフエン及び桑原博士あり、烏孫が西にありとの說には白鳥博士、藤田博士あり。）大月氏の北に大宛國あり、今の露領フエルガナ州に當り、康居（カンキヨ）は更に其の北にして、今の西伯利亞の吉利吉思（キルギス）荒原（ヤクサルテス河より東北、タラス河より西方、アレキサンドリヤ山脈の北邊一帶。）の地を占む。烏孫の東南より匈奴の西邊に當りては、所謂西域の小國碁布する三十餘國、其の重なるものは疎勒（ソロク）・于闐（コータン）・龜茲（キウジ）・焉耆（エンキ）・姑師（コシ）・樓蘭（ロウランツエルツエン）・鄯善の諸國あり、皆匈奴に屬し、匈奴は僮僕都尉を置きて之を監したり。

張騫の遠征　西紀前一三八年張騫、武帝の命を受け、從者百餘人と共に大月氏に赴き、攻守同盟を結ばんとす。途上匈奴の地を過ぎらざるべからず、遂に捕へられ居ること十一年（二心なきを裝ひ、匈奴の婦人を娶り子を生む。）間を得て妻と西走し、大宛、康居を經て大月氏に至りしが、大月氏は既に豐饒の地に建國して安んじ、爭鬪を好まず、騫、目的を達する能はずして歸り、歸途再び匈奴に捕へられ、居ること一年餘、西紀前一二六年を以て漢に歸れり、百餘人の從者中、還れる者彼と堂邑父（ホ）との二人のみ。

張騫更に烏孫と同盟して、匈奴を擊たんことを策して用ひられ、前遠征の失敗を補ひて大功を立つ。當時の人士、彼の外交事業の成功に刺激せられ、外交遠征、萬里に偉功を立てんとする者漸く多し。

匈奴の連敗　右賢王の敗後、匈奴又來寇し劫掠甚だし。漢、大將軍衞靑に十餘萬騎を附して之を伐たしむ、靑、再び匈奴を破り、斬首二萬に近し。此役靑の姉の子霍去病（カクキヨヘイ）年十八なりしが、

勇武よく奪闘し驍名を馳せ、張騫又校尉として赴きしが、よく地勢を察し、軍を利する所多く博望侯に封ぜられたり。（時に元朔六年にして騫の歸朝は元朔三年なりき。）明年春、驃騎將軍霍去病、萬騎を率ゐ隴西より出で匈奴の西邊を伐ち、休屠王を破り、其の祀れる金人を得たり。（佛像ならんと云ふ。）去病更に匈奴を征し、深く敵地に侵入し、祈連山を攻めて斬首三萬餘、匈奴の饒地を覆せしかば、名聲頓に揚り、衛青と並び稱せられ、匈奴の渾邪王は敵せず遂に漢に降れり。

茲に於て武帝、徹底的に匈奴に打擊を與へんと欲し、衛青・霍去病の兩將に命じ、十數萬の士卒及び馬匹を發して進ませしむ。衛青は定襄より深く敵地に入り、單于の營を包圍し、捕斬一萬九千に及べり。霍去病は代より進みて二千餘里、大漠を涉りて戰ひ、匈奴の王、將相を獲ること八十餘人、前後の斬首七萬級、功大將軍衛青に勝れり。（去病時に年二十二歳、武帝愛重して措かず、爲めに第を營む、去病未だ匈奴平がざるの故を以て辭す、されど幾何もなくして病死せり。）此の役漢軍の損失も大なりしが、匈奴は遠く遁れ去りて、漢南王庭なく、漢は河を涉りて、朔方以西に渠を通じ、武威・張掖・酒泉・敦煌の四郡を置き、敦煌より輪臺（天山南路のユダール）に至るの間、屯田兵五六萬を配置せしかば、玉門關以東は漢の統治下にあるに至れり。

烏孫との同盟　時に烏孫の勢力强し、（烏孫は土耳其族なり。）烏孫王昆莫（烏孫は王を昆莫と云ふ。）は、匈奴の援により月氏を擊破し、伊犂地方を占據せしが、其の勢盛なるや匈奴に禮なく、爲めに隙を生ず。武帝、張騫の勸めにより彼を中郎將に拜して、騎馬・輜重・幣帛を多くして烏孫に使せしむ。烏孫王遂に騫に聽き、漢と婚を通じて之と同盟し、漢に從ひて匈奴を挾擊せり。（江都王劉建の女、細君和親公主となりて烏孫に嫁せり。）武帝更に西域諸侯を服し、匈奴を孤立せしめんとせしかば、姑師、樓蘭の二國が、屢〻漢使を侮辱せしを名とし、趙破奴等をして之を擊破せしめ、大宛が漢命を拒み、汗血の善馬を貢せざるを以て之を責め、李廣利をして擊ちて其の王を殺す。（大宛國は遠きを以て漢に服せざりしが、茲に至り漢使を斬りし罰を謝せしめ、王を殺したり。）之より漢威愈〻西域に振ひ、諸國皆朝貢し西方珍奇の物産（菊蒭、苜蓿、胡麻、柘榴等。）及び、大夏安息等の工藝品（亞歴山大王の東西融合により、希臘化せられたる波斯地方は、更に漢に其の影響を及ぼし、日本も亦三韓を經て幾分なりとも之を受けたり。）は漢土に傳はり、有名なる海獸葡萄鏡の如きをも見るに至れり。

其の後の匈奴征伐　匈奴は大敗後久しく邊境を窺はざりしが、其の創痍次第に癒ゆるや、又北邊を侵せり。趙破奴二萬騎に將として伐ちしが、大敗し身は匈奴に獲られ、將卒又歸りて誅せられんを恐れて匈奴に降る者多し。武帝の四十二年、貳師將軍李廣利三萬を率ゐ、一度、右賢王を破り首級萬餘を得しが、歸途忽ち匈奴に圍まれ、殆ど全軍を失ひ、李廣の孫李陵は、單于の軍を殺傷する萬餘、頗る奮闘せしも、又匈奴の大軍に圍まれ、苦闘の末遂に降れり。（武帝、李陵の降を怒り、太史司馬遷の辯護するをも惡み、遷を宮刑に處せり。）其の後李廣利更に前後二回匈奴を擊ち左大將を殺し、勝に乘じ燕然山に至り、單

于の自ら五萬に將として來ると戰ひ、大敗して降れり。漢は武師將軍を、匈奴に沒してより又良將なく、士卒數萬を失ひ兵を出す能はず、武帝の匈奴征伐も蛇尾に終れり、匈奴も漢と攻爭以來、疲弊極に達し、烏維單于以後は內訌多く、結局雙方共戰疲れて休戰の情態となれり。

第三節　南方諸國及び朝鮮の服屬

南越の平定　南越は今の兩廣・東京・安南地方にして、曾て秦の始皇に征服せられ、三郡を置かれしが、秦末の亂に會し、趙陀と云ふもの起り、獨立して南越王を稱す。高祖天下を一統するや、陸賈を遣し、臣從を誓はしめ、冊して南越王として故土を安じ、百越を統べ南邊の害を除かしめて漢威を及ぼせり。

武帝の時陀の孫、胡南越王たり、北隣に東甌（浙江の地）閩越（福建の地）の二國あり、越王勾踐の子孫なり。東甌王は吳楚の叛亂に際し、吳王濞に與せしも、其の破るるや、濞の投ぜしを殺して漢に謝せり。濞の子駒逃れて閩越に投じ、其の王に說き、東甌を伐ち父の讐を報ぜんとす、東甌王敵せず、漢の許を得、國を擧げて江淮の間に移れり。閩越勢に乘じ南、南越を攻む、王胡よりて救を漢に乞ふ。

武帝、王恢等をして閩越を討たしめしに、閩越王の弟餘善、王を殺して降りしかば、武帝余善の功を賞し、東越王と稱せしめて、東甌の故地を與へ、閩越の地は、其の一族丑を封じ、越繇王たらしむ。

南越王胡は、漢に服事して厚かりしが、死して孫興に至る、太后は中國邯鄲の人なり、政を攝して內行修らず、其の臣呂嘉等服せざるや、漢威に賴りて位置を保たんとし、國人の反對を顧みず漢に入朝せしめんとす。呂嘉もとより漢を厭ふ、よりて太后母子及び漢使を殺せしかば、武帝、路博德・揚僕の諸將に命じ、海陸の大軍を發し南越を滅し、且つ密に之に通ぜし東甌王餘善を誅す、玆に於て東南の地平ぎ、武帝九郡を置き、安南の地は交趾・九眞・日南の三郡となれり。（交趾・九眞の二郡は今の東京、日南郡は安南なり。）

西南夷の平定　今の貴州・雲南及び四川の南部は、苗越種の群居する所にして、各〻君長を載き漢の域外たり。秦は巴（四川重慶府地方）蜀（四川成都府地方）を平げ、楚も南方に地を開き、秦一統の後は吏をして之を治せしめしが、秦末以後復た化外となれり。武帝の時、唐蒙、蜀の賈人に就き、蜀の南に夜郎國なる南夷あるを聞き、帝に請ひ自ら使となりて通じ、漢に內屬せしめしかば、夜郎侯入朝せり。（夜郎侯を册し夜郎王とす。）其他、西夷卭（四川寧遠村）筰（四川雅州府）冉駹（四川茂州）も、司馬相如中郎將となり諭すに及び降りしか

は、武帝、之を郡縣となし、西南夷五郡を置けり。

張騫西域より還り、身毒（シンドウ）印度の古名は大夏の東南にありと聞けり、思ふに蜀より遠からざらんと。武帝よりて騫等に命じ、夜郎國より身毒に至る道を求めたれども得ず。滇國今の雲南に達せり、後、滇を伐ちて降し、益州郡とせり。

○司馬相如　司馬相如は蜀郡成都の人、詩賦に長ず、一度景帝に仕へしが、歸りて蜀の臨邛に住し、富豪卓王孫の娘文君と知り、之を伴ひて成都に出奔したり。卓王孫怒りて相如と絶ちしかば、相如赤貧に困しみ、再び臨邛に歸り居り居酒屋をなし、相如は赤裸となり、犢尾褌一つにて酒樽を洗ひ、妻文君は、土地に於て僮客八百人を養へる豪家の娘なるにも係らず、店前に立ちて客の爲めに、酒を酌みたり。卓王孫も已の體面上頗る閉口し、家財、僮僕の多くを文君に分け與へ、酒店を閉ぢさせしかば、相如は之より安樂なる生活に入れり。

偶ゝ武帝文辭を好みしが、相如の舊作子虛賦を見て感歎し、遂に之を長安に召し大に寵用す。後唐蒙西南夷に通ぜんと奏するや、武帝は相如が蜀の出身にして、西南夷の事情に通ぜるを思ひ、中郎將に拜し西南夷に使せしむ。相如卽ち勅使となり、蜀を過ぐ。太守以下縣令皆之を國境に迎へ、其の儀容頗る張りしかば、流石の卓王孫も始めて娘を許すの遲きを悔いたりと云へり。（相如及ひ卓文君の話は、あまりに小說的なるより、後世、物語を之に附加せしに非ずやと云ふ。）

古朝鮮と漢との關係

古朝鮮の地域は、奉天省南部卽ち遼東地方より、我が朝鮮の北四道平安、成鏡江原、黃海に當り、遼河より大同江岸に達す。人種は通古斯族にして、其の北隣には同族なる肅愼族あり、其の南方には諸韓族繁殖せり。殷の紂王滅びし時、王族箕子は、國人五千人と共に逃れて朝鮮に來り、其の地の王となりて君臨し、周の武王より朝鮮王に封ぜられたりと傳ふ。事實は封ぜられたるに非ざるべしと云ふ。箕子繼ぐこと四十一世にして、漢初箕準に至りしに、燕人衛滿、國人千餘人を率ゐて箕準を襲ひ、代りて朝鮮王となれり。燕王盧綰反して匈奴に入るや、衛滿逃れて朝鮮に入り、襲ふて箕氏を奪へり。箕準逃れて南方韓に入り金馬渚により韓王なれり。

衛滿、朝鮮王となり、四隣を征し勢盛となりしが、其の孫衛右渠に至り、驕りて漢に禮なく使者を送らず、且つ近傍諸夷の漢に朝貢するを妨ぐ。武帝卽ち南越征討に功ありし、將軍楊僕及び荀彘（テイ）をして、海陸の大軍を率ゐて伐たしむ。漢軍一度破れしも、右渠反者の手に斃るるに及び國滅べり。漢卽ち樂浪、眞蕃、臨屯、玄菟の四郡を置き、箕氏・衛氏共に都せる王險平安道平壤を、樂浪郡の治所とせり。これより漢威は、東方漢江下流地方に及ぶ、時に西紀前一〇八年なり。

半島の南部諸國　半島の漢江以南は韓族割據し、馬韓・辨韓・辰韓の三韓をなす、馬韓は京畿道南部より忠淸・全羅に跨りて五十四部、箕準王を稱し、全馬渚全羅道益山郡にあり國最も大なりしが、箕氏の後二百年を經て、百濟王溫祚の滅す所となれり。辨韓は慶尙道の西南部十二部落、辰韓は其の東北慶尙道の大部を占め、十二部落を有し、文化最も進めり。秦の民苦役を逃れて至るもの

多く初め馬韓の王を奉じたり。

武帝、朝鮮を滅してより、三韓は漢と境を接し、相互の交通頗繁となり、從つて此等三韓と交通し來りし我が國も、漢との交通開け、東漢の初に至りては、九州の土豪中、漢に私貢して、印綬を受けたるものあるに至りぬ。

○九州地方の酋長の漢との交通　後漢書に曰く『倭凡百餘國。據海島爲居。皆稱王。武帝及滅朝鮮。使譯通漢者三十餘國。其大倭王居邪馬臺國。光武中元二年、倭奴國奉貢朝賀。使人自稱大夫。倭國之極南界也。光武賜以印綬。』印綬は有名なる『漢倭奴國王印』にして、天明四年筑前國志賀島より發掘せられしものなり。奴はナと訓じ此の邊が古の儺縣なりしを云ふなるべしと。

武帝の失政　武帝雄圖を好み、屢〻塞外を伐ち征戰多年に渉りしのみならず、方士の說に迷ひて、長生せんことを願ひ、巡遊を事とし神仙を求め、或は泰山に封じ、肅然に禪し、神仙の樓居を好むと聞きては、土木を起し宮觀を增せり。（上林苑、昆明池を作り、數十丈の柏梁臺を營む、承露盤を設けて神仙の玉露を受くべく、又建章宮を作り、池を掘り三仙山を築く。）爲めに國用給せず、東郭咸陽（鹽商人なり）孔僅（鐵商人なり）桑弘羊（商人）等の理財に長ずる者を擢用し、酷吏張湯（課稅、造幣多く彼の手になれり。）の如きをも用ふるに至れり。

かくて賦斂日に重く、百姓益〻疲弊し、所在盜起りて天下漸く騷然たり。しかのみならず帝の迷信は、支那在來の迷信熱を高め、禁厭・蠱法說かれざるなく、神仙虛妄の說又天下に行はれ、巫蠱（フコ）の獄起り、帝、江充の讒を信じ、太子戾、己を呪すと信じて之を攻めしかば、衞皇后・太子・皇孫自殺し、或は害に遇へり。（後、田千秋の言を聞き始めて太子の罪なきを知り、爲に歸來望思の臺を作る、天下又之を聞いて悲めり。）帝、神仙不死の術に迷ふこと四十餘年、始めて其の非を悟り、輪臺の詔を下し、其の狂悖にして、天下を愁苦せしめしを悔謝し、方士を退け苛政を除きしかば、天下幸ひにことなきを得たり。

○武帝の新法　(一)人民、一定の金額を納むれば官爵を賣與し、禁錮・收贖の罪を赦す。(二)民間の鑄鐵・製鹽・釀酒を止めて官の專賣とし、民利を奪ふ。(三)民間の舟車に課稅す。(四)商人の財產を登錄し、其の多寡によりて課稅す。(五)桑弘羊の議により均輸法を設け、遠國に產するものを賦とし、官は之を乏しき地方に賣り商賈轉賣の利を奪ひ、又平準官を長安に置き、諸國上納の物貨を、價高き時は賣り廉なる時は買ひ置き、商賈の利を奪へり。(六)白鹿の皮幣を作り、四十萬錢に値せしめ、諸王をして之を獻ぜしむ。

第四章　西漢の中末世及東漢の初世

第一節　宣帝の中興

霍光の攝政　西紀前八七年武帝死し、少子弗陵太子たりしが、位に卽く。時に年八歲、之を孝昭皇帝とす。霍去病の異母弟霍光忠厚なり、武帝之に遺詔して、大事を托す。（霍光は大司馬大將軍謹嚴にして一事をも苟にせず、曾て去病に從ひ、塞外に匈奴を伐ちて功あり、光の實母の妹衞氏、武帝の皇后たりしより益〻愛顧せらる。武帝、光に周公成王を負ひて諸侯を朝するの圖を賜ひ、後事を委托す。）

光、武帝弊政の後を承け、至誠昭帝を輔翼し、租役を減じ、貧民を賑はし、努めて民と休息するの方針を採り、文、景二帝の治績に復せんとせしかば、民皆悅服せり。昭帝の兄燕王旦は、帝位に卽く能はざるを怨む、帝の姉蓋長公主、左將軍上官桀及び其の子安、御史大夫桑弘羊等、光の獨り政を攝するを喜ばず、燕王と謀を通じ、光を殺し帝を廢して燕王を立てんとす。卽ち上書して光を讒す、帝年十四歲なれども、聰明にして惑はされず詐謀者を捕ふ。桀等又置酒して、光を招き殺さんとせしも謀洩れ、一味悉く誅に服し、或は自殺しぬ。

霍光の廢立　亂後霍光は、張安世、杜延年等の賢臣と政を輔けしが、昭帝在位十三年にして死し嗣なし。光よりて上官皇后の命を請ひ（皇后は上官安の女にして、安が霍光の女を娶りて生む所、亂後光の外孫なるを以て廢されず。）群臣と議し、武帝の孫昌邑王賀を迎立して立つ。されど昌邑王淫戲度なきを以て光、群臣を率ゐ皇后に奏し之を廢し、更に武帝の曾孫、病己（ヘイキ）を民間より迎へて位に卽かしむ、時に西紀前七四年、卽ち孝宣皇帝なり。

宣帝卽位の始め、光、政を還さんこと請ひしが、帝謙讓して許さず、諸事光に關白して然る後天子に奏せしむ。（關白の名　鼓に起る。）

光、政を執る前後二十年西紀前六八年病みて歿す、其の一門皆顯貴に列し、勢內外を傾け、光の夫人は帝の皇后許氏を毒殺し、其の女を納れて后としたり。されど光の死後其の勢衰へ、且、反を謀り、一族悉く誅夷せられたり。（光を訐する者、光が一族を戒しむるの度足らざるを難ず。）

宣帝の政治　宣帝は巫蠱の難に遇ひし、戾太子の孫にして、民間に伏在して、幼より具に辛酸を嘗め、民情に通じたり。霍光の死後親政するや、節儉仁慈、勵精治を謀り、農民を愛撫し、常平倉を設けて其の利を計り、屢〻田租を免じたり。

帝又地方行政に重きを置き、能吏を用ひ、其の治績を擧げしめ、『我これを共にするは、夫唯二千石か。』と、（二千石は漢代の地方長官卽ち太守の稱なり。轉じて現今の知事に用ふ。）二千石にして治績あれば、璽書を賜ひて之を勵し或

は爵秩を授け、公卿大臣缺くる時は、次を以て之等より選ぶ。故に良二千石、輩出すること漢代第一とす。朱邑（北海の太守）龔遂（渤海の太守）趙廣漢（潁川の太守）黃霸（同上）尹翁歸（東海の太守）を始め左馮翊・韓延壽等は名吏中最も著はる。

中央政府にも亦名相輩出し、帝を輔佐してよく泰平を致せり、卽ち魏相（政治に通じ、故事に委しく前例を取捨して政に資す。）丙吉（御史大夫より丞相となる、禮に厚く寛大にして政の大體のみを知る。宣帝幼時丙吉の爲め獄より救はれたり。）黃霸（潁川の太守より進みて丞相に上る民治に長ぜり。）于定國（延尉となり公平なりしが、遂に丞相たりよく人に下る。）は最も名あり。

匈奴の擊攘　武帝以來漢威匈奴に及びしが、宣帝卽位の初年、匈奴、烏孫の漢と同盟せるを怨み、之を攻めしかば、烏孫、援を漢に乞ひ來れり。西紀前七二年帝、趙充國、田廣明等の五將軍に、十六萬の兵を率ゐて、烏孫と共に挾擊せしめ、明年、大に匈奴を破り、王將以下四萬を斬り馬牛羊驢七十餘萬頭を得たり。其の冬、單于數萬騎を率ゐ、烏孫を擊ちしも大雪に遭ひ、人馬凍死し還るもの十に一なる能はず。是に於て匈奴に怨ある諸族、其の敗亡に乘じ、北狄丁零（バイカル湖西南に住める匈奴の別種）は北より攻め、烏桓（內蒙古の東邊に住する東胡の一種。）は東を侵し、烏孫は其の西部を伐つ。匈奴腹背敵を蒙り、加ふるに飢饉に遇ひ、餓死するもの數知れず、其の諸屬部概ね瓦解して、其の勢威全く衰へたり。

匈奴の屬王にして、西域諸國を領せる日逐王先賢撣は、握衍胸鞮單于と骨肉の間隙を生じ、西紀前六〇年日逐王は、衆を率ゐ鄭吉により漢に投降したり。日逐王の投降より西域漢に沒入せしかば、宣帝は鄭吉を西域都護に任じ、天山南路の烏壘（ウルキ）城に治して、康居、烏孫等西域三十六國を統御せしむ。茲に至り漢の威令西域に行はるゝに至れり。（西域都護の始めなり。）

呼韓邪の投降　匈奴既に西域を失ひし上に內亂起る、卽ち單于握衍胸鞮暴戾なりしかば、左地（匈奴の東部）の貴人等之を惡み、謀りて呼韓邪（コカンヤ）を立てゝ單于とす。握衍胸鞮怒りて之を征せしが、大敗して自殺せり。されど其の弟右賢王等（匈奴の西部）呼韓邪に服せず、別に屠耆（トキ）單于を立てゝ之と爭ひ、其の他にも單于を稱する者三人、凡て五單于、互に攻爭せり。屠耆單于よく他の三單于を擊破せしが、呼韓邪と戰ふて敗北す。其の弟代りて閏振單于と稱して爭へるに、呼韓邪の兄又自立し郅支單于と稱し、新に渦中に入り、閏振を攻め殺し、呼韓邪と兄弟相爭へり。西紀五一年呼韓邪遂に敗れ、衆と共に漢に降り臣を稱し、其の保護により故土を定めしかば、郅支、漢を怨み康居王と結び、漢使を殺し、烏孫・大宛を襲ひ西域を擾せり。

西紀三六年（元帝の建昭三年）西域副校尉陳湯、都護甘延壽と謀り、制を矯めて、西域諸國の兵及び屯田兵四萬を發し、康古に迫り、郅支を殺し首を京師に送れり。呼韓邪茲に至り、喜びて入朝恩を謝

し、漢の婿たらんことを乞ふ。元帝乃ち宮女王昭君を賜ふ、其の後歷世匈奴漢の婿と稱するはこれによれり。（呼韓邪入朝し漢の美女を求め婿たらんとす、帝、後宮美人の圖を案じて殊色なき王昭君を賜ふ。帝去るに臨み王昭君を見しに、圖らざりき是れ實に後宮第一の佳人ならんとは、而して其の應對も亦節に適ひ淑にして優なりき。帝、之を惜しみしが、約して信を外國に失はんことを恐れ、止を得ず之を與へたり。是れ後宮の畫工等、金賄を貪り、之に隨ひて美醜に差を設けたるによる。帝、後宮頗る多く常に見る能はず、よりて畫工に命じ宮女の肖像を畫かしめ、其の美しき者を召して寵幸したり。故に宮女等己を綺麗ならしめんとし、畫工に賄を送りたりしに、王昭君は之を厭ひ賄を以て畫がしめしことなかりき。故に帝之を知らず、後、事露はるゝや、帝畫工の實を僞はりしを惡み、之を棄市せりと云ふ。）

馮奉世と趙充國　宣帝、西域に使を出す屢〻なりしが、皆名を辱かしむる者多し、西紀前六五年馮奉世を使とし、節を持して行かしむ。奉世、鄯善に至りしに莎車（葉爾羌）羌叛して通ぜず、よりて諸國の兵を發して之を攻め、其の王を殺す、大宛以下恐れて皆命に從へり。

西紀前六一年、先零（青海に居る圖伯特族）以下諸羌の再び反し、勢猖獗を極め屢〻邊境を侵す。帝、趙充國を遣り之を平定し、悉く青海地方を平ぐ。帝の世、常惠・馮奉世・鄭吉・陳湯等の武將よく外戰、邊功を樹て、威西域に振ひ、匈奴遂に內附す。是に於て內治外交共に振ひ、漢室中興の英主を以て仰がる。

○蘇武典屬國となる　蘇武は杜陵の人、武帝に事へ中郎將となり、匈奴に使せしに、匈奴武を捕へ、大窖中に置き飲食せしめず、武、雪と旃毛とを嚙みて數日死せず、匈奴恐れて神とし、北海の上に移し、羝（雄羊）を牧せしめ、羝乳せば歸らしめんと。武、漢節を持して牧す、節毛悉く落つ。李陵屢〻降を勸むれど聽かず。昭帝の時漢使來りて武を求めしに、單子僞はりて武死せりと傳ふ。使者曰く『天子上林中に雁を得たり足に帛書あり、武、大澤中にあり。』と、匈奴隱す能はず、武を還らしむ。武、匈奴にあること十九年、强壯を以て出でしが、鬚髮悉く白し。拜して典屬國（蠻夷の事を司る官）となし、武帝の廟に謁せしむ、神爵二年年八十を以て歿す。

○麒麟閣　西紀前五一年（甘露三年）宣帝、戒狄の賓服を以て股肱の美を思ひ、乃ち功臣の像を麒麟閣に畫かしむ。獨り霍光のみは名を云はず、大司馬大將軍博陸侯姓は霍氏と。（尊びて名を省けり）次は張安世・韓增・趙充國・魏相・丙吉・杜延年・劉德・梁丘賀・蕭望之より蘇武に至る十一人、皆當世に於て其の名を著はしめたり。

第二節　宦官及び外戚の專橫

宦官の專恣　宣帝、在位二十五年西紀前四九年を以て死し、太子奭立ちて孝元皇帝と云ふ。太子儒を好みしも、病弱父帝と合はず、宣帝廢せんとせしも、其の母許后霍氏に毒殺せられしを憐み、遂に廢せざりき。車騎將軍史高（宣帝の祖母の兄の子）外戚を以て尙書の事を領し、蕭望之・周堪の二人、帝の師傅を以て之に副たり。史高、二人と隙を生じ、宦官弘恭（中書令）石顯（僕射）と結び、朝權を擅にせしかば、望之等外戚を抑へ、宦官を政に與らしむべからざるを奏せり。（武帝內寵を好みてより宦官斯く寵せられ、宣帝は弘恭・石顯を用ひて機に參せしめしが、元帝多病、宦官の外援なく中立せるを以て政を委ねしかば、之より勢ひ朝を傾く。專ら內廷に出入して女官を護するに止りしも、後漸く變じ男色を以て、帝の寵を蒙る者あるに至れり。）

恭・顯等之を聞き、望之等を讒し、廷尉に裁せしめて獄に下せしが、幾何もなく帝之を許し、

望之を相たらしめんとす、恭等驚き再び之を譏し、兵を出して望之の第を圍み、之を自殺せしめぬ。

恭死し顯中書令となり、周堪等の忠良を斥け、其の黨を引きて、威服を恣にすれども、帝優柔にして如何ともする能はず、在位十六年、西紀前三三年死し、漢業これより衰へたり。太子驚立つ、是を孝成皇帝とす。

西漢の世系（其の二）

- 武帝
  - 昭帝
  - 戾太子據—史皇孫進—(七)宣帝病已（二四）
    - (八)元帝奭（一六）
      - (九)成帝驚（二六）
        - 定陶恭王康—(一〇)哀帝欣（六）
        - 中山孝王興—(一一)平帝箕子（五）
      - 楚孝王囂—廣戚侯勳—廣戚侯顯—孺子嬰（三）

外戚の跋扈　成帝母王氏を尊びて皇太后とし、太后の弟王鳳を大司馬大將軍として、尚書の事を錄せしめ、宦官石顯等の諸黨を免黜したり。顯、罪を以て免ぜられ、鄉里に歸らんとして途に死せり。かくて宦官の專恣を除きたりと雖も、鳳の弟崇を安成侯とし、尋で其の五弟譚・商・立・根及び逢時の凡て五人。を列侯（世に五侯と云ふ。）に封ずるに及び、王氏一族の權内外を傾け、外戚、宦官に代りしに過ぎず。

王鳳死して王音大司馬となり、音の後、王商・王根相次で大司馬を領せしが、根、遂に其の姪新都侯王莽を大司馬となせり。王莽は王曼の子なり、父曼早く死し其の兄弟五侯たり、爲めに莽のみは顯位に登る能はざりしかば、帝之を新都侯に列せり。

莽、務めて恭儉を持し、學を修め禮を盡せども、内は大志を抱く、五侯の子弟佚遊聲色に溺るゝ間、益々謙讓して民望を收めしかば、其の聲名諸父を凌ぐに至れり。成帝、凡庸政を外戚に委ねて顧みず、帝の師傅張禹王氏に阿りて梅福の上書を曲聞せしかば南昌縣の東梅福上書し日蝕、地震春秋時代に三倍し、陰盛にして陽衰へ金鐵爲めに飛ぶ。かく天災地變盛なるは陽たる君が陰たる臣下即ち外戚に歷せらるゝによる。」と、されど禹之を曲解して帝に聞上せり。魯の朱雲と云へる者帝に見え、斬馬劍を賜りて佞臣張禹を斬り、其の餘を勵まさんと乞ひ、殿檻を折りしも帝悟らず。帝、怒り雲を以て朕の師傅を罵辱するものとなし、御史に命じ死罪に行はしむ。雲去らず、吏拉し去らんとすれば殿檻に縋りて動かず直言して「臣地下の關龍逢・比干に從ひて遊ばん。」と、吏強ひて雲を引きしに殿檻折れたり。特臣叩頭、血を流して雲の罪を許されんことを請ふものあり、帝遂に之を許せり。後殿前の欄檻を修理せんとせしに、帝曰く「直臣、雲の折りたるものなり、木を易ふる勿れ、之を集めて修し、永く其の忠志を殘さん。」と、されど帝、外戚の權を如何ともする能はず。

王莽の纂立　成帝在位二十六年にして死し、姪欣、莽に擁立せられ、孝哀皇帝となる。莽職を退き、帝の外戚傅喜・丁明・傅晏相次ぎて大司馬たりしが、帝在位六年死して嗣なく、元帝の庶孫中山王箕子帝位に卽き、孝平皇帝と稱す年僅に九歲、時に西紀前一年なり。太皇太后朝に臨み、王莽を招きて再び大司馬となす、莽、其の女を平帝に納れて皇后とし、漢安公、宰衡を加へ、諸侯王の上たり。漢安侯は漢を安ずるの意にして、宰衡は周公は周の太宰、伊尹は阿衡たりしにより、此の兩號を併稱す。時に孔光孔子十三世の孫張禹の儒臣三公たれど

も、王氏に諂ふのみ、莽の名聲日日に盛にして、之を周公に比し吏民四十八萬上書して、其の德を頌するに至りしかば、遂に九錫（九品の賜にして人臣の榮を極む。）を加へらる。（王莽の時代は西紀の前後に當る、西紀元年また其の中にあり、記憶に便すべし。）

西紀五年莽、平帝を毒殺し、宣帝の玄孫二歳なる嬰を迎へ、皇太子とし孺子と稱しめ、自ら假皇帝（祭賛天地宗廟の祭文等には假帝と稱し、即ち人民には攝皇帝と云はしむ。）と號し、攝に居り、劉崇・翟義等の己を討たんとし、兵を擧げしを平げ、西紀八年即ち攝に居ること三年、遂に假面を脫し漢室を簒ひ、皇帝の位に即き、國號を新と改む。西漢は高祖より是に至る迄、十一世二百九年にして滅びたり。

第三節　王莽の諸政、群雄の興起

王莽の施政　王莽國を簒ふや、唐虞三代の古制に擬し、世俗が尙古的なりしに投じ、自らも禪讓を利して、天下の耳目を蔽はんとせり。即ち天下の田を收めて王田とし、周制に法り井田法を行ひ、（當時貧富の懸隔甚だしく、奴隷の賣買行はれたり。）奴隷賣買を禁じ、五均（周制の泉府）の官を置きて、民物の賣れざるを買ひ、餞府の官を設け民に金錢を貸與して利を收め、六筦（鹽・鐵・酒・名山大澤・五均賒貸・銅冶）の令を出し、專賣制度により民利を奪へり。

又屢〻貨幣を改鑄し、六貨（金・銀・龜・貝・錢・布を云ふ）を以て寶貨とせしが、大錢小錢の二種とし、更に改め貨布泉布とす。其の値常に變じ煩雜を極め、經濟界を擾し、民、私鑄して刑死せらるる者多し。

周制を模し官制を定めしが、猥りに之を易置して一貫せず、法令繁雜、賦斂甚だしく徭役止む時なし。

其の他、漢の諸王を廢して庶民となし、匈奴單于を降奴單于として、匈奴の怒を招き、之を伐ちて功擧がらず、更に改名せしも（匈奴を恭奴、單于を善于と再び改めたり。）其の來寇止まず、西域も亦離反したり。

かくて王莽漢室を簒ひしと雖も、外は周制に模すること急にして、州郡其の煩に勝へず、徒に朝變暮改して定まる所なく、民皆其の苛稅に苦しみ怨嗟の聲甚だしく、外は威信を外國に失墜して、政令一も及ばず、來寇、離反漸く多きに至りしかば、世は早くも騷然、群盜並び起り亂を希ふ者多し。

群盜群雄の蜂起　西紀一八年山東に赤眉の兵（眉を赤く染めて王莽の軍と分てり。）起り、瑯琊の人樊崇其の魁たり。既にして新市の人（湖北省安陸府）王匡、王鳳等兵を綠林山中に起し、綠林の兵と號せしが、後分れて下江（楊子江下流）新市の兵となれり。

荆州の陳牧は、兵を荆州に起し、其の地を席捲し平林の兵と號す、漢の宗室劉縯（イン）は、弟劉秀と

共に兵を春陵（湖北襄陽縣）に起し、新市・下江・平林の兵と合す、衆既に十餘萬統一する所なかりしかば、諸將劉玄（漢の宗室にして縯等と同族）を立てゝ帝となし、更始と改元す。（劉玄は更始將軍と稱せり、性怯懦にして群臣の朝するを見て羞愧汗を流し、能く言ふことの能はず。諸將等劉縯兄弟の威明あるを恐れ、玄を皇帝として利用し、然る後已等の具に供せんとしたり。）劉秀、昆陽（河南南陽府陽縣南）定陵（南陽府舞陽縣）を下し、劉縯、宛（湖北南陽府南陽縣）を陷れしかば、劉玄入りて此に都を定む。

昆陽の戰　王莽、形勢容易ならざるを見、王尋・王邑の兩將を遣し、四十二萬を率ゐ、一擧東方の軍を掃蕩せしめんとす、尋・邑等虎・豹・犀・象の猛獸を驅り、威武を助け勢盛なり。漢軍望見して恐れ昆陽に入る、兵僅に八九千に過ぎず、新軍進みて之を圍む。秀竊に昆陽を出で諸營の兵千餘騎を發し、自ら先鋒となり新軍を退け、更に敢死の士三千人を以て、敵の中堅を衝きしに、昆陽城中の漢軍又之に應じ、內外より攻む。會〻大雷風雨起り、屋瓦を飛ばし溢川怒漲す、猛獸股慄して用をなさず、新軍大敗、王尋斬られ、死者數萬、溢川に溺るゝもの者算なし。

昆陽の一戰既に天下を決す、關中震駭し、海內の諸豪並起り、漢の年號を用ふる者相續ぎ、劉縯兄弟威名揚る。新市・平林の諸將其の功を忌み劉玄に勸め縯を殺さしむ。秀、禍を思ひ深く自ら慎み、昆陽の功に誇らず、玄之を信じ、拜して破虜將軍となせり。（秀、兄の爲に喪を發せず、飲食談笑する平常の如し、されど夜間涕泣し枕席に淚の痕を止めたり。）

新の滅亡　此の時、陳囂（クレイゴウ）、成紀（甘肅秦州秦安縣）に起り、隴西一帶を徇へ漢に應じ、公孫述は成都（四川成都府）に起り、蜀を定め輔漢將軍と稱す。

既にして漢軍、洛陽及び武關より進み、長安を攻め城に入りしに、莽、斗柄（衆兵を厭勝せんとして囊に威斗を鑄たり。）に隨て坐して曰く『天德を予に生ぜり、漢兵それ予を如何にせむ。』と、されど衆兵の爲め斬殺せられ、首は漢都宛に送られたり。百姓、罵り打ち或は切りて其の舌を食へりと。新遂に滅ぶ。莽帝と稱せしより十五年時に西紀二三年なり。

第四節　東漢の初世

光武帝の卽位　新既に滅び、更始帝劉玄、都を洛陽に遷し、更に長安に奠む。時に邯鄲の卜者王郎、漢の成帝の子子輿と詐り、帝位に卽き幽・冀の地を下す、劉秀、大司馬となり河北を徇へ、王郎を伐ちしが、其の勢猖獗を極め、屢〻危地に陷れり。

されど南陽の鄧禹（トウ）策を杖いて至り、秀を助くるあり、上谷の太守耿弇（カウカン）の援ふあり、西紀二四年遂に王郎を斬り、邯鄲を平げたり。更始帝よりて秀を肅王となし、兵を罷めて歸らしめんとせしに、秀、耿弇の言により、河北未だ平かざるを辭とし應ぜず、銅馬以下の諸賊を平ぐ。赤眉の兵長安に向ふと聞くや、鄧禹をして之を躡し、關中を略せしめつゝ長安を救ひ、自らは北・燕・趙を

徇へたり。

秀、既に降者を封ずるに厚く輕騎陣中を巡行す、降者、皆『蕭王は赤心を推して、人の腹中に置く。』と、諸將、帝位に卽かんことを請ひて止まず、秀、又兄の殺されしより、自立の計をなせしを以て、遂に帝位に南南（カウナン）直隸趙州高邑縣に卽き、建武と改元す。時に西紀二五年之を東漢の世祖光武皇帝とす。

群雄の平定　赤眉の魁樊崇、天下の勢漢に向ふを見、劉盆子を求め出して帝となし、奉じて長安に入り、更始帝を降して之を斬る。鄧禹之を追ひて戰ひ、大敗す、帝卽ち馮異をして、共に赤眉と戰はしめしが再び敗れたり。されど異、散卒を集め、更に赤眉と崤山河南河南府永寧縣の北の下に戰ひ大勝を得、其の衆八萬を降す、餘衆遁れて宜陽河南府宜陽縣に向ひしに、帝自ら兵を率ゐ來り待ちしかば、樊崇・劉盆子以下肉袒して出降れり。

○劉盆子　劉盆子は齊王肥の後にして漢家の一門なり、樊崇、群賊の名を逃れんとし盆子を捕へ軍中に置き、牧羊の事を司らしめしが、遂に壇場を設け帝位に卽かしむ、盆子時に年十五。諸將士會して上將軍の符を上りしに、盆子、被髮徒跣、弊衣を着け赭色汗顏、衆の己を拜するを見、恐怖の餘り泣かんとせり。卽ち符を嚙み折りて打棄て席を遁れ、再び牧兒等に從ひ共に遊ばんとせしかば、崇等其の愚に驚けりと云ふ。

されど海內未だ光武帝に服せず、公孫述は蜀に自立して帝と稱し、隗囂（クワイガウ）は隴西にありて西州上將軍と稱し、竇融は河西により五部大將軍と稱し、李憲は廬江安徽廬州府舒城縣に淮南王を稱し、秦豐は黎丘湖北襄陽府宜城北に楚王を稱し、梁王劉永は睢陽（トウイウ）河南歸德府商丘縣に帝を稱し、盧芳は安定にあり、匈奴に迎へられて帝を稱す。

光武帝此等の諸雄を服せんとし、吳漢・耿弇の名將を用ひ劉永を平げ東北を定め、自ら隴西の隗囂を討つ、河西の竇融兵を率ゐて帝に會す、囂、西域に走りしが死し、子純立ち光武帝は蜀川に盜起りしかば、軍を班せり。漢將來歙（ライキウ）の攻むるに遇ひて遂に降れり。囂の臣班彪は囂に說くに漢に通ずるを以てす、囂聽かず、命じて竇融と自立を謀らんとす。彪は西に赴き融に說き却りて漢に通ぜしむ帝融を以て涼州の牧とす。時に蜀の公孫述未だ降らず、帝、吳漢等をして之を伐たしめ、成都に迫り公孫述を平ぐ。既にして秦豐降り、李憲獲られ、盧芳、匈奴・烏桓を連ね寇せしも、西紀三七年亡げて匈奴に入り、一旦降りて病死し、海內一統に歸せり。

○馬援　馬援は隗囂の臣なり、囂、自立の難きを見、所屬せん所を定めんとし、蜀の公孫述と相知れる馬援を蜀に遣はせり述、援を延き儀仗を列し、威嚴を示して褻應す。援、心中述の無能を知り、望を失ひ、還り報じて曰く『述は井底の蛙謀るに足らず。』と、更に光武帝の下に詣る、光武、殿廡の下に援と會し、邊幅を飾らず坦懷談笑す、援其の態度に感じ、今陛下を見るに恢廓大度高祖の如しと。卽ち歸り報じて曰く『光武は才明雄略、至誠にして大節あり、高祖の如し。』とされど囂從ふ能はず、援遂に去りて漢に歸す。囂、從却りて公孫述に臣事し、蜀寧王に封ぜられ、遂に國を誤れり。

○隴を得て蜀を望む　光武既に隴右（隴西）の隗純を平げて曰く『人苦レ不二自足一。既ニ得レ隴望レ蜀。』と。大司馬吳漢及び征南

大將軍岑彭を遣はし、蜀の公孫述を伐ち、水陸成都に迫り之を平げたり。

光武帝の施政　帝、天下一統の後は、專ら意を內治に用ひ萬機を親裁し、外戚、宦官專橫の源を斷てり。帝、壯時長安に遊學し經學に通ず、卽位の後は敎育を奬勵し、建武五年大學を起して親臨し、禮樂を修む。（帝、屢〻大學に幸し、經書を講論し、文敎の振興に努む、當時民間にも私學盛にして、彥碩諸々に起れり。學問の隆盛は經學の隆盛にして、漢時代を通じて此の勢を失はざりき。）帝は西漢末、天下王氏に媚事し、士風大に壞れしを矯めんとし、名節を奬勵し、節義、高潔の士を重んじ、處士周黨・嚴光・王良・王成の輩を優遇せしかば、天下又此の氣風に向ひ、東漢一代を通じ節義の士多く、よく此の風紀を維持せり。（當時孝廉の士を選擧すること多かりしも、士風養成に影響多し。されど其の極、ことさらに奇矯の行爲をなし、詭激の言論を弄ぶ者ありて、中庸の風を失せしことなきにあらず。）

帝、猥に外蕃と事を構ふるを好まず、努めて之を避けしが、交趾反し、寇亂連年已まず、（徵側・徵貳の姉妹勇力あり、反して邊陲の六十五城を陷し王位を冒す。）西紀四二年帝、伏波將軍馬援をして之を征せしめ、徵姉妹を破り悉く南方を平定す。其の後武陵蠻（湖南の西境黃州の東境）反す、援自ら征せんこと乞ひて赴きしが、軍中に病死し、兩軍勝敗ありしも、蠻、飢ゑて遂に降れり。（援曰く『大丈夫當に馬革を以て屍を裹むべし。安んぞ兒女の手に死なんや。』と、武陵蠻反するや援、行かんことを請ひ、甲を被、馬に跨り顧盼して其の用ふべきを示す。光武、援の老衰せるを憐れみしが『壓諜たる哉、翁。』と、遂に許せり。）

匈奴は王莽以來、烏桓・鮮卑を連ね北邊に寇せしが、連年の饑饉と、疫病に人畜の大半を失ひ、且つ南邊の八郡は、日逐王比を立てゝ南單于とし、單于蒲奴に抗し、漢に內附を請ひしかば、帝許して黃河の南に居らしむ。かくて匈奴南北に分れて攻爭せしが、北匈奴も亦漢に和親を請ひ、一度退けられしも、遂に許されたり。（北匈奴を伐たんこと請ふ者あり、柔よく剛に克ち、弱よく强を制す所以を說き從はず。）これより先、西域諸國匈奴の重斂に苦しみ、漢に屬し復た都護を置かれんことを請ひしも、帝許さず、玉門關を閉ぢて、西域を拒絕するの方針を採れり。莎車王賢自ら大都護と稱し、西域の兼併を企つ、鄯善・車師等之を惡み、漢に歸せんことを請ひしが帝許さず、遂の其の保護を受くるの難きを見、復た匈奴に附けり。

帝、在位三十三年、民治に意を注ぎ、王莽の苛政を除き、力めて賦役を輕じ、民をして休息せしむ。德化漸く及び、良二千石又前後輩出し、天下泰平、戶口滋殖す。西紀五七年六十二歲を以て死し、太子莊立つ之を孝明皇帝とす。

東漢の世系

高祖…景帝—武帝
　　長沙定王發—春陵節侯買—春陵戴侯熊渠—利—子張—更始帝（劉玄）
　　　　鬱林太守外—鉅鹿都尉回—南頓令欽—縯
　　　　東漢（一）光武帝（中興）—（二）明帝（一八）—（三）章帝（一三）
　　（四）和帝（一七）—（五）殤帝（一）
　　清河孝王慶—（六）安帝（一九）—（八）順帝（一九）—（九）沖帝（一）
　　千乘貞王伉—樂安夷王寵—渤海孝王鴻—（一〇）質帝（一）
　　濟北惠王壽—（七）少帝懿（一）
　　河間孝王開—蠡吾侯翼—（一）桓帝（一二）
　　　　解瀆亭侯淑—解瀆亭侯萇—（三）靈帝（一二）—（一）廢帝弘農王（一）
　　　　　　（三）獻帝（一三）

第五章　佛教の弘通

第一節　太古の印度

印度アーリヤの南下　支那上古の文化が、周末に於て未曾有の絢爛を飾れる頃、ヒマラヤ山南なる恒河（ガンヂス）流域に於ても、アーリヤ種族の一分派なる、印度アーリヤ族により優に之に匹敵する一大文化を現出したり。

今より凡そ四千年前、中央亞細亞のアム河・シル河の河間にありし、アーリヤ族の一派卽ち印度アーリヤは、其の故郷を離れて南方に移り、印度河上流の五河（パンジャブ）地方に居を定めたり。

五河地方は、氣候炎熱にして土地豐饒、北方の峻嶺荒地より來りしアーリヤ族は、此處を樂土とし、先住のドラーヴィダ族を南方に逐ひ、或は服從せしめつゝ、次第に其の獨特の文化を扶植せり。

彼等は幾多の部落を成し、各〻酋長あり、平時は農業牧畜に從事し、事あれば兵役に服す。酋長は部落を率ゐて、敵と戰ふと雖も、祭時は部落を代表して、其の福祉を祈り、其の間何等階

級、貴賤の別なかりき。

四種姓の區別　されど彼等の人口次第に增殖し、印度の北半部を占め、次第に廣大となり、恒河附近に及べるの頃は、祭祀は自ら一部の國民の世襲する所なり、波羅門（ブラーマン）なる種姓を生じ、領土・擴張と爭鬪頻繁なりしより、戰爭にのみ從事する刹帝利（クシャトリヤ）種姓を生じ、自餘のアーリヤ族は、農耕、商賈の實業に服して吠舍（ヴェイシャ）となり、在來の土民にして被征服民族たる、ドラーヴィダ族は、首陀（スードラ）となり、奴隸として、賤役に從事せり。

かくて恒河流域の所在に、彼等の小國建設せらるるの頃は、四種姓次第に截然とし、階級別動かすべからざるに至りぬ。

種姓	族稱	職掌	人種
一、波羅門（ブラーマン）	僧族	僧侶、學者之に屬し祭祀學問を司る。自ら梵天の口より生ると稱せり。	アーリヤ族
二、刹帝利（クシャトリヤ）	士族	王種、武士此の階級に屬し、軍事を司る。梵天の兩臂より生れたりとす。	同
三、吠舍（ヴェーシャ）	平民	農商民を始め一般の平民之に屬し、實業に從事す。梵天の兩脇より生れたりとす。	同
四、首陀（スードラ）	奴隸	奴隸の階級にして、運搬、屠殺等の賤役に服す。梵天の兩脚より生れたりとす。	非アーリヤ族（ドラーヴィダ族）

○アーリヤ族　阿利安人（アーリヤン人）とは、同種族のものの義にして、西紀前一五〇〇年頃印度に入れるアーリヤ人が、先住民に對し、自己を區別する爲めに呼べる稱にして、ドラーヴィダ族は、アナールヤ卽ち非アーリヤ人と呼べり。

○波羅門姓の起源　五河地方に繁殖せし時代のアーリヤ人は、牧畜を主とし、麥類の耕作に從ひしものの如く、其の戰爭も他種族より、牛を奪はんとするを主目的としたり。（牝牛は貨幣の代用たり。）されば酋長（國王）は、僧官を必ず帝師として置き、戰後には神に勝を祈願し、時には戰時の顧問ともして重用せり。かくて僧官は祭祀の上に於て、次第に勢力と尊嚴とを加へ、後年の波羅門族の起原となれり。（波羅門とは淨裔の義）

アーリヤ族の文化　恒河流域は、氣候炎熱にして地味肥え、勞せずして衣食足るの地なるを以て生活は安易にして、幽玄なる宗教、哲學思想に思を凝らすの餘裕あり、且つ地域廣大にして、氣候の變異極りなく、雷霆雲雨の出沒、森林、原野の鬱蒼、廣濶、高山高原の峻秀、荒燥等は、何れも其の想像の自由豐富と、深遠幽妙なるを致せし大原因たらずんばあらず。

かくて印度アーリヤ族の文化は、次第に向上し、其の宗教、哲學思想方面に於ては、古代に於て既に獨特追隨を許さざる發達を示せり。彼等はかゝる大自然中に、抱擁せらるゝより、一般に自然を崇拜する、萬有神教を奉ぜしが、此等自然を支配すべき、至高至大なる神力を想像せしよ

り、一種の哲學的傾向を帶び來り、遂に印度思想全般に影響するに至れり。

彼等は五河地方に住せし頃、專ら天地日月其の他の自然現象を、神として崇拜し婆樓那天神（ヴァルナ）火神（アグニ）明神雨神（インドラ）帝釋等三十三神を尊信せしが、漸次前述の如き思想の進歩により、宇宙萬物創造の至高神を想定し、之を梵天（ブラーマン）と稱せり。而して彼等は吠陀（ヴェダ）と稱する經典を所有し、ブラーマナ及びウパニシャッド等の深遠なる哲學書を以て、前者を註解大成したり。

波羅門族は祭祀、祈禱の外、學理の探究に努め、此等の諸書を研究し、世界の眞相、人生の目的等を解釋せんと試み、此の如くにして、其の間數十派の波羅門哲學を生じたり。

彼等は波羅門教を創め、同時に哲學、文學、法律、政治、技術等の諸般の研究を試み、有名なる五明の學をなし、學術研究の盛なること、支那周末に勝れりとするも過言にあらず。

五明は聲明（セウミヤウ）語學にして文章の組織音韻を論ず　工巧明（コウコウミヤウ）機械・數學・星學　醫方明醫術に關する學　内明（ミヤウ）哲學、心理學、法律にして摩奴法典を含む　因明論理學　の諸學なり。

○古代印度の諸書　(1)吠陀は四吠陀に分る、一梨俱吠陀（リグ）は、印度最古の賞典なるのみならず、實に世界最古の詩篇にして、大部分は大自然を詠歎したるものにて、アーリヤ族の歴史をも窺ふべし。十卷、一千十七種、一萬五百八十頌より成る、又四吠陀中最古のものなり。

二沙磨吠陀（サマ）　祭時於ける讃歌にして儀式を記す。淵源又古く古代樂律の發達を研究するに重要なるものとす。

三夜柔吠陀　祭祀の詠歌たること前者に同じ、恒河流域に入りてより成れり。

四阿闍婆吠陀（アタバ）　呪詞にして個人としての利害ある、招福攘災を記す。前三者が一般的に祭時に用ひられしに比し、此は一家を主となす、迷信的なるも哲學的要素多しと稱せらる。恒河流域に移りてより成りしものとす。

(2)マカバラタとラーマヤナ物語　マカバラタは、恒河上流地方に於ける、月種族なる兩家の爭鬪にして　バラタ家より出でて從弟關係を有せる、五王子と一百王子とを中心とし、諸邦互に加はりて大戰亂となりし物語詩なり。叙事詩中世界第一の長篇にして、二十二萬行より成り、（最古のもののみにて五萬行）希臘大詩篇たるホーマーのイリヤッドの一萬五千行に比し、頗る雄大なるを見る。事實を神話化し、荒唐無稽なるありと雖も、古代印度武士の狀況、アーリヤ族の文化等を見るに足る。

ラーマヤナは、日種の羅摩（ラマ）王子、繼母に迫はれしより始まる、其の妃西多（シタ）の美なりしより、鬼王に奪はれしを苦心慘憺して奪回す、西多妃も、火中に身を投じて焚傷せざるより、貞操を破られざる證し、二人芽出度く王位に登るに至れりとの物語詩にして、マカバラタに比し、一層虚妄なれども、其の間印度南方とアーリヤ族間との交通を窺ふことを得。

(3)梵書（ブラーマナ）（波羅門書）　波羅門族が平和の間、神聖なる宗教的儀式を整理、維持して、莊重森嚴なるものたらしめんとし、吠陀を一々註解し、其の隱れたる意義功用を述べ、其の方法用法等を說きたるものにして、數代を經て成りたるものなり。

(4)優波尼沙土（ウパニシャッド）（奥義書）　宇宙の原始、諸神の性質、神の本性等の諸問題を始め、哲學的諸問題を神祕的に解釋したるものにして、當時のブラーマナの宗教儀式一點張の時代漸く移り、祭式を第二とし、哲理の攻究を第一とするに至りしより起れり。

然れどもウパニシャッドは、古神を否定せず、宗教心を其の儘存續せしめつゝ、諸神の力は唯一神の發現なりとの問題に向ひ、幽玄高妙なる哲理を進め、遂に宇宙靈魂、靈魂輪廻說を說けり。かくして印度哲學は、ウパニシャッドに至り始めて基礎を固成し、漸次之が傳ふる義理を解釋せんとせしより、數十派の波羅門哲學をも生ずるに至りぬ。

波羅門教　波羅門教の教義は、梵天卽ちブラーマンを以て、宇宙萬物一切の本源となすにあり、『故に萬物は梵天より獨立して存在せるが如く見ゆるも、實は皆其の幻現にして、畢竟、梵天に歸着す。一切の事物は梵天より分出せしに拘らず、自ら其の梵天の一部分たるを自覺し能はざる如し。』と、

又其の厭世說、輪廻說を見るに『骨・皮・肉・血等の不淨物を以て成り、早晚腐朽すべき五體は、絕えず憤怒・悲哀・憎惡等の煩惱に促はれ、病・衰・死亡等に脅され、果して何物をか眞の快樂として得べき。』と。又曰く『此の苦痛悲哀極りなき、現象の娑婆世界に、執着する時は、種々の情慾に驅られて罪業を免れず、而して其の罪業に對しては、夫々の應報を受くべく、死後と雖も其の不滅の精神は、輪廻して五體の不具者より、更に禽獸草木に迄、轉生を餘儀なくせらるべし。』と、

而して其の解脫法を說きて、『此の輪廻轉生を脫却し、眞正の快樂を求めんには、須く梵天に復歸せざるべからず。而して吾人はもと梵天の分身なるを以て、これ難事に非ず、梵天と同一體なるの自覺の下に、苦痛なる差別的世界の執着を脫却せば可なり。』とこれ眞正の解脫法(智識の解脫法)にして、一躍梵天に沒入する直覺頓悟法なり、波羅門種姓にのみ限らる。他の諸種姓は、作法の解脫法なる漸進的方法をとり、(一)吠陀及び經典の尊信遵奉。(二)苦行・禁欲。(三)四種姓の區別確守と其の義務の履行。(四)波羅門族により神への供物奉獻等を確守する。等により漸次優等なる種姓境遇に生れ、遂に解脫するを得べしと。

摩奴の法典　波羅門種姓が他種姓の上位にあるは、實に摩奴(マヌ)の法典あるにより、又前述の如き平易なる解脫法を有するによれり。然れども之に原因して、彼等は遂に腐敗墮落し、其の文化も亦行詰れるに至りしものと云ふべし。彼等は他の種姓を蔑視し、氣滿ち慢驕る、他種性よりの供物は、勢、彼等を貧乏奢侈に導き、遂に無能化せしめたり。

(一)何人と雖も分に應じて、波羅門に財を與ふべし、かくする時は、死後天上に生るべし。僅少なる布施によりて祭事を營む者は、生命・繼嗣・家畜を失ふべし。

(二)波羅門は梵天の口より生れ、而して吠陀を所有するが故に、一切造化の主たるの權あり。又波羅門は、其の學者たると無學者たるを問はず、共に偉大なる神なり。

(三)爭論に於て、波羅門に勝ちたりとも、低頭其の許容を請はざるべからず。若し首陀にして、高慢にも波羅門に、其の義務を敎ふるが如きあらば、王者は命じて、其の口と耳とに、熱油を注入すべし。

摩奴法典は全十二卷、其の立法者摩奴は、梵書神話中に於て人類の祖とさる。摩奴、魚に敎へ

られて大洪水あるを知り、船を備へて逃れ、北山を越え一樹の下に船を繫ぎしが、洪水去りて後地上に降り、人類の祖となれりと。（バビロニヤの古詩、或は舊約全書ノアの洪水に吻合す。されど摩奴法典は、佛教時代に入りての作にして、數代を經て成り、摩奴に附會して、彼を作者としたるものなりとも云ふ。）

第二節　佛教の興起

波羅門族の專横　波羅門は、宗教・學術・技藝を司り、智力・精神上の權力を獨占せるに係らず、宗教學術の利益を世に弘むるに務めず、己の種姓を神聖ならしむる爲め、摩奴の法典を規定し、他種姓の服從せざる時は、頗る苛酷なる刑罰を課し、横暴は王族たる刹帝利姓をも苦しめ、首陀に至りては、其の說教だに聞く能はず、其の虐使せらるゝこと云ふべからず。（轉生も三姓に限り首陀に及ばず、首陀は波羅門の衣に觸るるとも罪せらる。政治上は王權を尊べども、波羅門には及ぼす能はず。）

茲に於て、刹帝利先づ反抗を試みて混亂あり、波羅門哲學者中にも、自己種姓の腐敗を攻擊する者出で、甚しきは吠陀の教義を否定せる、迦比羅（カピラ）の如きを出すに至り、漸く革命的氣運起り、波羅門種姓の根柢動搖し來れり。かゝる氣運に大聖釋迦出でて、新に佛教を唱へ、一大革新を實行し、以て他種姓を救濟するに至れり。

釋迦の出生　佛教の祖師、釋迦牟尼（釋迦は其の種族の名即ち塞種、牟尼は智者又は得道者の義、故に釋迦種族中より出でたる、得道者の義なり。）は、中印度の迦比羅城主（迦比羅は雪山（ヒマラヤ山脈）の麓、今のネパール國のタライ地方に當る。）首頭檀那王（スッドダーナ）（淨飯王（ジョウボン））の子にして、姓を喬多摩（ガウタマ）、名を悉達（シッタハル）多（悉多太子）と云ふ。母摩耶夫人は、王との間久しく子なかりしが、四十歲にして始めて姙娠し、其の地の風習により己の里方なる隣邦拘利國（コリ）に歸りて、分娩せんとし、途上藍毗尼園（ルンビニ）の無憂樹下に釋迦を生めり。時に西紀前五五六年頃の四月八日と云ふ。（桑原博士釋迦牟尼出世時代考による。）太子、聰明にして諸般の學業に熟達す、國王夫妻は其の老後の一子なるを以て、鍾愛限りなく同じく拘利城主の女、耶輸陀羅（ヤショダラ）（拘利國とは血緣にして親密の關係あり、又同じく塞種の國なり。）を迎へて妃となさしめ、一子羅睺羅（ラフラ）を擧げしむ。太子曾て王城の四門より出でて遊び、人の老・病・死と隱遁の狀を見、深く人生の無情を感じ（是所謂釋迦の四門）、親なる生・老・病・死の苦を除かんとして、衆人を救はんとし、二十九歲の時、一夜城を脫出し、中印度の摩揭陀（ガダ）・毗舍離（ヴァイサリー）の諸國に高德を訪ひ、苦行六年に及べり。

されど苦行は成道の所以に非ざるを覺り、尼連禪河（ニランジャナ）に浴し、其の河畔の菩提樹下に端座靜慮し、廓然大悟成道す、時に年三十五歲なり。

佛陀の布教　佛教の要旨は、己の煩惱を滅却して、涅槃（ネハン）卽ちニルバナの境に達するを主とす、『それ人生は無常の苦界なり、此の苦界を免れんと欲せば、苦の原因たる情慾の念、卽ち我の一念を脫却して、無我無念の境に達せざるべからず。是人世究竟の樂地にして、涅槃（煩惱を出離するの義）な

り。』と、釋迦は此の位置に達せしを以て佛陀と云ふ、大悟正覺せし者の義にして略して佛とも云ふ。彼は又波羅門教に對しては（一）吠陀は甚だしく尊信するに足らず、苦行は毫も解脫に對して益なし、（二）人類は平等無差別にして、種姓の如きは、尊重するに足らず、（三）解脫に對しては供養、種姓の別なく、何人と雖も皆自己の力によりて、解脫することを得べし。』と、云へり。

是に於て釋迦は、廣く衆生を濟度せんとし、先づ西方鹿野苑（鹿苑とも記す、今のベナレスに近きサルナトなり。）に法輪を轉じて所信を發表し、後摩揭陀國に赴き、國都王舍城（ラジャガリハ今のラジャギールにして、當時印度の北半に堆覇（ヒンヒサラ）王に）に布教す。摩揭陀國王は、頻毘沙羅王に舍衛國（スラヴァスチ）に布教し、其の太子祇多（ヂ）の園中を建て、釋迦及び其の徒弟を置けり。）彼は更に恒河を越えて、舍衛國に布教し、其の太子祇多の園中に、有名なる祇園精舍を建つ。四十歳の頃故郷迦比羅國に歸り、父王以下異母弟阿難陀（アナンダ）、從弟提婆達多（ペダッタ）及び己の子羅睺羅等を歸依せしむ、かくて布教に從ふ四十年、年八十歳の頃拘尸那揭羅（クシナガラ）の沙羅双樹（サラサウ）間に於て入寂せり。時に西紀前四八五年頃なり。

釋迦入滅の年、其の高弟大迦葉（マカカシヤパ摩訶迦葉（ダイカセウ）も云ふ。）は、五百の高僧（五百羅漢）を王舍城の西なる石室に會し、第一回の三藏（經・律・論）結集をなし、（佛典に關する相互の記憶を正せり、是れ釋迦は布教に際して、何等原稿もなく遺著もなきによる。）後百年耶舍陀（ヤシヤダ）は、七百の高僧を毗舍離（ヴァイサリー）に會し、第二回三藏結集を行へり。

○提婆達多　佛陀の高弟中には、有名なる舍利弗（サーリプツタ）・目犍連（モッガラーナ）及び大迦葉（マカカセウ）等あり。釋迦の從弟提婆達多（デバダッタ）其の下風に立つを喜ばず、佛陀に代はりて、其の衆を領せんとし、摩揭陀國太子阿闍世（アジャタサトル）に說きて、別に一派を開き、國王にして佛教信者なる、其の父頻毘沙羅王を幽閉退位せしめ、阿闍世を國王としたり。

かくて提婆は、佛教徒を迫害すること至らざるなく、又佛陀をも殺さんとし、有名なる靈鷲山（レウジュ）に登りて、麓を通過しつゝある佛陀を狙ひ、大石を轉下せしが、危く其の足を傷けしに止れり。後阿闍世王悔悟し、佛教に歸せしかば、提婆の一派衰ふ、提婆屈せず、佛教徒を迫害誘惑せしが、目的を達せず、遂に憂憤病死せり。（此間に於て、佛陀の故郷迦比羅國は、拘薩羅（コサラ）國王に滅され、目犍連は波羅門教徒の非業に斃れ、舍利弗は病歿し、佛教に對する迫害困厄甚だしかりき。）

第三節　佛教の傳播

亞歷山大王の東征　釋迦在世の時代アーリヤ種族中の一派なる伊蘭人は、亞細亞西方に波斯（ペルシア）なる大國を建設し、アケメネス家之に君臨し、屢〻其の西方の希臘と海陸に兵を交へたり。

希臘のマケドニヤ王亞歷山大王は、波斯を征し、數年にして之を滅し、前三三四年印度に入り、五河地方を征してタキシラ國を服し、北西印度の覇王たりしポーロスをヒダスペス河畔に破り、進で中印度を服せんとせしが、遠征多年、士卒炎暑に苦しみ從軍を肯ぜず、大王止なく守兵を止めてバビロンに凱旋せしが、間もなく歿したり。（西紀前三二三年）此の時印度に旃陀羅笈多（チャンドラグプタ）と云ふ者首陀姓

より出で、外寇以來、國内の擾亂せるに乘じ、兵を起して摩揭陀を奪ひ、孔雀王朝を創め、希臘の守兵を印度河地方より驅逐せり。摩揭陀國の阿闍世の世は、シスナガ王朝の最盛時なりしが、後四世にして亡びナンダ王朝代りしが孔雀王朝に及べり。マケドニヤは大王の死後忽ち分裂し、其の部將セレウコス亞細亞を領し、シリヤ王を稱せしが、自ら兵を率ゐて印度に來り、笈多と戰ひ尋で和を媾じ、其の女を妻はせ、部下メガステネスを使節として、國都華氏城に駐せしめたり。之より印度とシリヤとの交通頻繁となり、希臘文化は次第に中印度にも輸入せらるゝに至れり。

阿育王の出世　西紀前二七二年阿育王（アショカ）立つ、阿輪迦王とも書す、無憂の義なり。王は孔雀王朝第三世の君にして旃陀羅笈多の孫なり、少壯時粗暴にして、父に疎んぜられ、外征に從ひ或は邊境に置かれたり。父死するや華氏城に歸り、兄を弑し、王位に上りて兇暴なりしが、一度佛教に歸依せしより、遂に聖王となれり。深く佛教を信じ、政教の革新に力む、王の時代は秦の始皇帝と時を同うす。内治外交共に振ひ、其の領土五印度に及び、孔雀王朝の盛時を現出したり。王、佛教に歸依するや（一）自ら釋迦の遺跡を巡拜し、寺院を起し、八萬四千の寶塔を建て、（二）法令を發して、佛教の主義を國民に告諭し、石に刻して諸方に立て（三）宣教僧を四方外國シリヤ・パレスチナ・フェニキヤ・埃及・マケドニヤ・錫蘭・緬甸の諸國。に出し、殊に其の王子摩哂陀（マヒンダ）は獅子國（錫蘭島）に布教せり。錫蘭の佛教之より盛なり。（四）國都華氏城に第三回の結集を開き、一千人の僧侶を會し帝須（ティッサ）を上座とし佛典を巴梨（パリ）語を以て筆錄せり。結集は編輯の意なれども、第一、第二回は暗記する所を述べ、相互に記憶を訂正せしに過ぎず。第一回時に列せし阿難は、博覽彊記第一を以て稱せらる、經文に如し是我聞（ニヨゼガモン）の句あるは、其の存世中聞きしことを現はすものなり。されば眞に結集の本義に適へるは、筆を以て錄せし第三回よりとす。巴梨語は梵語の一派にして當事の摩揭陀地方の言語なり。

として恒河流域に限られし佛教は、帝權强大にして、信仰厚き阿育王の保護により、中央亞細亞地方は云ふに及ばず、歐羅巴、阿弗利加の地方にも、傳播弘通せられ、始めて世界的に光被せしめられたり。王を基督教に於けるコンスタンチヌス大帝に比し、阿育大王と云ふ。其の宗教保護に盡せし功績は、彼の大帝より更に大なりとす。

西紀二三二年カニングハム氏は、印度古代研究の大家にして、又阿育王に關する研究多きが、其の釋迦生誕地の調査發表は、フレル氏及びスミス氏により根柢より覆されたり。今阿育王の即位及び其の死の年代につき、カニングハム氏は、西紀前二六〇年及び二二三年とすれど、スミス氏は二七二年及び二三二年とす。其の間約十年の差あり、今スミス氏の說に從うて記す、之れ最も普通なるべし。阿育王死し、隆盛を極めし孔雀王朝衰へ、七代を經、西紀前一七八年、部將の纂立せるスンガ王朝代り、更に百餘年を經カーンヴァ王朝君臨し、西紀前二七年南方に雄視せし案度羅（アンドラ）王朝に併呑せらる、案度羅朝は、摩揭陀國を滅して、中印度に號令したり。スンガ・カーンヴァ兩朝は、佛教を保護せしが、案度羅朝時代に至りては、波羅門教を再興せし爲め、佛教次第に中印度に衰へたり。

迦膩色迦王の出世　大月氏が既に阿母河（アム）畔に建國し、大夏を臣屬せしめしこと述べたり。其の後大月氏は、五部の翕侯（キウコウ）將軍の義を置きて分治せしが、百餘年を經て貴霜（クシヤン）部最も强く、其の翕侯丘就卻（キウシウゲキ）クヅラ・カドフィセス王は自立して貴霜王と號し、安息を侵し、高附（カブール）國アフガニスタンの都を滅し、其の子閻膏（エンカウ）珍（チン）ウエマ・カドフィセス王は、罽賓を取り、北西印度を併せ勢を振へり。

東漢の初世頃迦膩色迦王大月氏に君臨す、王は閻膏珍王の子なり。都をプルシャプラ（今のペシヤワル）に遷し、深く佛敎を信じ、其の保護奬勵に力を用ひ、都城に四百尺の高塔を立つ。當時大夏地方には、希臘人多かりし爲、其の工人等堂塔佛像の建築彫刻に力を用ひ、希臘風の影響を與へたり。

中印度は案度羅朝によりて、波羅門敎再び勢を得しかば、佛敎徒は北印度に徙り、大月氏はかくて佛敎の中心地となりぬ。

かくて迦膩色迦王は、五百の高僧を罽賓（カシミール）に會し、脇尊者、世友を上座とし、馬鳴（メウ）等之を助け第四回の結集○從來の說にすれば、西紀四年頃ともすべきか。をなし、此の度は波羅門學者の慣用せる梵語（サンスクリット）を用ひたり。

○迦膩色迦王と佛敎の支那傳來　王の出世年代は、東西學者間異說紛々として未だ一定せず、佛滅後四百年より、七百年の三百年の間にありて甚だ漠然たり。迦膩色迦王の次は、フビスカ次をバスデバ王と云ふ。フリート博士は迦膩色迦、フビスカ間に、バシスカ王を入る。羽田博士は迦膩色迦王より二代目或は三代目なるバスデバ王を、魏志明帝本紀大和三年（西紀二二九年）に大月氏より使を遣したる其の王波調と同一人なりと推定し、逆算して加膩色迦王の年代を西紀二世紀の後半と定め、スミス氏は又同世紀の前半（西紀一二〇年頃）とせり。東漢明帝の時支那に佛敎の傳來せりとなすは、頗る疑はしく寧ろそれ以前にあるものの如し。然れども確證ある迄假に從來の說に從ふこととせり。

○第四回結集　佛敎結集は前後四回あれども、迦膩色迦王のなせる第四回の結集には、南方佛敎徒（錫蘭・緬甸・暹羅等の南方諸國）加はらざるを以て、彼等は三回迄を承認すれども、第四回を認めず。

佛敎は古くより宗派多岐を極め、舊說を守るもの（南方派）と、舊說に拘らざるものとありて、二十餘派を生ぜしが、第四回結集後は、舊說を離脫して、高尙なる道理を說くもの多く、之を大乘と稱し北方に行はれ、舊套を固守するものを小乘として卑しみたり。

南方佛敎は、獅子國（錫蘭島）を中心として、後印度・南洋諸島に傳はり、北方佛敎は、北印度を中心として、大月氏に行はる。馬鳴（メウミヤウ）・龍猛（龍樹）等の高僧は、大乘を主張して、全印度に及ぼせしかば、大・小乘の論議これより盛に起れり。

結集	年代	場所	會衆僧數	上座	主催者
第一回	佛滅の年（四八五年頃）	王舍城	五百僧	大迦葉（マハカシヤパ）	摩提陀國王阿闍世（アジヤセ）
第二回	佛滅後百年	毘舍離（ヴアイサリー）	七百僧	耶舍陀（ヤシヤダ）	摩提陀國王迦羅阿育（カラアショカ）
第三回	佛滅後二百三十六年	華氏城（今のパトナ）	千僧	帝須（ティッサ）	摩提陀國王阿育（アショカ）
第四回	西紀四〇年頃？	罽賓（カシミール）	五百僧	脇尊者・世友	大月氏國王迦膩色迦

佛敎の東流

時に東漢に明帝出で、銳意國境を擴め西域との關係頻繁を極めしかば、天山南路・康居・安息方面に擴まれる佛敎は、玆に支那東漸の機會を與へたり。

帝、偶〻一夜金人を夢み崇佛の志あり、卽ち蔡愔（サイイン）を西方に遣り、佛敎を求めしむ。愔、大月氏（大月氏は佛敎流行の中心地にして當時迦膩色迦王時代？）に至り佛經を得、且つ加葉摩騰（カセウマトウ）・竺法蘭（チクハウラン）の二高僧を伴ひて歸り、洛陽に白馬寺を立つ、經を白馬に積來りしが、白馬死して屍壞れず、是れ支那寺院の初めなり。二僧始めて譯經に從ひ、今の「佛說四十二章經」を譯出せりと云はる。

これより外國僧侶の支那に來る者多く、譯經布敎に從事し、東漢末を經て、魏晉の世に至りては、佛敎大に行はれたり。

高僧支婁迦讖は月氏より、安世高は安息國の王子、康孟祥は康居より、鳩摩羅什（クマラジウ）は龜茲より來れり。玆に於て支那佛敎は漸次隆盛に赴き、其の文化に一大影響を及ぼすに至る。

○佛敎東漸の諸傳說　(1)秦の始皇の時、沙門室利房等十八人西域より來る。始皇、其の異俗を惡みて、獄に下せしが、金剛神獄を碎きて逃れしむと。梵唐無稽の說なれど、或は阿育王と時代を同じうせるを以て、其の宣敎僧に非るかとも云ふ、未だ疑ふべし。

(2)西漢の霍去病匈奴を伐ち、金人を得て歸りしを佛陀の像とす。(3)張騫大夏に至り、身毒（印度）に佛あるを知りて歸れりと。(4)成帝の時大儒劉向、書を校せしに佛經ありと。

(5)三國志の魏志に引ける魏略の記事に『昔漢の哀帝の元壽元年、博士景盧、大月氏の王使伊存に浮圖經の口受を受く。』の旨あり。當時大月氏に、佛敎行はれしは事實なるを以て、此の說佛敎傳來の最も正確なるものとさる。

○明帝時の佛敎傳來に就いて　最も普通なる佛敎傳來說は、漢の明帝時にして明帝使者蔡愔を遣り、經を求め二高僧を洛陽に伴ひ歸り、白馬寺を創建し、佛說四十二章經を漢譯すと。されど此の傳說は多くの點に於て、矛盾と誤謬多く、最も信じ難しとさる。佛說四十二章經は、老子道德經に模する點多く、文章より云ふも老莊の說盛なる六朝時代に適し、二高僧の譯出なること頗る疑はし。且つ有名なる道安の佛典の目次中に、四十二章經の如き書の見えざるは、後人の僞作なるを思はしむ。

迦葉摩騰・竺法蘭の二高僧の來りしことも、桓帝の時安世高の來れる迄、支那書中に一言の記載なし。南北朝梁時の隸皓の高僧傳に初見するも、出三藏記集の如き書に、來朝のこと見えず是れ又疑はし。

張騫、明帝の使として大月氏に赴き經を取り二高僧を伴ふの事を記せども、張騫は西漢の武帝の臣にして、時代上の不都合あり、後世之を蔡愔（高僧傳）と改め、張騫の名を削りしも、其の蔡愔たるや、諸書中一も傳ふるものなく知るに由なし、又白馬寺につきても高僧傳には、招提等を改めて後白馬寺とす、之より諸國白馬寺起れりと、又白馬經卷の傳說と違ふこと多し。

要するに既に時代に於て著しき相違あり、其の他符合せざる箇所頗る多きを以て、明帝時佛敎傳來說は信を置き難し。故に佛敎は西漢時に傳來し、安世高を待ちて愈〻盛となれりの說正しきが如し。されど本書は暫く舊說に從ひ、更に正確なる考證論議を待つこと、迦膩色迦王の出世時代の疑義に於ける如し。

第六章　東漢の中・末世と群雄の割據

第一節　東漢と西域との關係

南北匈奴　光武帝の世、匈奴既に南北に分れ、南匈奴の日逐王比は、又呼韓邪と稱して、漢に內附し、單于蒲奴に抗せしこと前述の如し。北匈奴は、漢に和を請うて許されしことありしも、反覆常なく、且つ西域諸國は、東漢に內屬せんことを望みしも、光武帝煩を厭ひ許さざりしを以て、皆北匈奴に降りしかば、其の勢復た强大となり、屢〻漢の邊塞を擾せり。

明帝遂に意を決し、光武の方針を改めて積極主義を採り、北匈奴征伐の師を起せり。西紀七三年帝祭彤（ツイトウ）・吳棠・竇固等に命じ、南匈奴と合し大擧北征し、北匈奴を蒲類海（ボルクール）（天山南路の巴爾庫勒）附近に擊破し、伊吾盧（ハミ）（天山南路の哈密）の地を取り、將士を屯田せしめ、西域と匈奴との交通を扼せり。

班超の遠征　明帝茲に於て、更に北匈奴の右臂を絕たんとし、竇固に從ひて北匈奴遠征に戰功ある、班超を擢でゝ西域に使せしむ。超、命を受け南山に沿うて鄯善國（ロプノール附近）に至りしに、國王、匈奴の使者を憚りて漢使に禮なし、（匈奴の使者百餘人、漢の使者は三十六人なりしなり。）超、虎穴に入らずんば虎子を得ず

と稱し、夜襲うて匈奴の使者を殲せしかば、鄯善王恐怖して漢に降れり。超、更に于闐國に至り王を屈從せしめ、疏勒王を擒にせり。此の間竇固・耿秉（カウヘイ）等大軍を發して、屢〻北匈奴を破り、車師（トルファン）（吐魯番）の地を奪ひ、西漢の西域都護を此の地に復し、漢威漸く西域に振ひしが、未だ龜茲・焉耆の諸國北匈奴に屬して降らず。

西紀七五年明帝死し、漢の兵氣沮喪せるに乘じ、北道の諸國は起ちて漢に背き、龜茲・焉耆の諸國は、北匈奴と共に都護府を陷れ、班超を攻めしかば、新に立ちし章帝は意を西域に斷ち、班超を召還す。

されど于闐・疏勒の諸國は、切に駐鎭を乞ひしかば、超、上書して西域を鎭定せんことを乞ひ、止りて疏勒・于闐の兵を發し、龜茲を降し、焉耆を擊ちしが、後、漢の援軍を得るに及び、烏孫と再び結び、沙車・溫宿等五國の連合軍を破り、又大に大月氏の兵を破れり。西紀九一年和帝西域都護を龜茲に開き、班超を以て都護に任ず、西紀九四年に至りては、西域五十餘箇國、悉く質子を漢に納れて內屬せしかば、漢威葱嶺の東西に振へり。

超、定遠侯に封ぜられ、後老年を以て屢〻歸國せんことを乞ひ、漸く許され洛陽に入りしが、翌月病を以て死せり。時に西紀一〇二年、超七十一歲、其の西域にある三十一年に及べり。

匈奴の西移と西域　西域諸國既に隷屬して、北匈奴の勢大に衰へ、章帝の時代には諸國の其の弊に乘じ、鮮卑は東より、南匈奴は南より、丁零は北より、而して西域諸國は其の西より、之に迫れり。和帝の時、帝の外戚竇憲罪あり、南匈奴の請に應じ、北匈奴を伐ちて罪を贖はんとし、耿秉と共に大軍を率ゐて北征し、西紀八九年大に北匈奴を燕然山（外蒙古抗愛山）に擊破し、殺虜二十萬に及び、功を碑に刻して歸れり。其の後二年、竇憲、任尙等をして再び之を擊ちて大敗せしむ、單于遂に西方に逃走し、カスピ海邊に去り、西洋史上にフン（又はヘンヌ）として現はれ、北匈奴の故地には、東方より鮮卑族徙りて住し、其の餘衆を服したり。鮮卑之より次第に盛にして、魏・晉・南北朝時に至りて大に現はる。

班超の死後任尙代りて西域都護となりしが、性嚴急にして民心を得ず、邊和を失し、西域諸國並び叛せしかば、安帝は西紀一〇七年西域を棄てゝ、都護を召還せり。（任尙、都護となり班超に敎を乞ふ、超曰く『水淸ければ大魚なし、宜しく蕩佚簡易なるべし。』と、尙、聞きて後、人に語りて曰く『定めて奇策あるべしと思ひしに、今聞くに平々凡々たる事のみ。』と、されど平凡のことすら守り得ず、果して邊和を失せり。）

されど西域を棄つるは、匈奴をして之を羈屬せしめ、遂には復た中國に禍する所以に外ならざれば、西紀一二三年班超の子班勇の勇あるを聞き、擧げて西域長吏とし、都護を起せり。

班勇卽ち西域經略に從ひ、父の名を辱しめず、西紀一二六年焉耆を降し、龜茲・于闐・疏勒・莎車等十七國を來歸せしめ、漢威漸く振ふに至りしが、後焉耆を伐つに當り、勅を失せし故を以て獄に下されしかば、功遂に成らず、漢威全く西方に衰退したり。（兩漢を通じ其の西域經營には一定の方針なく、終始一貫せざりしは、其の結果を蛇尾に終らしめし所以なり。）

大秦との交通　漢威葱領の東西に普き時に當り、羅馬帝國は次第に領土を擴張し、地中海を內海とする三大陸を掩有し、頻に安息國を破りて、領土を東方亞細亞に開く。

班超、羅馬の富强を聞き、之に通ぜんと欲し、部將甘英をして大秦（タルシ）に赴かしむ、大秦は卽ち羅馬に對する漢の呼稱なり。

甘英安息を經て、大海の邊に至りしに、安息人東漢の大秦に通ずるを好まず、之を妨げ欺きしかば、甘英空しく行を中止せり。（大海は波斯灣なるべし、船人甘英に告ぐるに、海水廣大にして善風を得るも三箇月を要し、若し風惡しきに遇はば二歲を要す。故に此の海を渡らんとせば、三年間の糧を備ふべし、海中にて國土を思慕し死するものあり。云々。）大秦と支那との交通は、繒綵の賣買に起因す、繒卽ち絹は、支那以西の諸國民の手を經て、亞歷山大王東征以前より、既に其の販路を西方に開きしが、大秦人は其の美麗と堅靭の故を以て珍重措かず、殊に貴族閥族の奢侈墮落の時代にありては、其の價黃金と等しかりきと云ふ。（繒兒は希臘・羅馬にて訛りて「セル」（Serium）と呼び、此の拉典語より出でて歐洲諸國の語となれり。英語のシルク（Silk）又之に由づ、而して繒を商ふものを「セレス」と云ひ、其の產地を「セリカ」と呼び、又支那を稱するに此の名を以てせり。）

東漢の初世より、羅馬帝國は次第に地を東方に開き、支那の富有を聞き通ぜんとせしが、安息

の中間に妨ぐるありて果さず、後遂に安息を破りて、波斯灣頭の地を得るに及び、大秦王安敦（アントニウス）は海路より使を派し、印度洋を横り、東京地方より支那に通ぜり。時に東漢桓帝の延熹九年九月にして西紀一六六年なり。

其の後三國、西晉の時代迄、大秦の賈人東京地方に來り、貿易に從事せしが、內亂多きと、支那官吏の貨賄を貪りて、重稅を課せしより、貿易は次第に衰へたり。當時大秦と支那との交通は印度洋上の恒信風を利用せるものの如し。恒信風は西紀四七年頃、此に埃及人ヒッパルスによりて知られたり。恒信風は四月より九月迄は西南風なるを以て、西洋より東洋に來るに便、十月より翌年三月迄は、東北風吹くを以て東洋より西洋に至るに便なり。桓帝延熹九年九月は即ち西南風の利用なりと察せらる。

○西域に就いて　西域とは支那本部以西の諸國にして、玉門關、陽關（二關は甘肅省安西州燉煌縣西にあり、西域往來の關門なり。）の二關以西の諸國なり。廣義には、地中海濱に至る西方亞細亞一帶の義となり、狹義には、葱嶺以東の天山南路の諸國を指すの義とさる。

龜茲・于闐・焉耆等の諸國は、唐時代迄は、アーリヤ人種の據りし國なること、近時の發掘により略ゝ闡明せられたり。今日の如く土耳其族の住むに至りしは、唐代以後の事に屬するも、アーリヤ人建國時代より、土耳其・チベット族の雜居せしは、云ふまでもなし。其の他の西域諸國の人種につきては、未だ確證なきも、略ゝアーリヤ人種の據りたるものの如し。

第二節　外戚及び宦官の專橫

明・章二帝の政　光武帝、西漢の滅亡が外戚の跋扈にあるを見、陰皇后の親族の如きも執金吾（軍衞の長官の名にして、兵器を執りて禦ぐの意なり。）に拜せしに止めしを上とす。明帝又其の遺圖を繼ぎ、外戚の封侯と參政とを斷じて許さざりき。帝の世も宋均の如き良吏の出づること多く、國內よく治り民皆太平を樂しめり。

帝、儒を喜びて奬勵を怠らざれど、性明察に過ぎ、好みて人の隱事を摘發するの風あり、爲めに公卿大臣皆兢々たり、（帝、偏察深刻にして寃禍にかゝりしもの甚だ多く、楚王英誹死し、坐して刑死する者數千人に及べり。）帝、在位十八年西紀七五年を以て死し、太子炟立つ卽ち孝章皇帝なり。

章帝は、父帝明察穿深の後を受け、人々の苛酷を厭ふを知り、事每に寬大の所置を採り、刑辟を愼み、窮民を賑恤し、農桑を勸め、孝悌を重んじ、以て風俗を興せり。忠臣は孝子の門より出づの語は、帝の聽きて最も善ぶ所なりき。

帝、又大に儒學を尊崇し、孔子以下七十二弟子を魯の闕里に祀りしを始めとし、德敎の奬勵怠らざるなし、故に一世靡然として皆學に向ふ。帝諸儒を大に白虎觀に會し（宣帝儒を好み、諸儒を石渠閣に會せしに倣へり。）五經

の異同を論議せしめ、親臨之を決して白虎通を作成し、又侍中曹褒に命じて、漢禮を制せしめたり。（諸儒の說、一ならざりしを以て曹褒に命じ、叔孫通の舊典に依らしむ。）

されど帝の寬大は、一方に於て外戚跋扈の端を開き、一族諸王又優遇せられ、上下の序を紊る者をさへ生じたれば、前代二世の外戚抑壓の苦心水泡に歸し、賢明なる馬太后（馬援の女にして明帝の皇后なり。其の威望と明德は群臣を服せしめ、章帝を戒めよく太平の治を致したり。）死するや、皇后竇氏の一族强盛にして、東漢外戚專横の序幕を開きぬ。

外戚竇氏の跋扈　光武・明帝・章帝の三代は、實に東漢の黃金時代なりしが、西紀八八年明帝死し、太子肇立ちて和帝となるに及び、漸く衰頽の兆現はれたり。

東漢滅亡の二大原因は（一）外戚の跋扈、（二）宦官の專横にして和帝以後の諸帝は、不幸にして短命多く、勢、後嗣の幼主たるを免れず、帝、幼沖なれば母后朝に臨み、從て外戚宦官の政事に干涉するの勢を馴致し、爲めに後宮の暗鬪と幼帝擁立の醜狀とは、幾多淸節高潔の士を犧牲たらしめしかを知らず、十帝百餘年間、慘雨史上を蔽ふの概あり。

和帝十歲にして卽位す、竇太后（竇融の孫なり）政を攝するに及び、其の一族勢を得、太后の兄竇憲は、匈奴を大破せしより權を恣にし、大將軍となり三公の上に座し、驕暴至らざるなく、無賴の食客を養ひ、貪婪飽くを知らず。和帝長じ、竇氏の逆意あるを知りしも、滿朝竇氏の黨ならざるはなかりしかば、遂に宦官鄭衆と謀り、不意に起りて竇氏の黨を誅殺し、迫りて竇憲を自殺せしめしかば、漸く暗雲霽れて、晴日を迎ふるが如かりき。（有名なる班固は竇憲に仕へ、其の匈奴を破るや燕然山の石に勒し、或は白虎通の撰に與りて其の博學を知られしが、竇氏の罪に坐し獄に下され、當時勅命によりて撰修中なりし漢書完からずして死せり。帝其の妹班昭（曹大家と稱せらる、曹氏に一度嫁せしを以てなり。）に勅し、之を踵ぎて完成せしむ。班固は學者班彪の子にして班昭の兄、班昭は班超の妹なり。）

外戚鄧氏と閻氏　竇氏誅滅の功は、宦官鄭衆によること大なり。帝、鄭衆を中常侍より大長秋に進め、諸事之に謀りしかば、其の威權益〻加はり遂に侯に封ぜられ、中官の專權茲に萌しぬ。（中官の封侯は蓋しこれに始まる。）

帝の皇后陰氏、嫉妬にして卻けられ、鄧貴人皇后となる、光武帝の功臣鄧禹の孫なり。帝在位十七年（西紀一〇五年）二十七歲を以て死し太子隆（シャウ）帝となる。生後僅に百餘日、帝在位の暇なく八箇月を以て死せしかば、鄧太后は其の兄鄧騭（トウシツ）と謀り、安帝（名は祐）を擁立す、年十三歲なり。鄧騭政權を握り、羌族の亂甚だしきを征して功あり、其の勢內外を傾けしが、安帝長じ鄧太后死せしより勢衰へ、宦官江京及び宮人等鄧氏兄弟を讒せしかば、帝　鄧氏一族を國に就かしめしに、騭、食はずして死せり。

帝の乳母王聖及び其の女伯榮皆狡猾なり、曩には鄧氏を讒構せしが、宦官江京等と共に勢力を振ひ、閻皇后の兄閻顯も亦次第に勢を得たり。

安帝、在位十九年西紀一二五年を以て死するや、閻皇后は閻顯と謀り、北鄉侯懿を迎へて少帝となし、王聖・伯榮を雁門に移し權を專にせしが、少帝死するや宦官孫程等十九人、顯を誅し廢太子濟陰侯保を迎へて位に卽かしむ、之を孝順皇帝とす、年僅に十一歲なり。順帝は安帝の庶子にして太子たりしが、顯之を廢して少帝を立つ、然るに少帝在位僅かに八ケ月にして死せしかば、喪を秘して發せず、更に諸王子を物色せんと謀りゐたり。

○太尉楊震の死　楊震字は伯起、弘農の人なり、家貧にして學を好み、淸節高德、人呼びて關西の孔子となす。後郡守となるや屬邑の合金を懷にして贈る、震之を卻く。合曰く『暮夜知る者なし。』と、震卽ち有名なる四知（天・地・子・我）を以てす、合慚ぢて退けり。三公となるに及び宦官及び安帝の乳母王聖等事を用ふるに賄賂、請托多し、震從はず、帝に直言せしかば、閻顯等の諸黨惡みて讒奏し、帝をして其の印綬を解かしむ。震、諸子門人に謂て曰く『死、素より士の分とする所なり、君寵厚かりしに係らず、奸臣・嬖女の狡猾傾亂を救ふ能はず、何の面目ありて日月を見えん。』と遂に鴆を飲みて自殺す。（かゝる淸節の士が、當時の汚濁の世に容れられざるは當然なり。）後三年孫程等閻氏を誅するや、楊震を華陰に改葬し忠直を表す。葬るの日名士皆來會す、高さ丈餘の大鳥來りて墓前に到り、俯仰流涕して去ると傳ふ。

外戚梁氏の跋扈　宦官孫程等十九人、皆功を以て列侯に封ぜらる、實に未曾有の出來事たり。宦官の勢力よりて益〻盛なり。宦官の養子を入れて、爵を襲がしむるを許す。順帝梁氏を納れて皇后となし、其の父梁商を大將軍に任ぜしが、商の死後其の子梁冀（リヤウキ）して其の後を襲がしむ、之より外戚の權又盛なり。冀、暴慢、佚遊を事とし、己を誹るものを誅殺して顧みず、宦官等屢〻帝に讒奏せしも帝之を信ぜず。却りて退けしかば冀の權勢內外に振ひ、舉朝之を迎へたり。時に群盜諸方に起り、名士は當路の外戚宦官の專橫を彈劾し、杜喬・張綱最も强硬なり。冀、最も張綱を惡み之を陷れんとし、廣陵の太守とし、十餘年間廣陵を擾亂せし賊張嬰を平げしむ。綱乃ち嬰の城門に赴き、己の軍を還し、單身入りて嬰に會し、懇諭せしかば、嬰部下一萬人と共に降れり。されど綱一歲にして死し、諸郡の群盜は未だ平がず、帝を稱する者をさへ出したり。順帝、在位十九年（西紀一四五年）にして死し、太子炳二歲を以て立ち、孝冲皇帝となりしが、數月を以て死し、章帝の玄孫纘（サン）位に卽き孝質皇帝と稱す、年僅に八歲。是れ梁冀の擁立する所たり。質帝聰明なりしが、朝會に際し冀を目して跋扈將軍と云ひしより惡まれ、在位一年にして鴆弑に遇ひ、鯁臣李固（大尉）杜喬（大鴻臚）又貶殺せられ、正義の士又口を拑す。今や冀の凶逆驕暴絕頂に達し、章帝の曾孫年十五歲なる孝桓皇帝（名は志）を擁立し、勢內外を傾く。卽ち宮廷滿堂は悉く己の黨ならざるなく、貢獻及び百官の遷召、天子に先じて己の邸に至らしむ。帝威爲めに輕く、桓帝漸く之を惡めり。

帝遂に宦官單超（センチヤウ）等を謀り、羽林、虎賁の兵を發し、俄に冀の邸を圍みて之を誅し、其の一族少長となく皆之を斬れり。其の黨免ぜらるゝ者三百人、朝廷爲に空し。冀の專橫は玆に至る迄四帝二十年、七侯・三后・六貴人・三大將軍、卿將尹校五十七人に及びたり。梁氏富天下を傾けて三千餘萬、其の沒收せらるゝや、天下の租稅を半減せりと云ふ。

宦官の專横　桓帝よりて宦官單超等五人を列侯に封じ、黄瓊を太尉とす、瓊、梁冀の黨與の州郡にありて、貪焚なるものを誅し、次第に名士を登用せしかば、范滂・陳蕃の如き清廉なるもの著はれ、天下新政を翹望するに至りぬ。

されど帝、内寵多く宦官を信任し、新に其の鄕侯となる者八人、宮廷は奢侈腐敗甚しく、宦官等競うて邸宅を起し、州郡に臨みては、誅求、貪焚なること盜賊と異るなく、庶民苦しみて群盜所々に起れり。

名節の志士等、宦官の專横、驕恣を惡む、周景三公の如きは諫して、宦官の子弟の位に居るべからざるを奏し、五十餘人を免黜或は刑死せしめて、肅然たらしめしことありしも、帝色を好み宦官に任ずること多く功果擧からず。既にして陳蕃太尉となり李膺を擧ぐ、膺司隷校尉（今の警視總監の如き職）となり、無道なる宦官張朔（野王の令にして民に臨むに貪慾無道なり。張朔逃れて兄の家に走り、合柱に隠れしに、柱を破りて朔を引出し死刑に處したり。）を捕へて死罪に處せしより、宦官等膺を恐れ官省に出でず、一時屏息したり。されど狡奸邪智なる宦官等、如何で默して止むべき、遂に帝に誣奏し、黨錮の大獄なる復讐的手段に出づるに至れり。

第三節　東漢の黨錮

黨人の禁　光武帝の儒學の奬勵と名節の推稱は、東漢の一氣風をなし、質帝時には大學の盛なること、漢代に其の比を見ず、學生三萬を超えたり。かくて地方にも向學の氣運漲ると共に、人物の是非、行爲の批判、流行し、朝廷の腐敗、宦官の凶暴專横等の事より、延いては政治の得失を論じ、殊に大學に於て著しきに至りぬ。

當時大學の學生三萬餘人、郭泰・賈彪（カヘウ）其の首領となり、陳蕃・李膺等と互に推重し、學中の人物評と政治論は益〻盛となり、公卿・宦官皆其の批評を恐れ、此等名士を黨人と云ふ。

時に陳蕃・李膺等朝にあり、宦官等一時屏息せしかば、地方の太守等（山陽の太守翟超・南陽の太守成瑨等四人）は、かねて宦官と結托せし、富豪及び宦官の黨を逮捕、案殺したり。然るに時既に赦令出でし後なるを以て、宦官等帝に寃を訴へしかば、帝怒り、太守等を捕へて獄へ下す。陳蕃及び臺官たる劉茂諫めて四人の罪を宥さんとす、帝悅ばず、二大守獄中に死し、宦官蕃を怨めり。時に張成と云ふ者ありて方術を以て宦官に出入して其の黨與たり。窺ひて赦の出づるを知り、故らに其の子に敎へて人を殺さしむ、李膺司隷校尉たり、直に之を捕へしに、時既に赦令出づ。されど膺等之を案殺せしかば、宦官等、外は張成等に上書して、其の寃を訴へしめ、李膺等大學の學生等と共に、黨をなし朝廷を誹謗すと。而して己等内より之に呼應して、李膺等を讒奏す、帝震怒し、郡國に命じ黨人等を逮捕せしむ。

陳蕃諫むれども聽かず、李膺を獄に下し、其辭に連りて杜密・陳寔（チンショク）・范滂等二百人に及ぶ。陳蕃更に上書して極諫すれども用ひられず、朝臣等恐れて又黨人の爲めに辯ずるものなし。

賈彪曰く『吾西行せずんば、大禍解くべからず。』と、乃ち洛陽に入り、竇皇后の父竇武等に說く。竇武（竇融の玄孫）上書して李膺等を赦されんことを請ひ、李膺等の獄辭も亦多く宦官の子弟を引きしかば、宦官等恐れて帝に請ひて赦さしむ。桓帝遂に天下に大赦し、名士二百餘名は田里に歸るを赦されしも、尙終身を禁錮せられたり。

此の年（西紀一六七年）帝二十六歲を以て死し、竇武等章帝の玄孫宏の年僅に十二歲なるを立つ。之を孝靈皇帝とす。

黨人の大獄　李膺等廢錮せられしも、天下の人心は此等名士に同情して集り、范滂南するや、汝南・南陽の士大夫之を迎へて車數千輛に及び、天下之等を相推稱して稱號をなす。竇武・陳蕃・劉淑を三君と云ひ（君は一世に宗たるの謂）李膺・杜密・王暢・荀昱等を八俊と云ひ（俊は人の英なるの謂）郭泰・范滂等を八顧と云ひ（顧は德行人を導くの謂）張儉・翟超・劉表等を八及と云ひ（及は能く人を尊き追宗せらるゝの謂）度尙等を八厨と云ふ。（厨は能く財を以て人を救ふの謂）

宦官の跋扈以來、紀綱全く弛み群盜起り、地方の騷擾絕えず、靈帝幼なるを以て竇太后朝に臨み、竇武大將軍たり。武、士を愛し自ら奉ずる所薄く、禮賄を退け、學生、貧民に兩宮の賞賜を賑施して、天下の聲望高し。陳蕃太傅となり、共に政務を執り復興を圖り、黨錮の禁を解きて、李膺・杜密等の名士を延いて朝に列せしかば、天下の人心又泰平を想望するに至りぬ。

されど陳蕃は、到底宦官と兩立する能はざるを見、竇武と謀り悉く之を誅除せんとし、竇太后に謀りて未だ決せず、宦官曹節等密かに之を察知して大に驚き（宦官等死を決し相親むもの十七人夜血を歃りて共に誓へり。）帝に臨御を請ひ、機先を制し、竇武等に誣ゆるに大逆を以てし、先づ陳蕃を殺し、竇武を邸に圍みて自殺せしめ、其の族を悉く殺し、太后を南宮に遷せり。

かくて宦官曹節等六人は列侯となり、翌年李膺・杜密・范滂等百餘人を獄に捕へ悉く殺し、其の門生、妻子又禁錮・流遷の厄に遇はざるはなし。天下の名士、儒者にして、凡そ宦官と協はざるものは、皆黨人と目せられ、死徒・廢禁に處せらるゝ六七百に及び、正義の士一網にして殆ど盡きたり。（郭泰のみ言論の危激を避けしかば、辛うじて免れ自ら晦ませり。）

東漢の外戚宦官交替の略表　（和帝より帝辨に至る間を略解したり。太字は宦官なり。）

- 4 和帝（七）
  - 寶太后
  - 兄寶憲 — **鄭衆**
  - 兄鄧騭 — **江京**
  - **李閏**
- 5 殤帝（一）
- 6 安帝（一九）
  - 鄧太后
  - 兄鄧隲 — **孫程**
  - 父梁商 — **翟超**
  - 兄梁冀
- 7 少帝（一）
  - 閻太后
  - 兄閻顯
- 8 順帝（一九）
- 9 沖帝（一）
- 10 質帝（一）
- 11 桓帝（一八）
  - 梁皇后
  - **寶太后**
  - 寶武 — **曹節**
  - 何太后
  - 何進 — **張讓**
  - **段珪**
- 12 靈帝（二一）
- （帝辨）

第四節　海内の騷亂、群雄の興起

黄巾の賊　名士朝に盡き太平の望全く絶え、宦官の跳梁言語に絶す、加ふるに靈帝後宮の宴樂に耽り政を顧みず、天下の珍寶を蒐め自ら樂しむ。海内騷然、群盜、兵亂相踵いで起りしが、西紀一八四年黄巾の賊起るに及び、四方亂離、漢室復た起たざるに至りぬ。鉅鹿の張角、黄老の學に附會して妖術を行ひ、符水・呪言を以て病を治し、自ら太平道と稱し、愚民を煽動し、十餘年にして其の徒數十萬、自ら天公將軍と號し、弟張寶・張梁を地公將軍・人公將軍となし、全黨黄巾を著けて標識とし、所在を焚掠して遂に天下に治し。故に黄巾の賊と云ふ。

帝驚き、何皇后の兄何進を大將軍とし、函谷・伊闕・孟津等八關に都尉を置き、皇甫嵩（クワウホスウ）等をして之を討たしむ。

騎都尉曹操又起り嵩を助けて黄巾の賊を伐つ、既にして張角病死し、二弟寶・梁は嵩の爲めに殺され、凶焰盛なりしに似ず、亂三月にして平げり。（汝南によく人物を評する許邵（セウ）あり、曹操自ら赴き已を問ふ。邵答へず、操怒りて暴力を用ひんとす。即ち評して曰く『子は治世の能臣にして、亂世の姦雄なり。』と、操喜びて去れり。蓋し曹操を評して最も適切たり。）

州牧の就任　黄巾の賊は平ぎしと雖も、餘衆尚所在に出沒し、群盜州郡に蜂起し、大なるは二三萬ホなるも六七千、横行掠奪を擅にして、朝廷制する能はず民皆困しむ。

太常劉焉、靈帝に奏し『四方の兵寇已まざるは、刺史の威輕きにあり、宜しく重臣を派出して州牧とし以て之を鎮壓せしむべし。』と、朝議之を可とし、州牧を派出して各州を鎮せしむ、劉焉又自ら益州（蜀）の牧たり。之より州牧の勢力盛にして、一大諸侯の如く、遂に群雄割據、延いては三國分立等の形勢を馴致せり。

袁紹と董卓　靈帝在位二十二年、西紀一八九年を以て死し、皇子辨（廢帝）十四歲を以て立つ。何太后朝に臨み、其の兄何進朝政を執り、袁紹（エンセウ）（四世に五公を出し門閥家として知られ、又從弟袁術と共に天下の豪傑を引き深く士心を得て勢力あり。）と結び宦官を誅芟せんと謀り、又別に河東の將軍董卓（トウタク）の兵を招き、更に之を圖らんとす。既にして謀洩れ、宦官再び先を制し、張讓・段珪等何進を太后の宮に殺せしかば、袁紹等事露はれしを知り、急に兵を勒して諸宦官を捕へ、少長となく二千餘人を斬殺し、漢代宦官の禍を根絶せり。（宦官勢を得る三十年餘、是に至り其の黨を絶つ、或は此の時髮なくして誤殺せられし者ありしと云ふ、光風霽月小氣味よき感あり。）

宦官誅滅後、董卓大兵を率ゐて後れ至り、帝辨の怯弱を廢し（卓、當時の事情を帝辨に問ふも語る能はず、九才の弟陳留王却りて禍亂の顚末を語りしかば、卓之を賢としたり。）陳留王協を立て孝獻皇帝とす、是れ東漢最後の皇帝なり。

董卓、既に廢立を行ひ、何太后を鴆殺し、自ら太尉・相國となり、暴威を振ふ。關東の州郡兵を

起し、袁紹を盟主とし、董卓を討たんとするや、卓、献帝を奉じ、洛陽の財産を沒收して、荒廢に歸せしめ、且つ民數十萬を驅つて、長安に遷都す。袁紹・曹操及び長沙の大守孫堅等の關東の諸將、卓の軍と戰ひて勝敗ありしが、幾何もなく征討の諸將相乖離し、袁紹は襄陽の劉表と結び、袁術は直隷の公孫鑽と結び互に相圖れり。

董卓長安にありて、威權を擅にし、暴虐を振ひしが、卓、自ら天子に擬し金・銀・財寶を山積し、三十年の蓄を貯へ、『事あらば天下に雄據せん、成らざれば此の財を守りて老いん。』と、使徒王允、密に卓の臣呂布と結び卓を殺せり。卓の黨起りて王允を殺せしかば、呂布は逃れて袁術に歸し、更に袁紹によれり。呂布勇猛にして弓馬に達し、其の剛强當代一と稱せらる。

曹操献帝を奉ず　董卓の死後關中大に亂れ、献帝は董承に奉ぜられ、長安を出で洛陽に歸りしかば、曹操、謀臣荀彧（ジュンイク）の勸に隨ひ喜びて帝を許（河南許州）に奉じ、自ら大將軍となり、司空なり、遂に天下に號令せり。

時に漢の景帝の孫、中山靖王勝の後に劉備と云へるものあり、家貧にして、筵を織り屨を鬻ぎ老母をやしなひしが、大志あり天下の豪俊と交はる、公孫鑽に從ひて起り、遂に徐州の牧となれり。

されど袁術、呂布と結び、劉備を攻むるに及び、備破れて曹操に歸す、操茲に於て自ら兵を率ゐ、布を攻めて之を殺し、袁術を伐ち之を憂死せしむ。

時に董承、献帝の密詔を得たりと稱し、曹操を圖らんとし備を誘ふ、備も亦夙に操の奸智ありて異心あるを疑ひしかば、共に之を除くの計をなせしが、謀洩れ、承は殺され備は逃れたり。

官渡の戰　袁紹、門地高きを以て曹操を蔑視す、大將軍として冀・青・幽・幷の四州を督し、北方直隷の公孫鑽を殺し、烏桓を懷柔し、河北に雄視し、曹操を擊たんとす。

西紀二〇〇年兩軍大に官渡（河南開封府中牟縣）に戰ひしが、紹、大敗して後二年憤死し、其の子譚・尙の二人立ちて嗣を爭へり。操、之に乘じ譚を敗死せしむ、尙逃れて烏桓に投ぜしかば、操、更に迫りて烏桓を擊破覆滅せしに、會ゝ遼東の太守公孫康尙を斬りて來り降れり。

茲に於て北方皆平ぎしかば、操、兵力を專ら南方に注ぎ、備の依れる荆州の牧劉表を擊つ。表、襄陽にあり、厚く備を遇せしが、既にして死し、其の子劉琮遂に操に降る、備、止を得ず更に南し、江南の孫權に歸せり。

孫權は堅の子にして策の弟なり、堅、袁術・公孫鑽を結び、袁紹と結べる劉表と爭ひしが（袁紹と袁術とは從兄弟なれども、共に門地高きより却りて相嫉視し爭へり。）流矢に當りて死せり。子策英邁にして奇材あり、代りて父の兵を領し術と結び、北上を圖りしが、術・鑽等皆滅び、不孝にして己も殺されたり。弟、權次ぎて其の衆を領

し、江南に割據して勢を保つ、遂に備を容れて操を遮るや、茲に有名なる赤壁の戰起れり。

○赤壁の戰　備曾て、襄陽にあるや、司馬徽・徐庶の言に聽き、伏龍・鳳雛を得ば天下の事を行ふを得んと、（鳳雛は龐統にして字は子元、亮と並び稱せらるゝ傑士なり。伏龍は臥龍とも稱し諸葛亮字は孔明なり。統、備に仕へ獨の取るべきを云ひ、江を溯りて之を伐ち、天下三分の計を實行せしめしが、洛城を圍みし時白馬に跨りし爲め、亂箭の爲めに斃れたり。高祖の韓信にも比すべかりし將なりしが惜しむべし。）南陽の隴畝に耕せる、諸葛亮を訪づること三度、遂に之を出廬せしめて謀臣とし、君臣相得る水魚の如きに至れり。

備、破れ吳に投ぜんとするや、亮自ら請うて孫權に使し『北方の兵水に習はず、將士遠征に疲弊し、且つ荊州必ずしも操に心服せず、力を協はせ共に伐たば、北軍を敗らんこと必せり。』と、權大に喜びしも決せず。時に操兵八十萬と號し、流に順うて東下し、權に書を送り『今水軍八十萬を治せり、願はくば將軍と吳に會獵せん。』と、權、之を將士に示すや皆色を失ひ、迎ふべしとなす者多し。されど周瑜・魯肅（シウユ　ロシユク）の二人之を不可とし、權に勸め必勝を策し、主戰に決せしめ、瑜、自ら兵三萬を率ゐ、赤壁（湖北武昌府嘉魚縣）に向ふ、時に西紀二〇八年なり。瑜の部將黃蓋（クワウガイ）、瑜に勸め先登の舟師を率ゐ、僞りて操に降り、枯柴、燥荻に油を注ぎ、北軍の船艦密集の間に入り、自ら火を放ちて之を燒打たんとす。既にして東南風大に起るや、蓋の舟師進むこと矢の如く、近くに及び皆自ら火を放ちて迫りしかば（操の近臣張遼は降服の敵艦の輕く疾驅し來るを見、『今、東南風頗なり苦し火攻の計を以て敵に迫らるれば如何にすべき。敵の降艦の速にして、船腹深く水に入らざるは、枯柴・燥荻の類を積めるに似たり、油斷すべからず、中途に之を止むべし。』となせしが、操、黃蓋の降を喜びて信ぜしかば、張遼の言に從ふ能はず、既にして果して火起れり。）焰炎天を燒き、北軍狼狽し、人馬の溺燒算なく、陸上の營舍皆燒く。周瑜の軍大に呼噪し之に乘ぜしかば、曹操大敗し、辛うじて脫せしが、其の軍皆飢疫に惱み、殆ど大半を失へり。かくて赤壁の戰は、曹操の江南併呑、天下一統の企圖を水泡に歸せしめ、曾て諸葛亮が其の出廬に方り、其の主備に說けるが如く、天下三分鼎立の形勢の基をなせり。

○桃園に義を結ぶ　劉備字は玄德、涿縣の人、音少くして禮を以て人に下り、喜怒色に現はさず、其の志極めて大なり。身長七尺五寸、兩耳は肩に垂れ自ら之を顧る、左右の手は長く伸びて膝を過ぐ、もと黃巾の賊を討たんとして起れり。

其の義弟關羽は河東の人、字を雲長と云ふ。身長九尺五寸、鬚の長さ一尺八寸、丹鳳の眼、臥蠶の眉、面は長棗（チヤウサウ）の如く唇は抹硃（マツシユ）の如し。後に八十二斤の青龍の偃月刀を作り、天下一の名馬赤兎に跨り、白馬・延津の戰には、顏良・文醜を斬つて、袁紹の心膽を寒らしむ。

其の義弟張飛字は翼德、涿郡の人、豹頭・虎鬚にして聲雷の如く勢奔馬に似たり。後に丈八の蛇矛を造り、首を斬る事蚕の物を探るが如し、長板橋上に曹操雲霞の大軍を叱咤し、又巴蜀平定に大功を立てたり。

此の三人花盛りなる桃園に會し、白馬烏牛を宰つて天地を祀り、誓て兄弟の義を結び、願はくは三人同年同月同日死なんと

先づ年長なる劉備を兄とし、關羽を次とし、張飛を弟とす。關羽は赤壁の戰後荊州を治し、江陵より樊城に出で襄陽を奪ひ、將に中原に威を振はんとせしかば、魏の恐れ、吳の嫉視する所となり、兩軍の爲めに陷れられ、麥城に走り吳の呂蒙に殺さる。

張飛は吳の魏に通ぜし爲め義兄關羽の殺されしを憤り、劉備と共に吳を討たんとし、出師準備をなせしに、其の部下范彊・張達の二人、主を怨む所あり、遂に張飛の寢首を搔落し吳に逃れたり。

劉備、大に怒り二弟の仇を報ぜんとし、諸葛亮以下の止むるを聽かず、自ら大軍を率ゐ吳を討ちしが、吳將陸遜の爲め連破せられ、辛うじて白帝城に還り、病革りて死す。かくて同日に死なんの誓は遂に守られざるの不幸に遇へり。(帝國文庫通俗三國志による)

○蜀漢の五虎將軍　前記の關羽・張飛に加ふるに、趙雲・馬超・黃忠を云ふ。趙雲字は士龍、備、曹操に逐はれ長板の戰に破れて吳に逃るるや、妻子を棄てゝ走る。趙雲、張飛の進り戰ふを機とし、自ら後主劉禪を抱き縱橫に敵中を突破し、備の下に馳せつけたり。後、備に從うて漢中の戰以下勇戰功を立つること關・張に次ぐ、年八十にして蜀に死す。備曰く「子龍は一身すべて之れ膽なり。」と、馬超字は孟起、茂陵の人、備に從ひて轉戰大功を建つ、渭水の北に魏衛許褚と戰ひて勇名あり、後、驃騎將軍、涼州の牧となれり

黃忠字は漢升、南陽の人、備に從ひ蜀に入り益州を定む。常に先登諸陣を陷れ、其の勇猛三軍に冠たり。後漢中を攻め、定軍山に魏の猛將夏侯淵を斬りて之を大敗せしむ。此の年備漢中王となり、大に忠の功を稱し、爵關內侯を以てせしが、明年死せり。

第五節　曹魏の簒奪と東漢の滅亡

○荊益二州の平定　赤壁の戰後、備荊州を根據とし、劉表の舊部を統べ、江を泝り巴・蜀を定め成都を陷れ劉璋（劉焉の子なり）を降し、自ら益州の牧を領せり。然るに荊州の地は、成敗の後より見れば、赤壁の戰に最も功ある吳の有に歸すべき形勢なるに、備從はず、關羽をして之を守らしめ、屢〻吳と爭ひしが遂に和し、湘水を界として分ちたり。（史家、荊州につきては論をなすもの多し。劉備之を吳に借りて返さず、其の否備にありとし、或は荊州を備に貸せしとなすは、吳人の揑造なりと說く。此の地もと劉表の地にして、其の子劉琦は備の軍中にあり、備又赤壁の戰に功なしとせず、況や華容道に於ては魏軍大敗、關羽昔日の好を重んじ、蠡中の曹操を僅に脫せしめたる程なり。備の荊州を保つ當然なりと。）

かくて天下三分の形勢全くなり、備は魏と戰ひ、其の臣黃忠は定軍山に夏侯淵を斬り、趙雲は曹操の大軍を擊破して漢中を奪取せしかば、備、漢中王を稱し、關羽は荊州より北上し、漸次中原に勢を張らんとせり。

然るに關羽の威を振ふは、荊州を兼併し、吳を壓するの嫌あるを以て、孫權喜ばず、魏と通じて遂に背後より之を襲ひ、呂蒙をして關羽を殺さしめ、自ら臣を魏に稱したり。

東漢の滅亡　三國中、魏の曹操最も智謀に富み、大略ありて幾多群雄を平定せしが、遂に帝位に上らんの志あり。自ら魏公となり、九錫を受け、尋で王と稱し、車服を天子に準じたりしが、未だ漢祚を簒ふに至らずして死し、其の長子曹丕（ヒ）次ぎ遂に獻帝に迫り、名を禪讓に假りて漢祚を奪ひ、己に位を讓らしむ。

時に西紀二二〇年、東漢は十三帝百九十六年、高祖より四百二十六年を以て滅びたり。曹丕帝に卽き國號を魏と稱し、父曹操を追尊して武帝と云ふ、丕一度禪讓に名を藉り、簒奪を行ひて天下

の耳目を蔽ひしより、晉・南北朝・隋唐等皆之に倣へり。

第七章　三國及び西晉

第一節　三國時代

蜀吳の和戰　曹丕既に漢祚を簒ひ、都を洛陽に奠め、文帝と稱す、時に献帝弑殺せられしの報ありしかば、西紀二二一年劉備意を決し、帝位に成都に卽き國號を漢と稱す（史家蜀にあるを以て蜀漢とす。）卽ち蜀漢の照烈皇帝之なり。尋で後八年、吳主孫權も帝を吳都建業に稱し、吳の大帝と云ふ、三國の攻爭は既に之より始まる。

照烈、關羽の敗死に悲憤し、諸臣の諫を卻けて進發せしが、吳將陸遜と戰ひ、火計に遇ひて大敗し、其の四十餘營を擊破せられ、辛うじて白帝城に入りしが、丞相亮及び後主劉禪に遺言して遂に死せり。禪、時に十七歲之を蜀の後主とす。亮、丞相たることもとの如く、忠誠之を佐け、よく民を綏撫して蜀國の基礎漸く固し。吳既に魂に臣事せしも、質子を出さず、文帝怒りて兵を示すに及び、蜀と和せんの志あり、亮卽ち怨を捨てゝ吳と結び、蜀・吳聯合して魏に當れり。

西紀二二三年魏の文帝吳を伐ちしも目的を達せず、江水の漲溢を見、武騎千群も施す所なしと

歎じて退き、其の翌年再び吳を伐ちしも、江水の洶湧せるに遇ひ、天の南北を限れる所以を嗟き遂に軍を班したり。三時時代の形勢は巴狀分爭にあらず、實は强魏一國に對する蜀・吳二國の對抗にして、魏の實力優に此等二國に匹敵せるものと見るべし。文帝在位七年、西紀二二六年を以て死し、子明帝代れり。

蜀魏の攻爭　諸葛亮、吳と和してより專ら國力を養ひ、兵甲を充たし、南夷を伐ち其の王孟（マウ）獲（クワク）を七縱七擒し、之を心服せしめて後顧の憂を斷ち（孟獲曰く『公は天威なり敵すべからず。』と、されど七縱七擒の說疑はしとなすものあり。）西紀二二七年出師表を上り、遂に諸軍を率ゐて魏を伐つ。關中震駭し、天水・南定（甘肅秦昌府隣西縣）安定（甘肅涇州及平涼府）皆叛きて蜀に應ぜしかば、明帝、恐れ張郃（カウ）を遣りて之を拒がしむ。

亮、進んで祁山（秦昌府西和縣北）を攻めしが、翌年亮の部將馬謖（ショク）、亮の節度を守らず、街亭に大敗せしかば、亮兵を引きて關中に歸り、淚を揮ひて謖を斬れり。

亮更に出師表を上り、屢〻兵を出して魏を伐ち、祁山に屯し、散關を出で陳倉を圍みしも、糧食續かず、魏の猛將張郃を木門道に殺し、遂に兵を班せり。

西紀二三四年亮農桑を勸め、士民を休養して軍糧を充し、更に兵を率ゐて、斜谷口（陝西漢中府保城縣）より五丈原に出で、屯田策を講じ、魏將司馬懿（字は仲達）と對せしが、懿、亮を恐れ敢て戰はず、よく之を拒ぎ亮をして志を逐げしめず、幾ならず亮陣中に病みて死し、蜀軍引還したり。

吳の大帝、蜀と約する所あり、亮と相呼應し、西紀二三一年魏軍を阜陵（安徽徐州全椒縣）に破りしが續かず、明帝自ら軍を督して之を退く。西紀二三四年亮五丈原に出でし時、吳帝大軍を出し、陸遜等と共に魏を伐つ、明帝、司馬懿をして亮に當らしめ、戰を禁じ自ら拒ぎて吳軍を退く。

魏の明帝　初め漢末の擾亂に際し、董卓、公孫度を以て遼東の大守とせしに、度、東高句麗、西烏桓を伐ちて自立し、平州の牧を領せり。其の子康は魏と好を通ぜしが、孫淵に至り、屢〻吳と通じ、燕王の封を受け反せしかば、明帝怒り司馬懿をして之を滅ぼさしめ、遼東（眞蕃地方）玄菟、帶方（樂浪郡を割き帶方郡とす。）樂浪の四郡を定めたり。

明帝、土木を好み、奢侈に耽る所ありしも、性、沈毅、明敏にして學を好み、經學を奬勵し、律令を明修す、將士よく其の大略に服せしかば、蜀・吳聯合し魏を攻むるに及びても恐るる所なく、其の國力益〻發達し、優に二國を壓したり。

明帝在位十三年、西紀二三九年死し、太子芳立つ、歲僅かに八歲、太尉司馬懿、大將軍曹爽（サウ）遺詔を受けて共に政を輔く。

司馬氏の專橫　魏の曹爽權を專らにし徒黨を結びて、不臣の行多し、司馬懿ついで太傅に遷

りしが、遂に其の二子師・昭と謀り、曹爽の逆謀を强ひて、三族と共に之を夷し、自ら丞相となり專ら家門を營立し、他日司馬氏簒奪の地をなせり。

魏は曹操以來、諸帝酷薄にして、骨肉を疎外し、外戚を信ぜず。爲めに帝室孤立の悲運にあり、懿既にして死し、師、政を執りて專横なり、母丘儉・文欽等爲めに兵を擧げ、師を討たんとして克たず、帝芳、又師を惡みしかば、師、遂に帝を廢し、明帝の姪髦を迎立せり。師、死して弟昭代り、晉公に封ぜられ勢益〻盛なり、帝、之を喜はず昭を誅せんとしてならず、却りて其の黨に弑せられたり。

昭、卽ち文帝の姪を迎立し元帝とせしが、此の時旣に國家の實權は、悉く司馬氏に歸し、帝亦如何ともする能はざるに至りぬ。

蜀漢の滅亡　諸葛亮死して蜀は俄然衰へしが、尙費禕・蔣琬・董允の諸將あり、兵勢を養ひて固守を主とし、時に魏の曹爽の大軍を漢中に破れり。されど後姜維政を執り、其の才武を負ひ、屢〻兵を外に用ひ國力漸く竭き、內は帝劉禪嬖臣に任じ政頗る亂る。旣にして蔣琬・董允及び費禕等前後世を去りしかば、姜維を諫むるものなし、維遂に攻勢を取り、亮に倣ひ西紀二五四年大軍を率ゐ、祁山方面に出でたり。費禕、屢〻姜維を諫めて『故丞相諸葛侯も尙ほ外征に困しみ給へり、況や菲才なる吾等に於てをや。』と、固く防守を旨としたり。

司馬昭遂に西紀二六三年、鐘會に兵十餘萬、鄧艾に兵三萬を率ゐしめ、蜀を伐たしむ。鐘會進みて之に迫るや、姜維退きて蜀國第一の險要たる劍閣（四川保寧府劍州の東北）に拒ぐ、魏軍攻めて拔く能はず、然るに此の間鄧艾は、狄道（甘肅鞏州府狄道州）より間行し、陰平（四川龍安府の北境）に出で、無人の地を行く七百里、山を穿ち橋を通じ、木に攀ぢ崖に緣り、氈を以て身を裹み、推轉して下り、敵背に出で、諸葛瞻（亮の子）の綿竹（四川綿州府德陽縣）に拒げるを破り殺し、猝に蜀都に迫りしかば、帝禪策の出づる所を知らず、遂に降れり。時に西紀二六三年蜀漢は昭烈帝より二帝四十三年を以て滅べり。帝禪の皇子北地王諶は、流石男子の意氣地を存せしかば、帝に勸めて『父子一戰城を以て社稷に殉じ、先帝昭烈に見えん。』と云ひしが、帝聽かずおめおめ敵に降り、安樂公に封ぜられ、後世に笑ひを殘せり。北地王が昭烈の墓に哭し、妻子を殺して自殺せしは、祖父昭烈の血の通へるを見るべし。帝禪の如き凡庸には諸葛亮も輔佐の甲斐少かりしなるべし。

蜀漢の世系

西漢景帝——中山靖王勝……(一)昭烈帝（備）——(二)後主禪（四二）

魏の滅亡　昭、蜀を滅すの功により、元帝より爵位を進められ、晉公となりて九錫を加へらる。魏の內狀此の如きに當り、鄧艾蜀都にあり、功を矜りて制を專にし、自立せんの志あり、鐘會もと鄧艾と惡しきを以て、之を除かんと謀り、其の反狀を密告し、不意に督軍の將をして艾を成都に捕へしめ、己は蜀の降將姜維と共に反を計りたり。姜維、魏の諸將の不和を利し蜀漢を復興せんとし、會をして北來の諸將を殺さしめんとせしが未だ果

さず。

既にして會の將士等起り、會及び維を殺し、艾も曩に監軍衛瓘に捕へられしが、茲に至りて殺され、蜀を征せし二大將滅べり。

司馬昭蜀を滅してより威望俄に高く、爵を進めて晉王となりしが、死して子炎嗣ぐに及び西紀二六五年遂に元帝に迫りて位を讓らしめ、自ら皇帝の位に卽き、國を晉と號す、卽ち西晉の武帝にして、魏は茲に至る迄、五帝四十六年にして滅べり。

魏の世系

曹操（武帝）
- 燕王宇 ― （五）元帝（六）
- （一）文帝（丕）（一七）
  - （二）明帝（叡）（一三）― （三）廢帝芳（一四）
  - 東海定王霖 ― （四）廢帝髦（六）

吳の滅亡と晉の一統　吳の大帝孫權は、西紀二五二年を以て死し、其の後孫峻・孫琳等の權臣、威權を擅にし國政衰れ、三傳して皓（孫權の孫）位に卽けり。皓、疎暴にして酒色に耽り、國政を顧みず、されど名臣陸抗（陸遜の子）の存するあり、吳の軍事を都督し、誠忠國事を憂ひ、屢〻上疏して國運の危機に頻せるを說きしが、聽かれず。西紀二七九年晉の益州の刺史王濬（シユン）武帝に上疏し、『吳を討つの命を待つもの既に七年なり。』と、羊祜・王濬命を受けて吳に對せしに、吳將陸抗又之に對し、兩軍禮を以て持し、交情密なりき。

○陸抗既に死し、吳の君臣淫樂に耽り、晉又憚かるの者なし、武帝、意を決し、西紀二七九年六道より大軍を發し、杜預（ト）は江陵より、王濬は巴蜀より進み、石頭城より建業に迫りしかば、吳帝皓遂に降り歸命侯に封ぜられたり。時に西紀二八〇年吳は帝と稱する四世五十二年にして滅び、晉は江南を併せ天下を一統す、三國鼎立以來凡そ六十年、漢末分裂以來八十餘年なり。

吳の世系

孫堅
- 孫策
- 大帝（權）（二三）
  - 南陽王和 ― （四）烏程侯皓（一六）
  - （二）廢帝亮（六）
  - （三）景帝休（六）

西晉の世系

司馬懿
- 司馬師
- 司馬昭
  - 琅琊武王伷
  - （一）武帝（炎）（二六）
    - （二）惠帝（一六）
    - 吳孝王晏
      - （四）愍帝（四）
    - （三）懷帝（六）

第二節　西晉の治世と其の滅亡

武帝の失政　西晉の武帝は、魏の孤立して滅びしに懲り、天下一統の後は左の方策を取る。

(一)子弟を各〻要地に分封して兵權を與へ、王室の藩屏たらしめしが、諸王の威望重く、却て王室を凌ぎ、[illegible]王の亂の源をなせり。

(二)當時[illegible]族たる鮮卑・匈奴・羯・氐・羌等の夷狄、內地に移りて、雜居するもの頗る多く、郭欽の如きは上疎して、之を停めんことを請ひしが、武帝放漫にして之を許さず、且其の豫防を怠り、後年五胡十六國の夷狄跋扈の基を開けり。

(三)武帝吳を滅ぼせし後は氣驕り、內は遊宴に耽り國政を顧みず、外は州郡の武備を撤し、後年內憂外患の因を遺せり。

八王の亂　西紀二九〇年武帝死し、太子衷立ちて惠帝となる。太后楊氏(武帝の皇后)の外戚は、武帝在世中より既に專橫なりしが、茲に至り太后の父楊駿太傅大都督となりて事を用ひ、武帝が其の叔父汝南王亮に詔し、惠帝を佐けしめんとせしを妨げ、詔を矯め政を專にして顧みず、亮頗る之を怨めり。

(一)惠帝の皇后賈氏容貌醜陋なれども、險姦にして權略に富む、楊太后と善からず、卽ち汝南王と謀り、楊駿の謀反を誣ひて之を殺し、太后を廢して庶人とせり。

(二)[1]汝南王國政を統べ、漸く威福を擅にするや、賈后之を惡み、[2]楚王瑋(惠帝の弟)と謀り汝南王を殺し、尋で瑋を誣殺して、自ら權を專にし、太子遹(イツ)は己の腹に出でざるを以て之を殺し、更に楊太后をも弑するに至れり。

(三)汝南王の弟[3]趙王倫京師にあり、是に於て兵を擧げ直に宮に入り、賈后を廢し尋で弑し、自ら相國となりしが、遂に無力なる惠帝を廢し、王位を僭せり。

(四)[4]齊王冏(ケイ)は初め趙王と共に行動せしが、趙王獨り勢を專にするを嫉み、[5]河間王顒(ギヤウ)並に[6]成都王穎(エイ)の二人に說き、與に兵を起して倫を誅し、惠帝を復位せしむ。

(五)河間王功を恃み、國政を執り權を專にせしかば、[7]長沙王乂(カイ)兵を擧げ河間王を殺し、代りて大權を握れり。

(六)既にして成都王穎は長沙王の專權を惡み、再び河間王顒と兵を合せ、長沙王を破り代りて朝權を執る。

(七)是に至り[8]東海王越兵を擧げて長安に迫り、惠帝を奉じ二王を逐ひ、更に代りて政權を得たり、